

トメイト量産工場

トメイト

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

思いついたものを適当に投稿するところです。

※決してGOD EATERの世界をトマトを量産して救う物語ではありません。

名前変えました。

一発もののお話→トメイト量産工場

目 次

問題児たちが異世界から来るそうですよ？編

神機使いも異世界に来てしまったようですよ？

神機使いが異世界に来てしまったようですよ？そこに！

その他一発もの

もしも仁慈が聖杯戦争に呼ばれたら

F a t e / G r a n d O r d e r に召還されたようです

40

S (すつごく) A (頭のおかしい) O (お兄さん)

逃げたいのはこっちなんですけど……

もう最後の王とか要らないんじやないかな

誰も知らない男の物語

過去最高レベルのキチガイが行くH S D D

神殺し先生仁慈

カルデアでの日常

つまりアラガミってことだな！

異端児と異常児と

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろうか編

もしも仁慈がだんまちの世界に来たら

もしも仁慈がだんまちの世界に行つたら そのに！

もしも仁慈がだんまちの世界に行つたら そのさん！

何でこう偉い人って話し聞かないの？ b y仁慈

神機使いの苦労はこれからだ！

ダンジョンに神機使いがいるのは間違っている

最強と最凶が交わるのは間違っているだろうか？

神機使いのオラリオでの日常

1対3とかもはやいじめじゃないかな

バレなきや問題ないんですよ

戦争遊戯（笑）

そして伝説へ……

人類最新のキチガイが往く grand order

特異点が往く特異点 F

特異点 F（後）

問題児たちが異世界から来るそうですよ？編
神機使いも異世界に来てしまつたようですよ？

いつもの自室、何時もの食事、何時もの狩り、何時もの書類仕事……
目が覚めたら知らない場所に居たなんて面妖な状況に陥ることはな
くごく普通に日常を謳歌していた。

まあ、アラガミぶつ殺しまくつて大量の書類仕事を片付けることを
日常と読んでいいのかは結構疑問だけど。

カリカリカリと自室で山済みにされている書類を片つ端から片付
ける。この前、このハードワークが原因で異世界に行つたり、今でも
時々呼び戻されたり、寝ていたときに体を改造されかけたりしたのに
まつたく仕事の環境が改善されていない。……実はまた過労で寝込
むのを狙つてんじやないのだろうか……俺の体を調べたり改造した
りしたいがために。

勝手な想像だけどあなたがち間違つてないとと思うなあ。

正直、俺にそう思わせるほどの前科があるマッドコンビにはある。
終末捕食を防いでから三年とちょっと、どれだけ俺が苦労させられた
か。

でも、くやしい……仕事しちゃう……（カリカリ）。権力には勝てな
かつたよ……。

「仁慈」。追加の書類持つて来たよー」

「あのさ、常々思うんだけどさ。実働部隊である俺がいくら隊長と
は言えここまで量の事務仕事任されるつておかしくない？」

「そんなこと私に言われても困るんだけどー？」

「あのダブルマツドに訴えに行くから手伝つて」

「私この作業気に入つてるから行かない」

「そら、お前は書類運んで俺が一生懸命書類書いているのを眺めて
いるだけだから楽だろうよ！」

ようやく終わりが見えていた書類の横に新たな書類をドサリと置
いてからソファーに座るナナそしてニコニコしてこちらを見るのだ。
かわいいけど殺意沸いて来るわあ。

「あ、そうそう。書類に混ざつてこんなのがあつたよ」

といつてナナが投げていたのは一通の手紙。どこか高級感溢れる
黒いそれは差出人の書いていない手紙であつた。しかし、しつかりと
樺原仁慈様へと書かれている。

この時代に、こんな高そうな手紙を名指しで贈るとか……フエンリ
ルのえらい人だつたりするのだろうか？俺の体のことがばれて解剖
させてくれとか、そんな事だつたりするのだろうか？

「ナナ、これは？」

「さあ？いつの間にか届いてた手紙。差出人は書いてないけど、と
りあえず仁慈宛だから渡しておこうかと思つて」

「適當だなあ……まあ、仕事が終わつた辺りで読んでみるとするか
……」

それから数時間。書類と激闘を繰り広げてなんとか勝利した俺は、何故か部屋においてあるコーヒーメーカーでコーヒーを一杯入れるとそれをチビチビと飲みながらナナにもらつた差出人不明の手紙を開ける。

このには唯、こう書かれていた。

『悩み多し異才を持つ少年少女に告げる。

その才能の試すことを望むならば

己の家族を、友人を、財産を、世界の全てを捨て、我ら“箱庭”に来られたし』

俺は年齢的に少年とは言えないんだけどな。

そうして、開けた手紙にツッコミを入れてみれば、いつぞやの異世界旅行と同じように、はるか上空からのパラシュートなしスカイダイビングまたの名を自殺を結構する羽目になつた。

「はあ……」

もう、溜息しか出ない。

何でこう毎回毎回ファンタジックなことが起こるのだろうか。サカキ支部長とラケル博士は「地球が君を外に追い出したがっているんだよ」とかいうふざけた理由を話してくれたけど……。このような状況に結構な頻度で巻き込まれていて現状を考えるとあながち間違いじゃない気がしてきたよ。

とまあ、そんな事を考えている間も落下し続けているのでとりあえず状況の整理をしようと思う。周囲、遠目に見えるのは断崖絶壁だし、見たこともない都市がある。ついでに美しい水や森もある。

ここまでそろえれば分かるだろう。完全に異世界である。もうこれは想定内だからいいとして問題なのは俺と共にこの自殺とも呼べるスカイダイビングを決行している人たちがいることだ。

十代半ばの少女が2人と少年が1人、ついでに猫が一匹居る。ドレス、学ラン、私服これまた見境のないことだ。俺と同じくあの怪しい手紙を見て飛ばされてきた被害者だろうか。このままだと、纏めてつぶれたトマトのようなことにな——

ドバンツ！

……考えすぎたようだ。

いつの間にやら、俺の体は大空ではなく下にたまたまあつた何重もの水の膜に落ちていた。おかげでかなりの高度から落下したにも関わらず体には怪我一つない。

洋服はびしょびしょのズブ濡れだけど。

仕方がないので、とりあえず水の膜から這い上がり、服を絞つて出来るだけ水を無くす。するところでおかげで俺は重大にしてとんでもないことに気がついた。

「(……神機がない！)」

これはまずい。

武器無しで異世界旅行は流石に始めてだ。これ、下手したら死ぬんじゃないかな……。

「し、信じられないわ！まさか問答無用で引きずり込んだ挙句、空に放りだすなんて！」

自分の現状に若干絶望していると、俺と同じく手紙によつてこの世界につれてこられたらしいドレス姿の少女が文句をたれていた。激しく同意である。

服を絞り終え、自分の現状にも粗方絶望しえたので意識を切り替えて周囲の状況をくまなく確認する。これと言つて危険というものはない。生物の気配は多多あるものの、どれも敵意等は持つていないうことが分かる。

物凄く近くにこちらを伺つている気配が一つあるが、今は放置しても問題ないだろう。

先程、上空から確認したときには見えた断崖絶壁からこの世界はどうやら地球のように丸い惑星の類ではなく、島のようなものなのだと推測できる。だからといって今は同行できないが一応覚えておくとしよう。

「ちよつと、そこの貴方」

「ん？」

もう少し情報が欲しいため、軽く周辺を歩いてみようかと思つた時、俺に声がかけられた。振り返つてみれば、先程文句をたれていたドレス少女を含めた俺以外の三人がそぞつて俺を見ている。

「なんですか？」

「貴方私達の話聞いてなかつたの？今、自己紹介をしていたところよ。そこで貴方の名前も教えて欲しいのだけれど？」

まつたく気がつかなかつたわ……。

「どうも、樺原仁慈といいます。よろしくお願ひします」

「よろしく。貴方はなかなかまともそうなのね。私は久遠飛鳥。で、そつちで猫を抱えているのが」

「春日部耀」

ドレス少女改め久遠さんの紹介で、私服姿の少女改め春日部さんが言葉を続ける。彼女が名前を言つた後、久遠さんは若干嫌な表情で学ランの少年に視線を向ける。

「そして彼が、」

「そこのお嬢様曰く、野蛮で凶暴そうな逆廻十六夜だ」

金髪学ランにヘッドフォンをつけた少年、逆廻十六夜は獰猛な笑みを浮かべながらそう言つた。どれもこれもキャラ濃いな。

とりあえず、春日部さんと逆廻さんにもよろしく返事を返した後、俺は歩みを進める。自分で探索しようときまでは思つてたけど、よくよく考えたら先程から俺達を見ている気配に聞けばいいということにたどり着いたからである。

「あら？ 何処へ行こうというのかしら？」

「ちょっと情報が足りないので、そこで隠れている人から聞きだそ
うかと」

「ちょ!？」

何でばれてるんですかあ！と小声で叫ぶというとても器用なことをしてしてくれる隠れている人。

関心はするけど手心を加えるつもりは一切ないのでさつきとその場所まで向かい、見えたうき耳らしきものを引っ張つて持ち上げる。

「いだだ、いだだだだ!?ちよ、ちよつと！初対面と言うか、しつかりと顔を合わせてすら居ないこの状況でいきなり黒ウサギの素敵耳を引っ張るとはどういう了見でございましょうか!？」

「それはこっちのセリフです。さつきからこそこっちの様子を見て……まさか貴女がここに俺達を呼び出したりした張本人だつたりするんですか?…………もしそうなら喰らうぞ、ウサギ」

「ぎゃああああああ!!この方さつきと全然態度が違います！それと黒ウサギ、未だ嘗て感じたことのない命の危機を感じています！具体的には捕食（物理）の意味でッ！」

仕事終わりでこれから寝ようとしたときにこの仕打ちだつたのと自分でも知らない間にストレスというかなんか溜まつていたらしい。気がつけば色々とツツコミどころのある少女に向かつて好き勝手言つていた。でも止められない止まらない。

「で、こゝに呼び出したのは貴方で合っていますか？」

「合つてます！合つてます！だから一回耳を離して話を聞いてください。これから1から10まで余すところなくお話させていただきますからああああああ!!!」

そういうわれては仕方がない。

俺は彼女のうき耳を開放する。

その隙にうさ耳の少女はすかさずバックステップを踏み、涙目でこちらを数秒睨んでくる。早く説明しろやという意味を込めて睨み返すと彼女は怯えて口を開こうとした。

だが、

「えい」

「ふざや!?」

今この今まで空氣だつたほか3人がうさ耳少女のうさ耳にちよつかいかけ始めたので、彼女は再び泣きを見ることになった。

説明を再開したのはこの一時間後だということをここに記しておこう。

うさ耳少女——黒ウサギが語った内容は以下の通りである。

ここは普通の人ではない存在が集まる世界である。

この世界では修羅神仏や悪魔、精霊、星から与えられた恩恵を使って行うギフトゲームが行われている。

この世界にはコミュニティといいういくつもの集団があり、その内のどこかに必ず所属しなければならない。

ギフトゲームに勝利すると、そのゲームの^{ホスト}主催者が提示した賞品を獲得できる。

賞品には、金はもちろん恩恵や命、土地や権利など様々な物がある。ギフトゲームで決まつたことは割と絶対である。

こんなところか。

そこまで話すと、彼女は説明義務等といい、コミュニケーションでこの続きをしようと言った。

しかし、そこに逆廻さんが待つたをかける。

「――――――この世界は……面白いか？」

手紙に書かれた内容がこの三人に当てはまるなら、彼らは自分の力をもてあましていたのだろう。だからこそその問い。それに対して黒ウサギの返答は、是であつた。

「Yes。『ギフトゲーム』は人を超えたものたちだけが参加できる神魔の遊戯。箱庭の世界は外界より格段に面白いと、黒ウサギが保証します♪」

「なら、俺からも一ついいですか？」

「……なんでしょう」

先程の件が尾を引いているのか若干怯え気味の黒ウサギ。しかし、そんな事はどうでもいい。

「どうやつたら元の世界に帰れますか？」

『――――――』

空気が死んだというのはこのようなことを言うのだろう。誰も彼もが固まったこの空間でそんな事を漠然と思つた。

櫻原仁慈。十九歳。職業神機使い。
異世界に来て早々、帰るを選択した彼の異世界ライフはここから再
び始まつた。

神機使いが異世界に来てしまつたようですよ？その
に！

空気の読めない質問をした自覚はある。しかし、俺は別に悩みなん
てないし異才をもつた少年少女というわけでもない。あの世界は確
かにろくでもないけど、全てをなげうつてまで逃げたいというわけで
もないし。これでも愛着を持つているのだ。

「すみません、それは出来ません」

しかし、黒ウサギが口にした言葉はできないとのこと。おい、あの
手紙開けたら即効転移のものなんだから帰宅サービスくらい完備し
てて欲しい。

「でも、異世界に行くためのギフトはこの箱庭のどこにあるかも
しません」

「なるほど……」

黒ウサギが言つていたことだが、この世界で行われるギフトゲーム
はありとあらゆるものを見品と出来るらしいし、異世界にわたるとい
う能力を持つ何か、もしくは能力そのものが見品とされているギフト
ゲームがあるかもしれないということか。

……まあ、可能性があるならいいや。ぶっちゃけ、向こうに残し
てきたブラッドメンバーも極東の人も俺が失踪したくらいじや心配
しないだろうし。

「帰る手段があるならいいです」

「切り替え早いですね。さつきまで思わずショックで死んでしまって、そうなくらいの殺氣をぶつけて来たのに……」

「切り替えは早くないと生き残れなかつたので。というか殺気なんてぶつけてました?」

「無意識にやつてたんですか……(でも、まあ。今の発言と殺氣の濃度から推測するに戦闘には慣れているご様子。それにこの気配は……これは欲しい人材ですね)」

「それは申し訳ありませんでした」

「い、いえいえ。お怒りはご尤もなものでしたので……(素直に謝れるなんて……ツ! 黒ウサギの本能はこの人に全力で警戒信号を出していますが、人格的には一番まとも! やはり欲しいです!)」

「(へえ、ピンポイントで殺氣をぶつける、か。ハツ、おもしれえじやねえか)」

「(三毛猫。殺氣、感じた?)」

「(いや。まったく感じませんでした。お嬢、あの兄ちゃん結構なやり手のようですぜ)」

「(殺氣を飛ばすなんて……結構野蛮なのね)」

それぞれが別のことを考えつつ、一応俺たちは黒ウサギのコミュニティへと向かつた。

で、その後は色々あつた。

逆廻さんが勝手にどつかに行つたり、黒ウサギが所属するコミュニティは最も大事な名前を失つた最弱のコミュニティだとか、春日部さんが動物と話せたりとか、久遠さんが人を操れる能力を持つて居たりとか、フォレスト何とかのガルなんとかさんがゲスだつたり、ゲーム吹つかれられたり、色々あつたけどカツト。

現在は自分達が持つていてるギフトを鑑定してくれるという商業コミュニケーション、サウザンドアイズに向かつてはいる。黒ウサギ曰く、ギフトゲームをするなら自分の能力は把握してしかるべきだと。まつたく持つてその通りである。

そうして意気揚々とたどり着いたサウザンドアイズだつたが、店じまいギリギリということと何よりノーネームということで入店拒否を喰らつていた。

このような対応が俺達に自身のコミュニケーションがノーネームと黙つていた点だろう。名と旗がないのはこの世界においてかなり痛い、戸籍とか身分証明書がないことと同じレベルなのだろう。そんなところに入る奴は普通居ない。そういうことで、黙つていた。まあ、ここに呼び出された奴は普通からかけ離れてるからそんな事はなかつたけど。

黒ウサギと入店拒否をしている店員のやり取りを眺めていると、唐

突に何かが黒ウサギに向かつて突撃をかました。その飛来物と共に黒ウサギは後方に飛ばされついでに水路に落下した。何だ今の。

「……おい店員。この店にはドッキリサービスがあるのか？なら俺も別バージョンでは是非」

「ありません」

「なんなら有料でも」

「やりません」

店の前では今の光景に影響を受けた逆廻さんと店員さんのくだらないやり取りが繰り広げられていた。しかし、表情は割りとマジだった。

結局、ギフトの鑑定は受けられるのか受けられないのか、どっちなんですかね。

誰も彼もが好きに行動する中、俺はそう考えて溜息を吐いた。

紆余曲解を経て、ノーネーム一行はなんとかサウザンドアイズの中に入ることが出来た。最も、店のほうはもう閉まつてしまつたために黒ウサギにフライングアタックを食らわせて水路に叩き込んだ銀髪和服の少女、白夜叉のであるが。

そこで、彼女は簡単に自分の自己紹介とこのこの世界の説明を行つた。

この箱庭と呼ばれる世界の都市は上層から下層まで七つの支配層に分かれており、それに伴つてそれぞれを区切る門には数字が与えられている。その中でも東西南北に分かれている。

数字は内側に行くほど小さくなつていき、それに伴いそこを拠点としているものたちの実力も上がる。四の柵の門に本拠地を構えるサウザンドアイズは名のある修羅神仮の魔窟でも残つていける実力があるということで、この白夜叉も相当の実力者であることが容易に予想が出来た。

そこで話は十六夜が独断行動を取つたときに倒した蛇神の話になつた。神という単語を聞いて若干仁慈が体をびくりと震わせたが、誰も気付くことはなかつた。

「して、一体誰が、どのようなゲームで勝つたのだ？知恵比べか？それとも勇気を試したのか？それとも、黒ウサギの隣にいるウサギのようなカラーリングの童か？」

「いえいえ。そこに居る十六夜さんが素手で叩きのめしました」

「なんと!? クリアではなく直接倒したと!？」

これには流石の白夜叉も驚きを隠せないようだつた。

なぜなら神格を倒すには原則同じく神格を保有しているか、もともとの種族の性能が天と地ほどの差がないとありえないことであるからだ。蛇と人、この二つには神格を覆せるような性能差はない。

だからこそ、この箱庭の者達はまず第一に神格を手に入れることを目標とする。

白夜叉は十六夜が神格を持っているのかと疑うもすぐに黒ウサギが否と答えた。神格持ちは一目で分かるからである。

「うーむむ、なんとものお……あの蛇がのお」

「あの……白夜叉様はあの蛇神様のことを知っていたのですか？」

「知っているも何も、あやつに神格を与えたのは私だ。もう何百年も前の話になるがの」

そう彼女が口にしたとたん、蛇神と直接戦った十六夜が瞳に物騒な光を灯しながら口を開く。

「へえ？ ジゃあ、お前はあの蛇より強いのか」

「ふふん、当然だ。私は東側の階層支配者^{フロアマスター}だぞ。この東側にある四桁以下のコミュニティでは並ぶものが居ない、最強の主催者^{ホスト}なのだから」

最強の主催者。その言葉に十六夜、飛鳥、耀の問題児トリオは新しいおもちゃを目の前にした子どもの如く目をキラッキラさせた。

最後の1人である仁慈は嫌な予感をびんびん感じたのか黒ウサギのほうに移動し、彼女にあの三人を止めるように小声で話しかけていた。

「黒ウサギさん、黒ウサギさん」

「? なんでござりますか？ 仁慈さん」

「絶対あの人たち白夜叉さんに喧嘩吹つかれますよ。なんとか止めてください」

「ヴエ！？」

バツと黒ウサギが問題児達と白夜叉に視線を向けたが遅かった。

彼らは既に喧嘩を吹っかけ、白夜叉も受ける気満々の気配が漂つている。

「え!? ちょ、ちょっと御三人様!？」

「よいよ黒ウサギ。私も遊び相手には常に飢えている」

この東側最強の階層支配者。ノリノリである。それと同時に黒ウサギにはもうどうすることも出来なかつた。白夜叉がやる気満々である以上、あと止めるのは問題児たちなのだが、彼らが黒ウサギの話を聞いてくれるわけがない。

「仁慈さん。なんとかしてあの馬鹿様達を止めてください！」

「無理です。どうにも、ガル何とかさんの一件で腰抜けのレツテルを貼られたようで話聞いてくれないんですよ。それにほら、彼女達も思春期ですし……ね？」

「大して年も離れていないくせになに言つちやてるんですか！」

と、黒ウサギが叫ぶがもう遅い。

白夜叉と問題児達は黒ウサギと仁慈のやりとりなんて完全にスルーして話を進めていた。

そして、白夜叉は着物の裾からサウザンドアイズの旗印が描かれているカードを取り出し、壯絶な笑みで

「おぬしらが望むのは挑戦か？それとも――決闘か？」

その一言で彼らが居る場所は一変した。

畳が引かれた部屋ではなく、白い雪原と凍る湖畔そして、太陽が水平に廻る世界だった。

「…………なつ!?」

あまりの変化に問題児達は愕然とする。

当然だ。今白夜叉が行つたことは世界創造にも等しい奇跡。これほどのものを見せられて驚かないはずがなかつた。

ちなみに仁慈はまた世界が変わつたという感想しかもつておらず、白夜叉が起こしたことにひとかけらも興味を持つていなかつたからである。後、喧嘩売つてないし関係ないかとも思つていた。

「今一度名のりし、問おうかの。私は白き夜の魔王——太陽と白夜の星靈・白夜叉。おぬしらが望むのは試練への挑戦か?それとも対等な決闘か?」

実力差を見せ付けられた十六夜たちに選択肢はなく、彼らは今回は試練を受けると挑戦を選んだ。

その答えに笑いを溢すと今度はその視線を仁慈へと向ける。

「では、最後にそこの神格持ちの小僧。おぬしはどうする?」

白夜叉の言葉に十六夜たちがバツと一斉に仁慈のほうを向いた。なぜなら彼が神格持ちなんて今の今まで知らなかつたからであるし、飛鳥と耀はガルドが暴れようとした際にかけらも動けなかつた仁慈が神格もちということが信じられなかつた。

驚きの表情を浮かべる十六夜たちと同様に仁慈本人も驚愕の表情を浮かべる。

「え?俺?」

「おぬし以外に誰が居るというんじや」

「ええ？ 神格持つようなことしたか……？ まあ、いいや。とりあえず挑戦をお願いします」

彼の言い分に納得がいかないのか苦い表情を浮かべる白夜叉だが、それ以上追及することはせずに彼らの試練を用意したのだつた。

出された試練には耀が立候補した。

内容はグリフオン背に乗つて湖畔を飛びきること。

多少のアクシデントは合つたもののなんとかクリアした耀のおかげで四人ははれてゲームをクリアすることが出来た。

そこで、ゲームをクリアした十六夜たちに白夜叉からあるカードが送られた。それはギフトカードといつて、自身の持つギフトを見ることが出来たり、手に入れたギフトを収納できる高価なカード（黒ウサギ曰く）をもらつた。

コバルトブルーのカードに逆廻十六夜・ギフトネーム 正体不明

ワインレッドのカードに久遠飛鳥・ギフトネーム 威光

パールエメラルドのカードに春日部耀・ギフトネーム 生命の目録

ノーフオーマー

ブラッドレッドのカードに樺原仁慈・ギフトネーム

ゴッドイーター

メタモルフオーゼ

アルティメット・ヒーロー

全人類の究極幻想

神殺し

「そのギフトカードは正式名称はラプラスの紙片という。要は全知の一端だ。そこのカードに刻まれるギフトネームはおぬしらの魂とつながった恩恵の名称。鑑定は出来ずともそれをみれば大体のギフトの正体が分かるというもの」

白夜叉の言葉を聞いて仁慈は思つた。

「（神殺^{ゴッドslaughter}し）は分かる。ただ、^{メタモルフォーゼ}形状変化^{アルティメット・ヒーロー}全人類の究極幻想つてなんだ!?」

まつたく心当たりがないため、カードを見つめたまま固まってしまう。すると、彼を不思議に思つたのか黒ウサギが横からひょこつと彼のカードを覗き込み、絶叫した。

「な、ななな、何ですかこれは!?」

あまりにオーバーなリアクションにその場にいた全員がござつて仁慈のギフトカードを覗き込む。

「へえ……なかなか強そうなギフトじゃないか」

「どうか神殺しつて」

「形状変化……？」

それぞれが気になつた単語を上げていくが、彼のカードを覗き込み一気に真顔になつた白夜叉は仁慈に声をかける。

「…………なあ、おぬし」

「なんでしょうか？」

「もう一つ、試練を受けていかないか？」

場所は再び白夜叉さんが生み出した世界。
そこには俺と白夜叉さんが対峙している。

「今回のゲームはこれだ」

『

ギフトゲーム名 白き太陽を喰らう狼

プレイヤー一覧 横原仁慈

クリア条件 白夜叉と対峙する

クリア方法 白夜叉に認められる

敗北条件 降参か、プレイヤーが上記の条件を満たせなくなつた場合。

宣誓 上記を尊重し、誇りと御旗とホストマスターの名の下、ギフトゲームを開催します。

サウザ

ンドアイズ 印

』

これ無理、ゲージやねえの？

単純に考えて、神機もつて居ない俺が、世界を丸々POMと作れる奴と戦えるわけがないと思うんだが……。

「心配せんでも、しつかりと手加減してやるわ」

そうからから笑う白夜叉さんだが、こちとらまつたく笑えない。間違いなく人生の中で一番の危機と直面している。下手すると終末捕食よりもやばいかもしない。

「では、行くぞ」

雰囲気が一変する。

今までのような笑みはなく、唯真顔でこちらを見てくる。外見は少女に限りなく近い幼女だというのにこの威圧感は違和感が半端じやない。

とか、思つてているうちに目の前に焰が現れていた。

「——っ!?

とつさにバックステップで回避するが、背後には既に白夜叉さんが居り俺を思いつきり蹴り飛ばした。

「ぐつ!?

まるでトラックにでも激突されたような衝撃が襲い掛かり、紙屑のように吹き飛ばされる。なんていう力してんだあの幼女!?

二度、三度、バウンドしてようやく勢いが収まってきたため、なんとか体勢を立て直して着地するも、またもや炎が俺を襲つた。しかも、今度は鞭のようになり、俺の体を追いかけてくる。

「その焰は摄氏6000°Cだから、触ると熱いぞ」

「熱いってレベルじゃねえぞ!」

というかプロミネンスのことじゃないですかーやだー。

必死こいて焰の回避しつつ、白夜叉さんの物理攻撃を受け流す。そういうえば夜叉つてことは鬼神だよな。だからこんな怪力なのか。

納得がいったところで余計これ以上攻撃を喰らうわけには行かなくなつた。ここまで考えると今度は自分のギフトカードに書かれていた言葉の能力について考えなければならぬ。何時も神機振るつているだけだつたけど、今回はそれがないから唯一の攻撃手段になりうるギフトのことを考えないとやつてけないわけだ。

小さい足で踵落としを繰り出してきた白夜叉さんの足を回避して、無防備な胴体に拳を叩き込みながら俺は考察する。

神殺しはその名の通り、神に対しての絶対的な攻撃が出来るかとかそんな感じじゃないかな。先程殴つたとき白夜叉さんは面白いくらい吹き飛んだし。

問題は、メタモルフォーゼ形狀變化と全人類の究極幻想である。アルティメット・ヒーロー形狀變化は若干もしかしたら程度だが心当たりがある。まさかと思うことだが、俺の肢体は殆どアラガミといつていい。今でこそ人間の肢体で固定されているが、俺が思えばある程度操作が可能なではないかと考えている。リンドウさんだつて自分から神機作つたらしいし……。でも作り方わからないよなあ。何気なく腕に意識を集中させて神機を思い浮かべてみる。すると、腕が黒く染まり、見覚えのある大きな口になつてしまつた。

「なんで捕食形態やねん」

ネロ・カオスにでもなつた氣分になる。

神機には出来なかつたのか。もう少し正確に神機を思い描いてみるも、まったく変化なし。仕方ないのでこの状態で戦うこととした。

全人類の究極幻想？効果がまったく想像できないので後回し。
アルティメット・ヒーロー

「考え事は終わつたかの」

「え？ ああ、はい。待つててくれてありがとうござm——」

そう声をかけてきた白夜叉。どうやら手加減してくれるということは本當らしく、お礼を言いつつ彼女に向き直ると、

そこには巨大な火の玉……いや、小型の太陽ともいえるものを片手に用意しながらこちらに微笑む白夜叉の姿があつた。

「……マジかよ」

「ほれ、これを翻すことが出来たらおぬしの勝ちだ」

そんな軽々しく言われましても……。

とか考へてゐるうちに彼女は小型の太陽ともいえるそれを放つた。小型といつても本当の太陽に比べれば小さいというだけであつて、普通にでかい。少なくとも今から回避しても間に合わない。ならば、覚悟を決めるしかあるまいよ。

俺は右腕を捕食形態のようにして、小型の太陽に突つ込む。丈夫夫。オラクル細胞は太陽にも多分耐える！

「うおおおりやああああ!!」

でも、熱までは防げませんよね！

小型の太陽にぶつかつた俺はあまりの熱さに自分の選択を即効で後悔した。

白夜叉は今、黒ウサギと新しくノーネームに入つた少年少女たちを見送っていた。同じく彼らを見送つていた店員は白夜叉に話しかける。

「魔王討伐なんて……オーナー止めなくてよいのですか？あのままだとすぐに死にますよ」

「そこは自己責任。私たちがとやかく言うものではない。……それに、大丈夫だろう」

そう言つて、彼女は肘から下がない左腕を見せる。

「何せ、私の左腕と共に神格の一部を喰いちぎつていつた奴も居ることだしな。持つているギフトもギフトだしのう……次は本気で遊んでみたいものだの」

カラカラと白夜叉は笑う。

しかし、その笑みは何時もの笑みとは違い、獲物を見つけた猛獸のように獰猛な笑みだつた。

その他一発もの
もしも仁慈が聖杯戦争に呼ばれたら

「素に銀と鉄。 磐に石と契約の大公。

降り立つ風には壁を。

四方の門は閉じ、王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ」

普通であれば現代で見かけることはないであろう。魔法陣。
明かりもついていない暗い部屋の床一面に広がっている魔法陣の
前で、ランドセルを背負っていても不思議ではないほどの少女が言葉
を発する。

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。

繰り返すつどに五度。

ただ、満たされる刻を破却する」

これは英靈召喚の儀。

万能の願望機たる聖杯を巡り行われる戦争を勝ち取るための駒を
手元に置くための儀式である。

〔 A^{セツ}n f a n g 〕

〔 告げる 〕

汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。

聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

彼女の言葉に呼応するかの如く、魔法陣は光り輝き、窓も開いてい
ない部屋に居るにも関わらず強力な風が吹き荒れる。そんな風に動

じることもなく、少女は言葉を紡ぎ続ける。

「誓いを此処に。

我は常世総ての善と成る者、
我は常世総ての悪を敷く者。

されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。

汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者——。

汝三大の言靈を纏う七天、

抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！

——本来であれば、この場に喚ばれるのはギリシャの大英雄、ヘラクレスであつた。

アインツベルンの悲願である聖杯の獲得……それを達成するためにはアハト翁が最強のサーヴァントを呼び出させようとしたのである。過去に、裏切られたこともあり懲り理性的ないバーサーカーのクラスで顕現するように、少女——イリヤスフィール・フォン・アインツベルンに言つたのである。

彼女自身も、アインツベルンが作り出した最強のホムンクルス……こうして、最強のサーヴァントと最強のマスターをそろえたアハト翁は勝利を確信していた。

——だが、何をどう間違つたのか、喚び出されたのはギリシャの大英雄ヘラクレスではなかつた。

シヤの大英雄ヘラクレスではなかつた。

「…………えー……何これ……。いやその前に何処ここ?」

彼はどう考へても、ギリシャの大英雄ヘラクレスには見えなかつた。着てゐる衣服は現代のそれに近く、バーサーカーのクラスとして顕現した割にはごく普通に何かをぼやいている。

右手に見えるのは、彼の身長と同じくらいの武器である。刀身は死神が持つていそな大きな鎌。そのサイドにはシールドが半分になつたような部分が取り付けられられており、持ち手に近い部分には銃口のようなものが見える。

「…………ツ!なるほど、そういうことなのね……。聖杯つて便利……つていやいや、俺まだ死んでないし、そもそも英靈じやないんだけど……」

何より、召喚された彼の容姿は、彼を召喚した少女イリヤスフィールと同じ銀髪赤眼であつた。

「まあ、いいや。とりあえず、こういうときでは口上が決まつているらしい」

呆然と召喚した彼を見ているイリヤスフィールに対して、喚び出された彼は特にそのことを気にすることもなくマイペースに口を開いた。

「サー・ヴァント・バーサーカー。真名、檍原仁慈。召喚に応じて参上

した……君が、俺のマスターかな?」

「ちよつとバーサーカー!? 私のケーキ食べたでしょ!?

「何故俺を犯人と断定しているんですかねえ……俺以外にもつとや
りそくなやつがいるでしょ。あのメイドさんの片割れとか」

「それは、私のこと? お前、イリヤの下僕の癖に、生意気」

「何でそんなにあたり強いんだよ……。後、そのセリフは口につい
ているクリーム落としてから言つた方がいいぞ」

「ありえない、しつかり落としたはず」

「自白したな」

「あつ……」

「リーゼリット。話があります、後で来なさい」

「……、これはイリヤのじゃなくて、セラの……」

「来い」

ズルズルと無表情ながらも一目見ただけで焦っていると分かるリーゼリットを引っ張りながら部屋から出て行くセラ。

見ただけで激おこと分かる雰囲気をだすセラはまさしく鬼のような形相だつた。俺がスーパーの特売で買つたケーキを食べられたのがとても気に食わなかつたようである。まあ、食べ物の恨みは恐ろしいというし、仕方ないね。

部屋から出て行く二人を見送つた後、俺はイリヤの頭を軽く叩く。

「で、なんであんな嘘ついたわけ？」

「ちよつとからかつて見たくなつたのよ。バーサーカーつたら、ここの最近全然相手してくれないんだもの」

「セラに言われたんだよ。」平日はなるべく魔術の指導に時間を充てたいので、あまり相手をしないでください』って

そのことを告げると、イリヤは頬を膨らませてこちらを睨みつける。しかし、身長の関係で上目遣いになつたり、元の外見が幼女に近い少女なこともあり迫力はない。

「むー……バーサーカーは私の従者でしょ？なんでセラの言うことを優先してるのよ」

「いや、あの人怒らせたらアレだぞ」

そういつてリーゼリットが連れて行かれたほうを指差す。何処に

移動したのかは知らないが、あの無表情お化けの悲鳴のようなものが聞こえてきた時点で想像したくない。

「な？」

「……た、確かに。セラは怒らせたら面倒くさいし、今回は許してあげるわ」

「声震えるけど」

怒らせたことがあるのだろうか。

まあ、イリヤの教育係だというし、何かやらかしたのかも知れないが。もう俺が構わなかつたことはいいのか、膨らましていた頬を戻してひよこひよこと俺の近くまで寄つてくる。

「まあ、それはもういいわ。それよりも、そろそろ行動を開始するから……しつかり心構えしておいてね」

そう。こんなくだらないやり取りをしている我が陣営であるが、もう既に聖杯戦争とやらは始まっていた。
既にそこらでドン☆パチやりだしていたりする。

万能の願望機を巡つて色々やらかす聖杯戦争。当然、それを勝ち残るにはサーヴァントやらマスターやらを倒さないといけないわけで……。

「気が進まないなあ……」

化け物なら情け容赦なく死すべしできるんだけど、人はそうは行かない。一応、これでもアラガミ化する前の人を斬つたことはある。でもそれは止むを得ない事情であるし、斬られる本人も納得していることなんだけど。今回は勝手が違うからな。

俺がそんなことを考えていると、彼女はいつの間にか持ってきた水晶のようなものを覗き込んでいた。そこには2人の男女が移つており、二人とも仕掛けであつたトラップに吹っ飛ばされていた。

「あつはつは、リンは本当に面白いわね。打てば響くっていうのはこういうことを言うのかしら。ねえ、バーサーカーはどう思う？」

「そういうこと言うのは止めてあげなさいよ……」

今、怒っている少女がちよつとかわいそうになつてくる。俺がツイントールの赤い子を哀れんでいるうちにイリヤは赤髪の少年を見て若干トリップしていらつしやるようだつた。なんでも彼とは色々複雑な縁があるのでどか。

「つと、まずいな」

「?どうしたのバーサーカー?」

ここで、俺の気配察知に引っかかった存在がアインツベルン城の内部というか中庭に現れた。1人は普通の人間と同じような存在だが、もう1人はどう考えても人外のそれである。

「サーヴァントが入つて來た。しかも、セラとリーゼリットの近くに居る」

「なんですつて！バーサーカー今すぐ行くわよ！」

「了解！最短ルートのために壁を壊すけどいいよな！」

答えを聞かないでイリヤを片手で捕まえると、もう片方に持つていた神機で壁をブチ破り、中庭に向けて疾走した。

「リーゼリットッ!!」

説教のためにたまたま席を外し、お仕置きを加えた後にお嬢様のところへ戻ろうとした矢先、中庭にわかめのような髪をした小物が現れ、それを逃がそうと考えていたところにサーヴァントがやつてきた。

かのサーヴァントは聖杯であるお嬢様を狙っていたらしい。それを許す私たちではなくかのサーヴァントの前に立ちふさがつては見たものの、戦闘用に作られたリーゼリットでさえあっさりと片腕を切裂かれた。

そして、彼女の前の空間に現れた黄金の波紋から射出される数々の武器が向けられていた。助かる術はないと分かりつつも、声を上げる。

ついに武器は射出され、リーゼリットを串刺しにしようと殺到する。誰もが彼女の最期を予感していた。

しかし、

ガキン！

その予想は覆されることとなる。

リーゼリットを貫くはずだった武器は弾かれあさつての方向に飛んでいく。すると同時にリーゼリットとサーヴァントの前に1人の男が立っていた。

「片腕なくしても無表情とは……凄まじいな……」

どこか場違いなことを思いながら、お嬢様が召喚したサーヴァント・バーサーカーは現れた。

「ほう……」

「リーゼリット。セラのここまで行つて、そのちよん切れた腕治療してもらえ」

決してこちらのほうは見ず、かのサーヴァントに視線を固定しながらバーサーカーは言う。リーゼリットも片腕がなくなつてバランスが悪いのか体をふらつかせつつもなんとかこちらに戻ってきた。

「リーゼリット！セラ！」

「お嬢様……ツ！何故来たのですか！あのサーヴァントはお嬢様を狙っています！出てきてしまえば恰好の的です！」

「見捨てられるわけないでしょ！貴方達まで失つたら……私は……」

そう言つて表情を崩すお嬢様。

私は彼女の想いを聞いて、静かに抱き寄せた。

「セラ、腕、お願ひ」

治療のためにすぐに離してしまつたが。

「貴様が持つてゐるその武器……我が宝物庫にはないな……何処でそれを手に入れた? 雜種」

「人に物を聞くときはちゃんとしなさいって教わらなかつたわけ?」

「フン。王たるこの我が、どうして貴様のような雑種に頭を下げなければならぬ?」

「あー、ダメだこれ。コイツ人の話し聞かない奴や……」

対峙するのは銀髪の青年と、金髪の男性。

お互にかつて偉業を成し遂げたもの同士、会話をするだけ、気配をぶつけ合うだけで大気が震える。

「こ」の我を前にしてそのような態度を取るとは……貴様、無様に散り逝く覚悟はできたのか?」

「そもそも俺はお前が誰なのか知らないんだけど……まあ、いいや。狙いはマスターらしいし、どうせ戦うことになるんだろ」

双方、屋根から飛び下りて地面に足を着ける。

そしてその直後、仁慈は背後に居るイリヤたちに話しかけた。

「これから結構やばいことになるから離れんなよ」

「わかつてゐるわ。あの金ぴか、相当強い。でも、倒せるわよね？」

「努力はしてみる」

「そこは断言しなきいよ！……まあ、いいわ。あんな金ぴかなんてやつちやえ！バーサーカー！」

「了解だ、マイマスター我が主！」

彼の武器である神機を構えて一步前に踏み出すバーサーカー改め仁慈。そんな彼を金髪のサーヴァント、アーチャー・ギルガメッシュユは面白そうな目で仁慈を見つめる。

「ハツ！貴様そのなりでバーサーカーだと？」

「文句もあるのか。俺だって不本意だよ。誰がバーサーカーか

「なんとも珍妙だが、まあよい。せいぜい我を楽しませて見せろ」

ポケットに両手を入れていたギルガメッシュユは右手を出すとスッと手を上げる。すると、彼の背後に数えるのも馬鹿らしくらいの波紋が空間に浮かび上がり、数々の武器が顔を覗かせる。

しかも、驚くべきことにこれらは全て伝説上の武器、そのすべてが英靈達の切り札……宝具といつていいくほどの物であった。

僅かな隙間すらなく放たれた宝具の雨に対し、仁慈のやることは至つてシンプルだ。自身が持つていてる神機を振るつて、自分と背後に居るイリヤ達に届きそうな武器を片つ端から弾くことである。

常人では扱うことも難しい鎌を巧みに操り、次々と自身に迫る宝具脅威を薙ぎ払つていく。時々手が足りないところは空いている左手で飛んできた宝具を掴み取り、同じく飛来してきた別の宝具を弾いたりも

していた。

そして、ギルガメッシュがいつたん宝具の射出を止めた隙を突き、奪つた宝具を彼へと投げ返す。

まさか、後ろに足手まといがいるにも関わらず切り抜けるとは思つていなかつたのか油断していたギルガメッシュは反応が送れ、直撃こそ食らわなかつたものの頬が少しだけ裂けた。

それを成し遂げた仁慈はドヤ顔である。殴りたい。この顔。

「貴様……ッ！」この我に傷をつけると

「隙あり」

傷を付けた仁慈に対して激昂するギルガメッシュ。しかし、そんな彼の反応には大したリアクションも起こさない。むしろチャンスと見て右腕まで鎌で切裂いていった。

「貴様……貴様貴様貴様ア！ 我が顔だけでなく腕まで持つて行こうとは、万死に値するつ！ 魂のかけらも、この世に残せると思うなよッ！」

先程の数がかわいく見えてくるほどの量。もはや、ギルガメッシュの背後は彼が呼び出した宝具で埋まり、AINツベルン城の壁が見えないような状態である。

そんな状況でも、仁慈は笑う。

そして、ついに出現した宝具レベルの武器が殺到する。しかも、先程とは違い、それら全てがAランクを超える宝具である。
並みのサーヴァントなら即死、最上級のサーヴァントでも敗北は免れないだろう。

だが、残念なことに相性が悪かつた。悪すぎた。

仁慈は手に持つてゐる武器、神機を変形させて黒く大きな口を作り出す。

そして、飛んで来る宝具たちに向かって

「喰らえ」

それを振り切つた。それだけで、彼に向かって殺到していいた武器は全て消えうせる。

流石のギルガメッシュもその光景を前に呆然としていた。ぶつちやけ、後ろで見ていたリーゼリットも無表情を崩して目を見開きセラも言葉を失っている。マスターであるイリヤも例外ではない。

仁慈以外の全てのものが固まつた、その空間でも彼は普通に口を開く。

「お前、神性を帶びた英靈だろ？それがお前の敗因だ」

テクテクと、悠然と歩く仁慈。

呆然とする英雄王の前に来た、仁慈は武器を振り上げてこう言つた。

「俺は樅原仁慈。神殺しとしてこの地位を確立した者だ」

こうして、ギルガメッシュはあつさりと仁慈に葬り去られた。

F a t e / G r a n d O r d e r に召還されたようです

人理継続保障機関・カルデア

魔術だけでは見えない世界、科学だけでは計れない世界を観測し、人類の決定的な絶滅を防ぐために成立された特務機関である。

しかし、2015年。

何の前触れもなく近未来観測レンズ、シバによつて観測されていた未来領域が消失。

計算の結果、人類は2016年で絶滅する事が判明——いや、証明されてしまった。

そんな中、シバは新たな異変を観測した。

西暦2004年 日本 ある地方都市。

ここに今までにはなかつた、「観測できない領域」が現れると。

カルデアはこれを人類絶滅の原因と仮定し、それを回避するためには、いまだ実験段階だつた第六の実験を決行する事となつた。

それは、過去への時間旅行。

術者を靈子化させて過去に送りこみ、事象に入れる事で時空の特異点を探し出し、これを解明、あるいは破壊する禁断の儀式。

その名を聖杯探索 —— グランドオーダー

これを実行するのは優秀な魔術師ではなく、数合わせとして呼ばれた素人のマスター候補生だつた。

カルデアで発生した事故で、殆どの研究員とマスター候補生をなく

したための致し方ない処置であったが、素人のマスター候補生は他の人の想像をはるかに超える働きを見せた。

今まで確認された人類滅亡の原因——特異点を五つ既に正常な状態へと戻している。破滅を約束されている人類にとつて、それは認知できなくとも英雄とも呼べる行いであつただろう。

召喚システム、フェイト。聖杯戦争という過去の英靈を呼び出し戦わせるものを参考に作り出したそのシステムで彼らはなんとか特異点を正常な状態に戻してきたのだつた。

聖晶石と呼ばれる莫大な魔力の塊である石を、簡単に描いた魔法陣の上に四つ放り投げる。

これだけで、過去の英靈を召喚できるんだから不思議なもんだと素人のマスター候補生は思いつつ光る魔方陣をぼーっと眺めていた。やがて光は強力なものになつていき、真ん中の光の柱を中心に金色の輪が三つ現れる。その後、一気に収縮すると光が人の形を取り始めた。

「えー…………またあ…………」

はつきりとした人になつたとき、その呼び出されたと思わしき英靈はいきなりぼやき始める。

「何でこんなにも頻繁に呼ばれるのだろうか……俺、そこまで有名じやないんだけど……媒体とかどうなつてんの……」

その英靈はおかしかつた。

着ている服は現代のそれに近く、アーマーなどの防具の類は一切見

につけていない。てっきり過去からの英靈が呼び出されると思つて
いたマスター候補生はその部分にかなり驚いていた。

しかし、彼の持つている武器もそれと同じ驚愕を引き起こすのに十分なものだった。呼び出された彼の右手に見えるのは、彼の身長と同じくらいの武器である。刀身は死神が持つていそうな大きな鎌。そのサイドにはシールドが半分になつたような部分が取り付けられられており、持ち手に近い部分には銃口のようなものが見える。

「…………ま、いつか。慣れだし」

自己完結を済ませた彼は呼び出したマスター候補生に向けて苦笑で自己紹介をした。

「サーヴァント・バーサーカー。真名、樺原仁慈。全ての戦闘で活躍できるとは言えないけど、神とか、神性のあるやつとの戦闘はまかせなさい」

呼び出した当初は、呼び出した本人を含めて名前を知らないことがら、これは若干はずれではないかと思っていた。

マスター候補生のデミ・サーヴァントであるマシュー・キリエライトも事故により人手不足のカルデアを仕切つているロマニ・アーキマンも、カルデアが召喚した英靈、レオナルド・ダ・ヴィンチですらも。

しかし、現在。

五つの特異点を正常化した彼らがこの召喚に再び携わつたら声をそろえてこう言うだろう。

——この戦い、我々の勝利だ、と。

——これは

「うるさい小娘ね！神なんて居ないって言つてているのよ！」

「あ、それには同意するわ」

『貴方はどつちの味方なんですか!?』

——人類の滅びが約束された世界に

「改めて名乗つてやろうゴミクズ共！私はレフ、レフ・ライノール・
フラウロスだ！」

『フラウロスだつて!?ソロモンが呼び出した魔神のうちの一體!?

「さあ、絶望の中で——」

「あ、神つて付いてるなら行けるわ」

「グワ——！」

『ええええええええええええ!』

「（あ、これ私ヤバイやつだ。神性持ってるわ）」

神様絶対殺すマン
樺原仁慈が

「■ ■ ■ ■ ■ ■ —————ツ!!」

「ど、どうしたヘラクレス！」

「なんか、彼とは戦わなくてはならない気がする」

「どうしたんですか仁慈さん!?」

——呼び出された

「人類を滅ぼして楽しいか!?」

——ああ、楽しいとも

「隙あり」（バクツ

『あつ』

物語である。

「お前ならば、私を殺せるか？」

「……性能的にはいけなくもない……かもしません。いや、技量
が足らないか？」

「やつぱセイバーは死すべしですよね！」

「何でそれを俺に聞くの？」

『戦場にことの善悪なし』

「…………」「…………」グツ

「生きているのなら——」

「神様だつて——」

『殺してみせる』

「…………」「…………」b d グツ

S (すつごく) A (頭のおかしい) O (お兄さん)

「ああ、仁慈。いいところにきました。実はサカキ博士とお姉さまと三人で共同開発したワープ装置を作ったのですがよければ実験に参加してくれませんか?」

「それで本当に協力すると思つてているんですか?思つてたとしたら俺は貴方の車椅子を即座に反転させて貴方の研究室に突っ込みますよ」

何故この人はこうも淀みない笑顔でこんなことを堂々とのたまうこと�이出来るのであらうか。

俺が普段、どれだけ貴方達から無茶振り喰らつてゐるかわからぬのか?アラガミ討伐と書類仕事で精神と肉体をすり減らす毎日を送つてゐるんだぞ。いや、これはまだいい。本題は貴方の実験で俺は時間とか空間とか世界戦とか色々越えたことだつてあるんですけど?

今までなんとか帰つてきてるけど割と大変なことになつてゐるからね?

「そうですか……残念です」

「むしろ何故いけると思つた」

「仕方がないので……」

ここでラケル博士はいつたん言葉を切る。

すると背中にすとんと軽い衝撃を受けた。その直後、体に力が入らなくなり、思わず冷たい床の上に倒れこんでしまう。

なんとか首を捻るとそこにはいつもの疲れた表情をどこかにやつた、とても生き生きしたレア博士の姿が。

「なん……だ、と……？」

「（ご）めんなさいね」

「大丈夫……何も心配はありません。次に目が覚めたときは貴方の知らない世界が広がっていることでしょう」

俺が意識を失う直前で見たものは、かつて荒ぶる神々に従っていたときにラケル博士が浮かべていたとてつもなく胡散臭い笑みだつた。クラウディウス博士……娘達の教育どうしてたんですか……。

『――以上で《ソードアート・オンライン》の正式サービスチュートリアルを終える。諸君らの健闘を祈る』

意味がわからない。

ラケル博士とレア博士に不意打ちを喰らつて眠られ、強引に乗せられたであろうワープ装置。

意識がしつかりと目覚めてみれば、空は暗くなつて目の前には大きなロープを纏つた男がチュートリアルを終了するといつて消えうせ、その後に訪れる多くの人間からの絶叫……もう一度言おう、意味が分からぬ。

しかし、周りの人間はそうではないらしい。

この場で天に向かつて泣き叫ぶものも居れば、しつかりと目的を持つているのか迷うことなく走つていく人影も見えた。

こういうときは一回落ち着いて、自分の格好を見るんだ。

自分の装備をみて状況を判断しなくては、異世界に来たときに生き残ることは出来ない。

過去の経験からそのことを知りえている俺はまず、適当に近くにあるお店の窓を鏡の代わりにして自分の姿を確認する。代わつたところは特になし。強いて言うなら神機がなくなつたことくらいか。

自分がことが分かつたので次に身体能力だ。何かしらのことが働き身体能力が劣化してしたり逆に強化されていたとき、下手に何時も通りの行動を取ると命取りになる可能性がある。俺は軽く走つてみたり、ジャンプしてみる。はたから見れば俺の行動は物凄く変に映つただろうが、俺にとつては死活問題である。

「問題なし……」

軽く走つてみたが、疲れはしないし、ジャンプしてみれば建物の屋根に普通に上れる。これならば問題はないだろう。

次に行うべきは情報収集だ。

情報は大事だ、アラガミが知つてて乱入してくるのと知らないで乱入してくるのとでは対処の仕方が全然違つたりするからな。

誰に解説するわけでもなく脳内でそう思い浮かべつつ、俺は周囲をざつと見渡す。どうせ聞くなら泣き喚いでいるやつよりも、行動を起こしているやつらのほうが絶対にいい。

しばらく探していると、建物と建物の隙間に淀みない行動で入つていくロープを発見した。俺はその人に狙いを定めると今居る屋根からその建物まで行き、上から飛び降りると、狭い道に入つていたロープの前に着地する。

すると、ロープの人物は大変驚いたようで思わず尻餅をついていた。

…………もしかしたら、今の行動はこの世界では珍しいのかも知れない。そのことを念頭に置きつつ、俺は情報収集に努めるのだつた。

目の前に現れた青年はとても変なやつであつた。
まず第一に上から降ってきた。ここは建物と建物の間の隙間でこれから私が向かう場所への近道でもあつた。

左右にある建物は五メートルほどの高さで、いくらここがゲームの中の世界でここがダメージの受けない圏内だからといって実行するにはいささか勇気の居る行動である。しかし、目の前の青年はそれを軽々とやつてのけた。こちらに向ける視線にも、恐怖の色は欠片もない。

「いくつか質問をしたいんですけど」

「…………こんな状況だ。取り合えず、オイラに言つてみナ……答えてやるかは、そのときに決めるヨ」

「……何処ですか？」

「アインクラッドの始まりの町だ」

「聞いたことねえ…………次に、なんであの人たちはあんなに動搖しているんですか？」

「…………それは本気で聞いているのか？」

楽しみにしていたゲームがいきなり本物の死がかかつたデスゲームに変貌したんだ。うろたえないわけがない。あのチュートリアルは誰もが聞いていたはずなのにこの青年の反応は何だ？まるで先程のチュートリアルを聞いていない……いや、そもそもこの世界のことが分かつてないようである。

いくら、ゲームの初心者だからといつてもこれはありえない。

流石におかしいと考えた私は、逆にこの青年にいくつか質問をした。

そこから想定されるのは、彼は何らかの理由で途中からこのゲームに参加した人間でそれもこのゲームのシステムや設定、基本操作も何も知らない状態での参加ということが分かつた。

「ハア……」

絶対にこの青年は死ぬ。

このゲームではとりあえず挑んで情報を手に入れるということが出来ない。一度の死はそのままリアルの自分に直結するからである。

今、私の目の前で先程教えたばかりのメインメニュー・ウインドウを開いて興奮している青年を見ながらそう思う。

ここで、見捨てるのは簡単だ。私にとつてまんに一つのメリットもないし、その選択が最善といえる。

しかし、ここで見捨てた所為で彼が死んでしまつたら私は平然としていられるだろうか。

そのようなことを永遠と繰り返し考え、やがて結論を出した。

この青年を育てて自分の護衛にすればいいのではないかと。

それでも、このソードアート・オンラインのβ版ではなかなか有名な情報屋で『鼠のアルゴ』といえば大体の人が知っていたという知名度である。これから先も情報屋を続けようとしている自分にとっては情報のことで狙われることもあるということが簡単に推測できる。そのときのためにこの青年を育ててみるのはどうか。しかも、ソロでは出来ないクエストとかもあるかもしれないし。
…………それが、いいな。

「なあ、オニイサン。アンタ名前は？」

「名前……？ 樋原仁慈だけど」

「バカ、リアルの名前じゃなくてこのゲームの中での名前だヨ」

「ゲームの中での名前って言われても……急にここにいたからそんな設定なんて……あつたわ」

「あつたのカヨ。で？ 名前は？」

「…………フリーカス」

「フリーカス……いいね、オニイサンにぴったりな名前だと思うヨ。オイラはアルゴ。どうだい、フリッち。オイラと手を組まないかい？ この世界で生き残るために」

「フリつちつて…………まあ、いいか。手を組む件についてはお願ひします。なにぶん何も分からないので」

私がつけたあだなに若干不満そうにしていたが、青年——フリークスは私の話を受け入れたらしい。

というか、改めてこのゲームの仕様を説明してもこの青年に動搖や恐怖は見られない。実は只者ではないものを味方に引き入れることが出来たのでは？と若干感じた。

この世界はソードアート・オンラインというVOMMORPGというジャンルのゲームらしい。要するに仮想空間で行う超リアルなゲームだということだ。

しかし、つい先程の巨大ローブはこのゲームの製作者で死んだら現実でも死ぬということを告げたらしい。普通にゲームを遊びに来たにも関わらずここで死んだら本当に現実でも死んでしまうというまさにデスゲーム（顔芸風）になつたからこそその動搖だつたのだと、俺と組んでくれる心優しい人、アルゴがそう教えてくれた。

……まあ、ぶつちやけ現実で狩りゲーやつている身としては今更驚くことでもない。攻撃を喰らえば怪我をする、死ぬ……当然のことである。

まあ、その後もなんやかんやあつて一週間の時が過ぎた。で、今はモンスターの情報を収集するために戦闘を行つてゐるのだが、この世界での戦闘がとつても不便。

特にソードスキルとかいうシステム。一応ゲームの仕様なのかダメージは与えられるけど、勝手に体は動くわ、硬直があるわでものすつごく使い難い。途中からソードスキル使わないで素で倒しに行つたくらいだよ。

H Pがゼロになつたのかポリゴンとなつて砕け散つた敵に視線を送りつつアルゴの元に帰還する。

「……ソードスキルはどうしタ？」

「ソードスキル？ 知らない子ですね」

再び出現したイノシシの形をモンスターがこちらに標的を定めていたため、俺は即効でそこに向かって背後から首を狩る。

一応、狙う場所によつてダメージは違うらしく、首を攻撃すれば大体は一撃で死ぬか二発目で死んでくれるので結構楽である。

「レベルはどのくらい上がつた？」

「今レベル5になつた。ようやく、最初のpoke○ンレベルだ」

今度こそ戦いが終わつたのでアルゴの元に戻る。

というか、ゲームだからかこの敵、行動パターンが決まつっていてそれを把握すれば対処がたやすすぎてなんというか……あれである。

「ついでに、この敵の行動パターンも把握したけど……」

「その情報は使えるな。是非とも教えて」

「あれ、何時もの聞き取りにくい片言言葉はどうしたの？」

「フリつちとは一番長くいるし、ずっとキャラ作つてんの疲れるから……」

「なんだろう。このキャラ作りしているアイドルの本音を見てしまつたような感情は……」

なんだかいたたまれない気持ちになりつつ、俺はおとなしく彼女の後に続いた。

フリッちと組んでから二週間。

初心者とは思えないくらいの強さでばつたばつたと敵をなぎ倒す（ソードスキルなし）姿は違和感の塊のような感じだつたけれども、どこか様になつていて不思議だと思いつつ、迷宮区の情報も粗方そろつてきた。

「いい感じいい感じ。そろそろ、これならボス部屋も行けるかもね」

「じゃあ行こうか」

「えっ」

その言葉と共に扉を開けるフリッち。

なかのフロアにはフロアボスのイルファング・ザ・コボルド・ロードと取り巻きのルイン・コボルド・センチネルが三匹現れた。

ルイン・コボルト・センチネルについては一応1人でも対処できるモンスターだが、イルファング・ザ・コボルド・ロードはフロアボス。基本的に1人で相手できるようなやつには設定されていない。

「ちよ、ちよっと、フリッち!? 道具もまともにそろえてないのになんでボス部屋突っ込んだの!?」

「攻撃パターンとか、見といたほうがいいと思つて。アルゴはそこ

で観察しといて」

その言葉を最後にフリつちはルイン・コボルト・センチネルに近付き目にも留まらない速さで攻撃、速やかに一体をポリゴンの欠片にした後、自分に近付く二体を両手剣で打ち上げ、行動もさせずにそのHPをゼロにする。

いつも何時も思うのだけど、そのレベルに比例しないステイタスの高さとか、技術とかは一体何なのだろうか。

「グウオオオオオ!!」

「(何で怪物つてこんな呻き声しかしないんだろうか……)」

敵の斧と盾を巧みに潜り抜け、必要以上に首や脛などを切りつけるフリつち。両手剣でヒット＆アウエイとかやつぱり頭おかしいと思う。

時々リポップするルイン・コボルト・センチネルも片手間に倒しつつHPを削つていき、ついに赤ゾーンまで到達した。

「フリつち、 β テスト版では武器がタルワールに変わるよ!…でも、あくまで β テスト版だからね!」

「了解」

今まで持っていた斧と盾を投げ捨てて腰に在った曲刀を抜く。しかし、それはタルワールではなく野太刀だった。

イルファング・ザ・コボルド・ロードは野太刀を抜くとフロアに生えていた柱を使って三次元的な動きをしながらフリつちに襲いかかつた。

速さと巨体、そして位置の利を取られたフリつちは持っていた両手

剣を弾かれたしまう。この攻撃は二回攻撃、武器を失ったフリつちに
対処は不可能。

死——という単語が頭をよぎつたその時、

彼は横薙ぎに振るわれたその攻撃を回避し、そのまま別の両手剣を
ストレージから取り出すと、ソードスキルを使った硬直で動けないイ
ルファング・ザ・コボルド・ロードの腕を伝つて首まで上がると、そ
のまま数回切り裂いて、倒してしまつた。

「あ、情報取るため来たのに倒しちゃつた……」

「気にするところはそこじゃないでしょ！」

こうして、一階層目はデスマームが始まつてから二週間である1人
の男によつてクリアされた。

後々彼は、化け物^{フレックス}と呼ばれ、このアインクラッドクリアに大きく関
わつていくこととなる。

逃げたいのはこつちなんですけど……

なんか知らないけれども攻略組の一人となっていた。

そのことに気が付いたのは割と最近の出来事である。俺としては、この世界のことを教えてくれたアルゴの手伝いをするためにとりあえず前線で敵を倒して情報を献上していただけなのだが……。

そのことをアルゴに伝えたら呆れられた。「そんな軽い気持ちで最前線にいるプレイヤーなんてフリつちだけだろうなあ……」なんて言われてしまつた。

……まあ、なんというか、前にも思つたが生きていた世界が文字通り違うからなあ。こればっかりは環境の違いということだろう。アルゴにこの世界のこと、そして現実世界と呼ばれる世界のことの話を当たり障りのない感じでかつて話してもらつたのだが、どうやら現実世界にはここのような怪物やアラガミという生物はおらず、アラガミが現れる前の俺たちの世界のような感じだと言つていたし。

そんな環境下で生きて来ていたのであれば、あの時のプレイヤーたちの怯えようにも納得ができる。

あ、でも。二十五回^目とに現れるボスだけは少々楽しめたかもしない。

普通のボスとは文字通り格が違う強さを持つていた。攻撃範囲は長く、防御も攻撃スピードも格段と上がつていた。倒せたけれども。しかし、ここでも見どころのある人たちは多くいた。黒の剣士といふ二つ名を持つキリトというアルゴのお得意さん。それに血盟騎士団なる集団の副団長を務めている閃光アスナ。

二つ名の中二的なセンスや、それが浸透していて恥ずかしくないんですか?と思いたくなるようなものだが、その強さは他のプレイヤー

と一線を画すものだ。レベルを考慮してもその実力に偽りなどないだろう。あれは自らの死線を何度も潜り抜けて来たからこそつく力だ。

逆に、少々疑問を生じさせるのが血盟騎士団團長、ヒースクリフである。技術は確かだなのだが、なんというか必死さがないというか……あのユニークスキルというのもなんか違和感があるし……。

そのことをアルゴに聞いてみたが彼女もわからないそうだ。まあ、どれだけ情報通であっても所詮はプレイヤー。ゲームを作っている側でない限りすべてを知ることは難しいだろうね。

と、こんなことがありつつもプレイヤーのみんなは順調に攻略を進めてきたわけだ。現在の階層は74階でそろそろてつぺんが見えてきたというところ。そんな時に俺はどうしているのかと言われば特に変わったことはない。いつも通りアルゴの手伝いをして、彼女に近づいて不当に情報を貰つて行こうとする連中にお仕置きを施して迷宮区を適当に徘徊する日々を送っている。

今日も今日とて、情報収集をしているアルゴの傍らに控えて敵を滅殺する簡単なお仕事中だ。

「相変わらずでたらめな強さだね……」

「まあ、そこら辺のプレイヤーとは色々と環境が違うから」

「そんなのは出会つたその時からわかつてたよ」

溜息を吐きつつ、俺が相手取つていた敵の攻撃パターンをメモしていくアルゴ。いわれのない誹謗中傷を受けているにも関わらずこういったことをやめないのは俺達神機使いにも似たものを感じる。

あの職業も、守るはずの人たちから罵倒されたり石投げつけられたりするなんてこと、日常茶飯事だからなあ……。難しいもんだね。人のためになるつてことは。

「ん? どうした、フリッチ。オイラの顔に何かついてる?」

「いや、唯アルゴはえらいと思つて」

「きゅ、急にどうした!」

不意に言われた一言に顔を真っ赤にするアルゴ。いやはや、ゲーム

ということで下手に表情を隠せないことがその真っ赤さ加減を更に高めていた。これは可愛い。

「フリつち！からかうのはやめてくれない!?」

「悪いね☆」

この後滅茶苦茶殴られた。

幸いダメージは発生せず、アルゴのアイコンがオレンジにならなくてよかつたと思う。

アルゴの手伝いを終えた仁慈はやることも特になかったために現在の最前線である七十四層の迷宮区へと赴いていた。そして、ポップする人型のトカゲ、リザードマンが繰り出す剣戟をぎりぎりのところで翻し、敵のソードスキルが終えた硬直時間を狙う。そして、剣戟を終えたところで持っていた大剣を振り回し、リザードマンを空中にうち上げる。

宙に浮くなど想定していなかつたのか、どう行動していいのかわからぬリザードマンを華麗にスルーすると、仁慈はそのままリザードマンを地面に二度と落すことなく切り刻んだ。

「わっしょいわっしょい」

これは酷い。

もはや戦いなどと言えるわけもなく、唯のいじめと化していた。その時、仁慈のすぐ近くに別の敵が出現する。その出現を素早く察知した仁慈はいじめをいつたん中断すると、アルゴの情報で獲得していた格闘スキルを使用した蹴りを跳んで放つ。

するとボールのようにして飛んでいつたリザードマンは出現した敵と激突、一方は体勢を崩し、もう一方はポリゴンの欠片となつて消えていった。

自分がいじめていたリザードマンの死にざまなど視界の片隅にも入れずに態勢を崩した敵へと接近、大剣を横薙ぎに振り払う。集中的に振られた筋力から生み出される攻撃にそのHPを一気に削り取ら

れてしまつた敵はそのままリザードマンと同じくポリゴンの欠片となる。仁慈の視界に今の戦闘で得られた経験値とお金が表示されることによつて彼も戦闘態勢を解除した。

「ふうー……よしつ

『よしじやない（でしょ）!!』

今の戦闘を見ていたらしい男女の声が、仁慈に對して激しいツッコミを入れる。仁慈が後ろを振り返つてみればそこには黒の剣士キリトと閃光のアスナのオセロコンビ（仁慈命名）がやって来ていた。「やあ白黒夫婦。こんなところでどうした？ここにデートはあまりいい趣味とは言えないけれど」

「ええ?! い、嫌だなあ！ フリーカスさん！ デートなんかじやないですよ！ ましてや夫婦だなんてそんな……！ ベ、別に嫌じやないですけども、なんというか心の準備が……！」

「……ここには普通に攻略で来たんだ。お前の方こそ、どうしたんだ？」

「暇つぶし」

「最前線の迷宮区を暇つぶしに使う奴なんてお前くらいだろうなあ……」

キリトの呟きに仁慈は笑顔を返すだけだった。彼は目の前にいる二人と血盟騎士団團長、ヒースクリフと同様に二つ名がついている。彼のプレイヤーネームと駆けられたそれは彼の表現としては最適すぎた。

——怪物

プレイヤーネームを日本読みにしただけのそれは、万人に納得を与えてすぐに浸透したのである。デスゲームをデスゲームとも思わない行動の数々、ソードスキルを使わずに敵を屠っていくその異常性。一部では存在自体が茅場明彦唯一の誤算とまで言われているのだ。彼の二つ名に、本人以外の人物が納得を返したのである。

「そうだフリークス。俺たちと一緒に来ないか？今丁度マッピングしている途中なんだ。アンタみたいな強いプレイヤーが居れば、かなり捲る」

「俺としては別に構わないけど……」

仁慈はここで一度言葉を切ると、アスナの方をチラリと見た。そこには未だに若干トリップしているアスナが居た。

ここで一緒にいて行くとなると、彼女が自分に牙を向くかもしれない。後ろから優雅の如くバツサリざつくりいかれるのは勘弁してほしい仁慈はここで断りを入れようとしたのだが、ここで現実へと生還をタイミングよく果たしたアスナが待ったをかけた。

「別に構いませんよ。フリークスさんなら」

「そう？」

意外な言葉をかけられ、面を喰らう仁慈だったが、ここは一応迷宮区。デートよりも命を取るのは当たり前かと納得をして彼らに同行することにしたのだった。

やつぱり只者じゃない。
目の前で、快進撃を続ける攻略組のプレイヤー、フリークスを観察しながら俺はそう確信した。

通常、このゲームの売りにして俺達プレイヤー最大の武器でもあるソードスキルを使わないということは本来在り得ない。あれは攻撃を勝手に行ってくれるだけでなくダメージにも補正を入れてくれるのだから。多少の消費は避けられないが、それに見合うだけの効果を持っているのだ。

だが、目の前の非常識が具現化したような男はこのソードスキルを一切使わない。すべて自分の力量だけで剣を振るい、この世界の最前线を走り続けてきたのだ。その強さから一部では茅場本人なのでは？とささやかれたこともあるのだが、その件に関しては自分が作つた

ソードスキルを使わないはずはないということ、明らかに常識を逸脱した行動の数々から否定された。

「フリークスさん。スイッチ！」

「了解」

アスナの攻撃で怯んだエネミーの前に体を躍らせたフリークス。そのままかなりの重量と思われる両手剣を片手で扱い、敵を両断する。

あれを振るう筋力ステータスと、注意していなければ見えないような速さで振るわれたことによりソードスキルにも劣らない威力を得たそれは容赦なく敵をポリゴンの欠片へと変貌させた。

「お疲れ」

たった今、戦闘を終えた二人にねぎらいを賭けながらフリークスの様子をうかがう。特に疲れた様子もなく、自然と周囲を警戒しながら佇むその姿は初めて会つたときから変わらない。

そう……未だ、一桁しか開放できていなかつた頃に会つた時と変わらずに。

現在、七十四層まで解放されたこの状況であればこれができることに何ら不思議はない。しかし、これをデスマゲームが始まつたばかりのあの時にできるかと言わればほぼ不可能だと言つてもいいだろう。これは現実でも似たようなことをしてきたということに他ならない。ま、リアルの詮索なんてものはこの世界では最大のタブーだし、あまり気にして仕方がないんだけどな。

「キリト君ーいくよー」

「今行く」

アスナに呼ばれて一先ず思考を断ち切る。考え事は後にした方がいい。いくら強いプレイヤーが居るからって、油断していれば速攻でHPを0になることだってあるかもしれないからな。……特に、俺は耐久には振つてないこともある。

だが、俺の心配とは裏腹にマッピングは順調に進んでいった。どれもこれもプレイヤーの練度が並外れていることが大きい。フリーク

スやアスナは攻略組でもトップの実力を持つプレイヤーだ。安定感が違う。

そうして順調に進んだ結果、目の前が目の前のバス部屋だった。

「これは……」

「明らかにバス部屋だねえ」

「一応、どんな姿かだけ確認しておくか……。二人とも転移結晶は持つたな？」

アスナとフリークスに確認を取る。二人が領いたことを確認すると俺はゆっくりとバス部屋を開けた。部屋の中には明かりがなくバスの姿も見えない。そこで俺たちは扉が閉まらない限界ぎりぎりのところまで進み、バスの出現を試みた。すると、

——ボボボボボボ！

一斉に部屋の隅へと青い炎がともり、バス部屋の中を見渡すことが可能になつた。そしておれたちがそこで見たものは、一言でいうなれば悪魔であつた。

見上げるようなその体躯は、盛り上がりがつた筋肉に包まれていて、肌の色は部屋をともす青い炎にも負けないような深い青。頭の両側から生えるは捻じれた角。瞳の色はこれまた炎にも負けない青色で合つた。

悪魔型のモンスターはRPGの定番といつていが、こうして直に対峙してみると恐怖を抑え込めない。なんというのだろうか。今まで戦ってきた的とは色々根本的に違うのだ。俺たちの認識的な意味で。

敵のHPを知るす四本のバーの上にはこう書かれていた。The Gleam eye, s. 間違いない。定冠詞が付いていることからこのモンスターがこの階層のバスだ。

「GUA A A A A A A A A!!」

尋常ではない咆哮と共にバスモンスターは俺達に向つて走つて来た。その巨大な体躯がかなりの速度で迫つてくる光景に恐ろしさを

感じないはずもなく、

「うわあああああ!!」

「きやああああ!!」

「えっ!? ちよつ、お前ら！ 転移アイテム使えよ！」

フリークスの言葉も聞かず、ステータスに任せてその場から全力で後退した。フリークス、置いて行つてしまつてしまふ。

もう最後の王とか要らないんじゃないかな

カンピオーネ。

それは人の身でありながら、神々を殺しその権能を篡奪したもののことときす。

人の身で神々を殺したことから、カンピオーネとなつたものに普通の人間は一切居らずどの人物も一癖も二癖もある人物である。

その場にいるだけで災害を巻き起こすまつろわぬ神という存在を殺し、人類を守ることが出来る存在であるが、どいつもコイツもまつろわぬ神と変わらないような人物であるため、人類が守られているかというとどっこいどっこいであった。

まあ、強大な力をもつた扱い辛いキチガイの総称とも言える。

某日　日本

日本国内の魔術師・呪術師を束ねる国家機関・正史編纂委員会がまつろわぬ神の出現を確認した。

正史編纂委員会はすぐさま日本唯一のカンピオーネである草薙護堂にこれらを討伐してもらうために彼の近くに居る万里谷祐理に連絡を取つた。

万里谷祐理から連絡を貰つた草薙護堂は出現したまつろわぬ神のことを心底恨みつつ、彼のことを好いており、ミラノの魔術結社『赤銅黒十字』に所属しているエリカ・ブランデッリ、同じく好いている『青銅黒十字』に所属するリリアナ・クラニチャール、ある意味日本の切り札とも言えた媛巫女、清秋院恵那を伴つて連絡を受けた場所に向

かつた。

しかし、その途中。もう一体のまつろわぬ神の出現を告げられる。場所は幸いというべきか不幸と呼ぶべきか、先にまつろわぬ神が出現していたポイントと同じであつた。

この知らせを聞いた草薙護堂一向はさらに足を速める。唯でさえその場に存在するだけで天変地異を巻き起こすまつろわぬ神同士が激突した際の被害を護堂は身をもつて知つている。そのこともあり、自分の住む日本で好き勝手はさせないと心に誓いつつ向かうのであつた。

正史編纂委員会から報告を受けた場所に着いた一同は皆驚愕の表情を浮かべることとなつた。何故なら、自分達が想定していた以上に被害が少なかつたからである。木々は所々なぎ倒されているものの、戦場となつたであろう森も吹き飛んだりはしていない。

山の一つや二つ軽く消滅させられるくらいの力を持つている神々の激突にしては、あまりにも少なすぎる被害であつた。

それともう一つ。報告には2体のまつろわぬ神が出現したといわれていた。草薙護堂もカンピオーネ特有の獣じみた第六感でそれを事実だと知つている。

しかし、今いるのは現代風の服装に身を包み、見たこともない武器を持つっている銀髪の青年だけであつた。

呆然とその場に立ち尽くす青年にどうしたらいいのか分からぬ護堂だつたがさらにわからないことがあつた。

何故なら、彼からは同属の気配とまつろわぬ神との気配が同時に来ているからである。カンピオーネは確かにまつろわぬ神の権能を簒奪した者だが、まつろわぬ神とまったく同じ気配を出すことはない。だが、目の前の青年はむしろまつろわぬ神の側面のほうが強くも感じられた。

「…………いきなり、なんかピカピカした人が襲ってきたから返り

討ちにしたんだけど、これでよかつたのだろうか……」

独り言で合つただろうその一言はしつかりと護堂達はこの人なんのだろうかと誰もが疑問に思つた。

この青年がまつろわぬ神であることは多分間違いない。しかし、この青年は今まで会つて戦つてきた神々とは何かが違う気がした。なんというか、今までなしえなかつた会話での解決が可能なのではないかと自称平和主義者の護堂は思つた。

なので最低限の警戒だけしつつ、意を決して青年に話しかけた。

「あーあー……そこのアンタ。聞こえてる？」

「それは自分のことですか？つて……なんだアイツ女の子侍らして
る……しかも四人」

「人聞きの悪い事言うな！」

心外だといわんばかりの態度で言い返す護堂だが、言い訳なんて出来ない。どつからどう見ても侍らせているようにしか見えないのである。

このまま2人が言葉を交わしても脱線しそうなので自称護堂の愛人であるエリカが代わりに口を開いた。

「貴方様をまつろわぬ神とお見受けしますが……」

「まつろわぬ神？」

エリカの言葉に対して返つて来た反応は多くのまつろわぬ神が行う不遜な態度での肯定ではなく、困惑に困惑を重ねた返答だった。これには流石のエリカもどうしたものかと首を捻つた。他の人たちもおおむねそんな反応である。

誰もが首を傾げるという不可思議な状況になってしまった。

「あ、すみません。ここ何処ですか？」

「え？ 日本の× だけど……」

唐突に掛けられたなんの脈絡もない問いかけに反射的に答える護堂。それを聞いた銀髪の青年は小さく、また異世界か……と呟いた。そんなもう色々取り返しがつかない感じの空間に膨大な力を伴つた存在が出現した。しかし、それはまつろわぬ神のものとは違い、もつと護堂に近しい存在……すなわち、カンピオーネである。

しかも、この気配には覚えがあった。ここ最近、護堂が祐理を守る際に戦つた、世界でも最古のカンピオーネ、サーシャ・デヤンスター・ヴァオバンである。

「——なつ!? 何しに来やがった!」

「愚問だな小僧。このウォバンの目的は唯一つ。闘争よ」

護堂は自分の背後にエリカたちを隠すとヴァオバンに食つて掛かる。しかし、ヴァオバンのほうは護堂なんて意識もせずにその緑色の瞳を銀髪の青年に向けていた。

一方イイ年した爺さんであるヴァオバンから熱い視線を向けられた青年は物凄く吐きそうな顔をしていた。

「そこのまつろわぬ神、おとなしくこのヴァオバンと闘争を演じるがいい」

「なんだこのお爺さん。すつぐくえらそう」

ヴァオバンが自身の権能の一つである『死せる従僕の檻』を発動させ

る。これは冥界の神オシリスから篡奪した権能で、自分が殺した人間を生ける死者として永久に使役する（生前の知識・技能は保持したままで）というかなりえぐい能力である。また、この死者は何度でもよみがえるという厄介な性質も持っている。

能力の効果だけでなく見た目もえぐいため、護堂の後ろに隠れている祐理は自身のトラウマも相俟つて完全に怯えていた。

青年のほうも自身の武器を構えて戦闘態勢を整える。

「……は俺のシマだぞ。好き勝手してんじゃねえ！」

ついでに今まで静観していた護堂もカンピオーネの本能とかヴォバンのこととか、祐理が怯えたことなどが作用して三つ巴のバトルに発展した。

結果

「嘘、でしよう!?

「なん、だと……!?

「これは、まずいね」

護堂は倒れ、ヴォバンは上半身を喰われるという惨状が出来上がった。

戦いの流れはこうだ。

まず最初に何故か青年と護堂が共同してヴォバンをボツコボコにした。護堂だけでは相性と経験の差から難しかつたが、そこは青年が力バーした。というか青年とヴォバンの相性が悪かつた。その結果マミつたのである。

乱入者ヴォバンを倒した後はそのまま護堂と青年が激突。なんで戦うんデイスカ!?と今まで協力してきた護堂の攻撃に困惑した青年に対し、カンピオーネの本能ゆえに止まらなくなつてしまつた護堂は権能の攻撃で返事をした。

そのことで完全に堪忍袋の緒が切れた青年はそのまま相手をし、自身の能力を全力で振るつて護堂を地面に沈めた。

「あの共闘も、こうして俺を油断させるための罠だつたとは……善人そうな人相しているのに、侮れないな」

青年の呴きにエリカを含めた全員はやっぱり護堂は平和主義者なんかじやなかつたと思つた。

その後、彼は護堂に止めを刺すようなことはせず、スッとその場を立ち去つた。

神相手ではどうすることも出来ない彼女たちは護堂の治療を行いながらその後ろ姿を見送ることしか出来なかつた。

それからしばらくして、全世界の魔術組織はある一通の知らせに驚愕した。

極東のカンピオーネ草薙護堂と最古のカンピオーネ、サーチャ・デヤンスタイル・ヴォバンがつい最近現れたまつろわぬ神に返り討ちにされたという知らせが出回つたのである。

神からも避けられる最古の魔王がやられたという報告は多くの人

間を喜ばせると共にそんな神どうすればいいんだという嘆きの声も上げられた。

ちなみに彼らと同じカンピオーネたちはそのまつろわぬ神に興味をもち、比較的自由に動けるカンピオーネは一斉に行動を開始したのだつた。

後に、この神を殺すために多くのカンピオーネたちが手を取り、協力して討伐に乗り出すことになるのだが、この段階では誰も知りえなかつた。

誰も知らない男の物語

我輩は転生者である。

名前は田中太郎。

何が原因で死んだのか皆目検討がつかぬ。ただ、気が付いたときにはピカピカと発光する球体が目の前で土下座（自称）を繰り出していた。

球体曰く手違いで我輩を殺してしまったから別の世界に転生させてくれるらしい。

そんじよ言葉に二言もなく飛びつき我輩はチート能力を貰つて新たな世界へ転生した。

——田中太郎の冒険はこれからだ！

…………嘘です。ごめんなさい。

前世の名前は田中太郎ではありません。普通に記憶がなかつたのでなんか金髪で車椅子で浮かべる表情がとつても怪しいラケルという人に付けられた仁というのが僕の名前でした。

一応目の前に光の球体（自称神）が居ますけど、チート能力なんて頼んでいません。異世界転生も望んでいません。

元々住んでいた世界がアラガミなる化け物が毎日毎日ファイーバーして、周囲の人々を喰っていく世界だったので、樺原信慈という人の記憶にあるような普通の世界に転生したいです。

そう、光の球体（自称神）にお願いすると、どうやら叶えてくれるらしく僕の意識は段々と薄れていきました。

「普通つてなんだろうね……」

アラガミに食い尽くされる前のようなビルの森とも表現できる都市の中、世間ではクリスマスといつて町中がきらびやかなイルミネーションで飾られ、騒がれている12月25日、私は一人呟いていた。

光の球体（自称神）にあつて、新たな人生をスタートさせてからはや17年。もう前世よりも長く生きた私の人生はある意味アラガミ溢れた世界でラケル先生の下から逃げ出し、ストリートチルドレンとして生活してきた時よりも色々ひどかつた。

まず、生まれてから二年後、両親が事故に巻き込まれて他界。両親から前世では感じることが出来なかつた愛情と名前を貰うことが出来た。でも泣いた、一日中。

その後特に親戚も居なかつたため孤児院に出されることとなり、ある一組の夫婦が私を引き取つた。彼らは貧乏だつたが、直向に働く真面目な人たち——というわけではなく、中学生くらいの子どもを働かせてその金を巻き上げるクソ最低な人たちだつた。一応同じ年くらいの子どももいたが、ろくに世話をもしていなかつた。

毎日毎日その中学生の子どもの負担を減らすためと同い年くらいの子どもの世話を二歳という極小ボディで出来る限り頑張つた。その光景がクソ夫婦の心を打つたようで、四歳になつた時……今まで世話をしていた子どもと共に詐欺をはじめた両親の手伝いをさせられた。幻滅した。

しかし、その稼ぎで何とか中学生くらいの子も学校に行けていたようなのでそこだけよかつたと思つた。

そんな日々の中、高校生になつた一番年上の子は放浪癖が付き、たまに三日四日帰らないことが増えた。何をしているのかと聞いても「俺を呼んでいる声が聞こえるんだ」としか言わなかつた。

同い年くらいの子もある時期はすぐ落ち込んでいた時期もあつたが、しばらくすると元気になり、幼稚園にも通つていた。時々貧乏ということをいじめられていたらしいのでその度に慰めたりもしていた。

ちなみに、私はひたすら詐欺商法を繰り返す両親の手伝いをしていた。時々同い年くらいの子と一緒に「いいかい？ 子どもだから相手は油断するんだ。だから、頑張るんだよ♥」ととんでもなく駄目なことをのたまつていた。

そんな人間のゴミクズのようなやつらだつたがためか、同い年くらいの子が小学生になるかならないかというときについに私は売られ

た。詐欺商法で稼いでいるくせに、その倍はパチンコや競馬で使い潰したらしい。ホントに死ね。

黒スーツに、顔に無数の傷をつけた鬼いさんたちにドナドナされたのだ。小学生で。

流石にこのままでは死ぬと思った私は、何かと高かつた身体能力を生かして脱出し、素敵な1人暮らし（家なし）をすることとなつた。

中学生くらいの年になるまでは、色々と無理があつたがある程度体も成長し、食生活の割には体格にも恵まれたので色々と無駄にクズたち教え込まれた知識からバイトをはじめた。

あの手この手を使い部屋も手に入れ、ようやく安定した生活を今日まで送つてくることが出来た。

しかし、朝、ポストに言つてみると自分のところに見覚えのない手紙が入つていた。

その中を開けると私の名前名義で送られてきた借金請求の紙切れ。その総額は六千万円。下のほうには、『生きているつて分かつたから君の名義で借りちゃつた♪』と見覚えのある字で書かれたものがあつた。

……思わず握りつぶした。

「これが届くということは、既に居場所が割れているということだ
……」

きっと今も鬼いさんたちがこちらに向かってきているであろう。六千万のお金を回収するために。

私は最低限の荷物を持って今まで住んでいた部屋を飛び出した。

そして、あの呟きにつながるのである。

職場のほうにも一応足を運んでみたが、既に鬼いさんたちが向かつていたようで、私の顔を見たとたんに帰れ疫病神と言われた。超泣きたい。

ついでに、あの屑どもは私の容姿をリークしているようで、街中で数回追いかけられたりもした。リアルファイトにも発展し、何とか逃げたものの足とか腕とか頭とか色々やられてなんかもう危険。とうか、詰んでるんじゃないかな、これ。

「はあ……」

「どうか、あれ？」

なんかふらふらしてきた。

おかしいと思いつつ頭に手を当ててみるとそこには血がべつたりとくつついていた。返り血？ いいえ違います自前です。

自分の傷を確認したのが致命的だつたのか、私の意識はそこでふつと途切れた。

「いや、本当にありがとうございました。お嬢様」

「ふ、フン。これから、払ったお金の分だけしつかり働くんだぞ！」

黒塗りのベンツという明らかに金持ちが乗りそうな車の中で、常日頃から不幸な目に遭つていそうな少年と、いかにもツンデレですと外見から分かるような少女の会話が繰り広げられる。

そんな彼らの会話を聞きながら、同じ車に乗っているメイドさんは

噛み合つて いる ようで 噛み合つて い ない 2人の会話を 若干呆れなが
ら 聞いていた。

少年の名前は綾崎ハヤテ。

クリスマス・イブに両親に約一億五千万で売られたとても不幸に愛
されている少年である。彼は糺余曲折あり、隣に座つているツンデ
レっぽい少女、三千院ナギの執事として借金を返していくことになつ
た。

とても親切な鬼おにいさんたちに危うく売られそうになつた時に
助けてもらつたこと、元々は誘拐犯として近付いてしまつたことを含
めて恩を返さねばとしつかり働くことを決意した。

そんな決意をしたハヤテはこれから働くことになる三千院の屋敷
の前で誰かが倒れているのを発見した。

「お、お嬢様！屋敷の前に人が倒れているんですけど!?」

「寝てるんじゃないか？」

「こんな寒空の下、雪のベットで眠る人なんていませんよ！永眠し
ている人はいるかもせんけど!?」

「とりあえず、様子を見てみては？」

メイドであるマリアの一言で車から降りる一同、そしてハヤテが見
つけた倒れている人の様子を見る。

「どうやら生きてはいるようですね」

「なら、今救急車を手配します」

彼らを乗せて いた車を 運転する S.P のうちの 一人が 携帯を 内ポ

ケットから取り出して、救急車を呼ぼうとする。

しかし、その行動に待つたをかけた人物が居た。ハヤテである。

「待つてください。この感じは明らかに間に合いません。助けるには今すぐ処置を施さないと……」

「ハヤテ、何故そんな事がわかるのだ?」

「頭から思いつきり出血しますし、この寒さの中で倒れてたら凍死します。僕にも経験があるから、こういうのは分かるんですよ」

「なかなかブラックな実体験ですわね……」

「なあ、ハヤテ。このまま見捨てるはどう考えてもダメだよな」

「そうですね。この小説的にも人の倫理的にも見捨てたら終わりですね」

お互に頷きあつた2人。

ナギはおろおろとするS.Pたちに指示を出し、倒れていた人を三千院家の屋敷に入れて治療をした。

「…………知らない天井だ」

目を覚ました私は自然とそんな事を口にしていた。

自分の体を見渡してみると、しつかりと治療が施されており、包帯等も巻かれていた。体を動かしてみると、部屋の全貌が見えてきた。
……どれもこれも最低五十万はくだらないであろう家具だ。何だこの部屋超怖い。

無駄に大きいベットから何とか這い出ると、外の様子を眺めてみる。どうやら、朝のようでもまぶしい光が窓から差し込んでいた。助けてくれた人たちにお礼を言つたほうがいいだろうと考え、私はその部屋を出る。

廊下は物凄く広く、所々に高価な絵や像、花瓶が置かれていた。薄々気付いていたけれど、この屋敷は物凄い金持ちの家なんだろう。

そんな事を思いつつ、廊下を歩くと唐突にズガーンという物音が聞こえた。

その音を聞いて、まずはじめに思いついたのは強盗である。この屋敷はパツと見た限りでも高価なものが沢山ある。盗みに入ればかなりの金額が手に入ることは容易に予想が出来る。

一応、覗くだけ覗いておこうかと、物音が聞こえた部屋のドアノブを回してドアを開けると、目の前には大量のミサイルが迫っていた。

——普通つてなんだつけ。

彼がミサイルの嵐に巻き込まれる直前、昨日行き倒れていた少年を

助けることに協力した綾崎ハヤテは三千院家の執事長であるクラウスが呼んだ介護ロボ、エイトと執事勝負をしようとしていたのだが、ナギの暴言にエイトがブチ切れ介護ロボのはずなのに戦うというわけの分からぬ状況に陥っていた。

対処方法としてとりあえずぶつ壊しておけといわれたため、しぶしぶながらも相手をしようとするハヤテに対してエイトはミサイルで攻撃していた。

「クソ、介護ロボの癖に何でミサイル撃つんだよ……！」

介護する気があるのかとツッコミを入れるハヤテ。全うなツッコミを行つたからミサイルの雨が止むわけではなく、今も容赦なくハヤテを狙つている。

同じ部屋の中にはナギやマリアもいるため、避け方は十分に考えなくてはならず、そろそろ限界も近かつた。

そして、回避したミサイルがこの部屋の扉へと向かつた瞬間、昨日助けた少年が扉からひょっこりと顔を覗かせた。

「——ツ！ま、まで！」

思わず叫ぶも、既に発射されたミサイルが止まることはなく、無情にも顔をひょっこりと出した少年諸共、部屋の扉を粉々に粉碎した。ハヤテたちの戦いを見ていたナギ、マリア、クラウスの三人も少年がミサイルに巻き込まれるところをばっちらりと見てしまつっていたため、顔を青くする。

誰もが少年の身を案じる中、一番案じなければいけない自称介護ロボが高笑いと共に動きを止めたハヤテに向けてその腕を伸ばした。

『フハツハハハ、シネエエエエ！』

ガシツ！

しかし、その腕がハヤテを捉えることはなかつた。エイトの鉄の拳は、ハヤテの目の前にいつの間にか立つていた少年によつて受け止められていたからである。

その少年の姿をみたハヤテは目を見開いた。

『ナ、ナンダ!?』

「何だはこつちのセリフなんですけど。いきなり、ミサイルなんて飛ばしてきて……何ですか？最新型のA S I M O？」

「微妙に伏字になつてませんよ。後、違います」

そう、ハヤテがツツコミを入れたのは先程、扉と一緒に爆発四散した少年と同じ人物であつた。

「それより、貴方は先程ミサイルに巻き込まれて死んでしまつたはずでは……」

「……………残念だつたな、トリックだよ……。いや、冗談ですけどね。あいにく、ミサイル打ち込まれたくらいで死ぬような人生送つていないので」

——どんな人生だ。

ハヤテへの返答の時間も気になるが、ナギ、マリア、クラウスの考えはこれに尽きた。

しかし、ハヤテだけは何か通じるところがあつたのかうんうんと頷くと同時に仲間を見つけたような表情を浮かべていた。

「何故、ハヤテはしきりに頷いているのだ……」

「親に一億五千万円で売られちゃうような子ですから……ハヤテ君にも似たような経験があるのでないでしょうか？」

大体あつてる。

「ならアレはなんなんですか？ A S I M ○ じやないんでしょう？」

「アレはこの三千院家の抱え込み企業が開発した介護用ロボットらしいですよ」

「……介護？ ミサイル飛ばすのに？ 思いつきり死ねとか言っていたのに？」

「気持ちちは分かります。むしろ正しい反応です。しかし、事実です」

「ミサイルはないですね。ミサイルは。あれ作った人なに考えているんですかね？」

『好き勝手言いやがって……！ 嘘うえ』

2人の会話に切れたエイトは再びミサイルを放つが、二人はあわてた様子もなく、ミサイルに向き合っている。何故なら彼らが居る場所はナギとマリアを巻き込まない位置に立っているからだ。すなわち、遠慮がいらない。

2人は最低限の動きでミサイルを回避すると、エイトに接近していく。ミサイルが効かないと思ったエイトは即座に腕を伸ばすことで応戦するが、それを逆手に取られ、少年に引き寄せられてしまつた。

そして、そのまま

「ハヤテ！」

「お任せください！――飛べ！」

『グボオ!?』

ハヤテの放った蹴りにより、エイトは火花を散らしながらボロボロになつた部屋の窓から外へぶつ飛んでいった。ナギはハヤテが勝つた事で喜び、クラウスはエイトが敗れたことに唖然とし、マリアは部屋の惨状を見てどうやつて後片付けをしようかと考えていた。

「いや、ありがとうございます。なんか助かりました」

そして、エイトを倒したハヤテは協力してくれた少年にお礼を言つていた。それに対して少年は気にするなど答える。

「…………でも、何で僕の名前を？僕、名乗りましたつけ？」

「あ――忘れちゃつたか……ハヤテ、あの屑どもは元氣にしているか？」

「――!? 僕の両親をそう呼ぶのは……まさか……『おにいちゃん』?」

ハヤテの言つた言葉にバラバラのことを考えていたナギ、マリア、クラウスは一斉にハヤテに視線を向ける。そして、全員で叫んだ。

『お、おにいちゃん!』

三千院家にそんな叫びがこだました。

ここから、少年。

綾瀬雅の第二の人生が本格的に始まることになるとは、本人も含めて誰も思わなかつた。

過去最高レベルのキチガイが行くH S D D

「目を覚ましたら、広がっていたのは見覚えのない光景でした」

己の状況をあえて声に出すことで現状をより理解しやすいようにする。

「ふうー…………」

湧き上がる感情を長い息と共に吹き出すことにより、自分の感情をコントロールし、冷静に考えることが出来る。

「…………」

以上、今までの経験から培つてきたことを行つて自分のない頭を捻つてみた結果、俺の脳みそがひとつつの結論を導き出す。

それはすなわち、

「またか……」

俺はまた異世界に来たということだ。

もう本当にいい加減にして欲しい。修羅神仏が集まる箱庭とか、自由気ままな神様が横行する世界とか、剣だけのバーチャルデスゲエイムとか、英雄同士で殺しあいとか、散々色々やらせておいてまだ別のところに突つ込む気か。

元々居る世界も毎日神様相手にレツツパーリーするよくわかんないところだけど、こうも頻繁に世界旅行することもよくわかんない。しかも最近、なんか異世界への行き方が難になつてるし……。

あれかな？サカキ博士やラケル博士が言つたとおり、地球はそこまでして俺を追い出したいのかな？何度も何度も世界線を越えさせる

ほど、俺を追い出したいのかな?

「はあ……」

異世界に来て、状況を把握して、そこからの溜息……ここまでの一連の動作がルーティン化してきているような感じだ。そしてそれが余計に俺の心労になる。

……何はともあれ、世界線を越えてしまつては仕方がない。やることは何時もと変わらない。ここがどういう世界なのかという知識を得て、自分の居た世界に帰ること。それだけよ。

頭の中を異世界に来たばかりモードから、今後のために頑張ろうモードへと切り替えてもう一度周囲をよく観察する。

目に入つてくる光景はいたつて普通の住宅街だ。これは樺原信慈の記憶と照らし合わせるに、現代日本に限りなく近い町並みである。ということは、この世界は過去なのだろうか？

「と、いうか。今が夜で助かつた……」

そう、辺りは家の明かりと街灯の明かりが輝いている。すなわち夜だ。ここが現代日本だとしたら、現在進行形で神機という凶器を所持している俺はお縄に付いてからの武器没収、警察官が神機に食われてからの指名手配待つたなしの状況に陥っていたことだろう。いや今も油断できませんけどね。

両足に力を入れて、音をなるべく立てないように跳躍。失礼ながら近くの家屋に着地する。

そうして家屋を移動していき、近辺で最も高い建物の屋上に飛び移る。気分はニンジャ。アイエエエ!?

神機使いになつたことと特異点になつたことの影響で視力の上がつた目で町全体を一望する。特に変わつたところもなく、どうやら平和そうな町だつた。

そんなことを考えつつ背後の光景にも視線を向けると、そこにはつい先程考えたこととはまったく真逆の状況が広がつていた。見えるのは、学校と思わしきものを囲つた半透明のバリアー的なものと、そこからあふれる光の奔流。一目見たと瞬間にわかつた。あれはアカンやつや。

結構なエネルギーが内包されていると見える。この町くらいは軽く吹つ飛ばせるかもしれない。どうやらこの世界もかなりサツバツとした世界のようだ。ぶつちやけ関係がないのでこのままどこかに逃げるというのも有りだなあ。こういう状況の場合既にあの中で誰かが戦つているんだろうし。しかし、あの結界的な何かをはれる人はこの世界の事情に詳しそうなかんじがする……。

とりあえず行つてみて、違つたら違つたらで帰ればいいか。

方針を決めると、俺は結界が張つてある方向に、一気に跳躍した。

どうやらあの結界は複数人で維持するタイプのようだつた。結界の周りには制服姿で浮いている数人の影が見える。どうやらこの世界の人は浮けて、超能力的不思議パウワーが使えるようだ。結界使つてるし一瞬だけO N M Y O U J Iかと思つたが、魔方陣に描かれている文字がなんか歐米っぽいから魔術師とかそんな感じだろうか？

向こうもこちらの存在に気付いたらしく、眼鏡を掛けた黒髪ショートの女の子が警戒心バリバリで俺に話しかけてきた。

「こんな時間に人間……人間？（たぶん）人間がなんのようですか？」

貴女も人間じやないんですかね？」というか、どうしてそんなに不安そうに言うんだよ。断言してよ。俺も自分が人間とはあまり思つてないけども。

理由？異世界を旅して廻る（不本意）をしているうちにそう考えるようになつたんですよ。

「この町を見渡してたらなんかすごいのがあつたので様子を見にきました」

「そんな適当な理由を信じるわけないでしょ？」

事実です（真顔）

ついでに言えば気が付いたらこの町に居ましたという信じられない出来事もセットで付いてくる。どうせ信じてもらえないから言わないけど。

「所でこれは何をしているんですか？」

「貴方に話しても仕方ないことです」

予想していた通りの門前払いっぷりだ。
これもう諦めて帰ろうかな。

「そうですか。じゃ帰りますわ」

うん。帰ろう。

別にまつたく持つて俺には関係のことだし、この人たちに聞かなくても大丈夫だろう。

……と思わせつつ裏から入ろうか。外の人が教えてくれないなら中にいるであろう人に聞いたほうがいい。正直、今からあの人たちのようないわゆる裏のこと精通している人を探すのが面倒くさい。

結界の維持に集中しだした浮く人たちに気付かれないように、彼らがいるところとは逆の方向に向かうと、結界に人一人分だけ入れるよう穴を神機の捕食形態を使つてあけ、そこから中に進入する。

パパッと校舎を飛び越えて、なにやらドツカンバツコン轟音を響かせているグラウンドへ着地した。高さが高さだつたのでちよつとばかり轟音を響かせてしまつたため、その場にいた全員の視線がこちらにきた。俺も詳しく状況を把握するために視線が来ているほうを向く。

するとそこにはカオスが広がつていた。

某ギアでカレーに踊れループをしそうな外見で黒スーツをまとつている長身のおじさんに胸元がはだけて丸見えの巫女服をきた女子。他にも赤髪の女子と左手に赤い籠手をした男子、金髪で色が混ざつた剣を持つ金髪の男子に同じく金髪の女子、黒インナーできな服装オーリーの痴女っぽい青髪の女子に、銀髪幼女…………なにこれえ？

「…………なんだ貴様」

いち早く復帰したのはいかにも悪役ですといわんばかりの人相をした長身のおじさん。手にはライトセイバーのようなものを握つていた。あの外見で金色の光を放つライトセイバーを持っているとか違和感やべえな。

あまりのミスマッチさに固まつていると長身ライトセイバーおじさんは無視されたと思つたのか、手に持つていたライトセイバーを一本俺に投擲してきた。

なかなかの速度で迫るライトセイバーだが、俺を貫くことは出来ず、捕食形態をした神機の中に飲み込まれていった。流石の吸引力。

「なんだと!?」

『!?

自身のライトセイバーが飲み込まれたことがそんなに以外だったのか、人相の悪い顔を驚きの表情で一杯にする長身の人。

周囲に居たこの学校の生徒（予想）たちも驚いたのか、長身の人と同じようなリアクションを取っていた。あの人多分強いのかな。少なくともそこらにいる人たちよりは。

「クハハ、おもしろい。人間の癖に俺の攻撃を防ぐとは……リアス・グレモリーとその眷属たちよりも俺を満足させてくれそうだな！」

お前も満足民か。

自身の攻撃が防がれたというのにあの喜びよう。俺はこういう人種を知っている。俺の身近に居たバナナは完全にこの長身の人と同じ病気を患っていた。

背中から合計十枚の黒い翼を生やした長身のおじさんは、自分の背後にいくつもの光の槍を作り出し、それを俺に向けて射出してきた。どこぞの金ぴかを思い出すな、と過去に思いをはせつつ、向かってくる槍を全てなぎ払う。

「ほう？ それがお前の神セイクリッド・ギア器か？」

「セイクリッド・ギア？」

知らない子ですね。俺の持っているのは神機だけど……あ、なるほ

ど。先程の黒髪ショートの眼鏡さんと長身のおじさんは、どうも自身の発言から人間ではないようだ。おそらくそこにある学生服の集団もそうなのだろう。で、生身の人間が戦うのは長身のおじさんのいうセイクリッド・ギアというものが必要なのだろう。多分。

「……フツ、まあいい。神器の存在を知つていようと知つていなかろうと、戦うことが出来ればなあ！」

なにやら勝手に納得したらしい長身のおじさんは、自身に生えている翼をはためかせながらこちらに接近を試みてきた。その速度はなかなかの速度である。だが、まだ甘い。俺が今まで相手してきた化け物や修羅神仏のほうがまだ速かった。

ライトセイバーを振りかぶる長身のおじさんの懷にこちらから入り込み、ライトセイバーを振れない位置を確保しつつカウンター気味に鳩尾へ裏拳を入れる。自分から勢いよく突っ込んでいたこともあって、長身のおじさんは俺に接近するときよりも勢いよく背後にぶつ飛んだ。

だが、長身のおじさんはもうそれ邪魔じゃないの？とも感じられる十枚の翼を一気に広げて勢いを殺すと、とつてもイイ笑顔で先程の何倍もの光の槍を創造した。楽しそうですね。

「フハツ！ いいぞ……これが俺の求めた戦いだ！」

「さいですか」

次々と射出される光の槍を捌きつつ考える。

なんだろうな。今まで相手してきたやつに比べてなんかとつても物足りない。あの黒い翼を見る限り、墮天使とかそんなのだろうとは思ふけど……まつろわぬインド勢とか白夜叉とかとやりあつた経験があるとなんか、ねえ？

いいや、さつさとボコつて異世界の行き方でも聞き出すとしよう。

唐突に戦いに乱入してきた人物に、先程まで長身のおじさん——コカビエルと戦っていたオカルト研究部の悪魔 α は驚愕を隠し切れなかつた。

冥界では期待できる悪魔であつたリアス・グレモリーもその眷属たちも、無駄に自信に満ち溢れていた聖剣使いも誰もがである。自分たちでは絶対に敵うことのない相手に互角の戦いを繰り広げているのだ。それも仕方ないこととも言える。どちらにせよ、リアスたちにこの戦いに乱入できるほどの実力はないのだから。

「いいぞ、いいぞ！ もつとだ！ もつと俺を楽しませろオ！」

「……」

今までの槍など比ではなくくらい巨大な光の槍を創造しつつコカビエルは謎の乱入者（仁慈）に向かつて砲える。一方の乱入者のほうはコカビエルに失望とも思える感情を一瞬だけ向けた後、自身の身長にも迫る大きさを持つている大鎌を構えて、疾走した。その速さはまさしく神速。リアスたち人外のものの動体視力をもつてしても影すら捕らえられぬ速さで接近する。

コカビエルも見えていないのか、瞬きをする合間に50mはあつた距離を一瞬でつめてきた謎の乱入者に巨大な槍を振り下ろす。だが、もう遅い。見て対応をしてからでは遅すぎる。

コカビエルが槍を振り下ろす頃には既に乱入者は彼の背後で背を向けていた。舐めたまねを……を背後を振り返り、槍を当てようと

するが、自分の視界がずれた。

右目と左目の位置がずれているようなそんな感覚……コカビエルは自身が縦に両断されたことに気付く前にその命を終えた。

「しまった……異世界にいく方法を聞くの忘れてた……」

一方さつくりとコカビエルを葬つた乱入者のほうは自身の行いを思いつきり後悔していた。一応、この場には他にも人はいるのだが、どう考へてもコカビエルのほうが色々知つていそうだつたので物凄く後悔しているのである。

乱入者が途方にくれているのを見て、リアスが彼が一体何者なのか、自分達の敵なのか味方なのかを尋ねるために口を開こうとする。

しかし、彼女が言葉を発することはなかつた。何故ならリアスと同学年であり同じ悪魔であるソーナ・シリリーたちが張つていた結界が唐突に崩壊したからである。そして、上空に光り輝く球のようなものがこちらに乱入者のほうに向かつてきていた。結界をブチ破つてもなお衰えない勢いで接近する光の球はその乱入者に激突するが、目の前に現れた化け物の口によつて遮られたため、進路を変えて乱入者の正面に着地した。

「アザゼルからコカビエルを回収するという簡単なお使いだつたはずだが……なかなかどうして、面白そうなやつがいるじゃないか」

光が消えるとそこにいたのは、白銀の鎧を纏い、大きな翼を生やした人型が居た。二度目の侵入者にリアスたちが感じたのは驚愕ではなく、恐怖だつた。コカビエルを超える力を持つていると、本能が訴えているのである。

「あ、あれは？」

赤色の籠手をした少年、兵藤一誠が疑問に思う。その一誠の声に反應したのはなんと彼がつけている赤色の籠手だつた。

『あれは白龍皇だ』

マダオヴォイスから聞こえてきた白龍皇という単語にリアスとの眷属たちは弾かれたかのように一誠を見た。

白龍皇とは赤龍帝の宿敵である。一誠が左腕につけている赤い籠手、それこそが赤龍帝の証だから、皆は一誠を見たのだ。

一誠も声の主、赤龍帝ア・ドライグ・ゴッホの声を聞いて気を引き締める。宿敵ということはここで一戦交える可能性があるからだ。だが、白龍皇は一誠に視線を向けることなくコカビエルをおした1人目の乱入者にのみその顔を向けていた。

「コカビエルの件はもうどうでもいいな。適当に羽でも持つて帰ればいいだろう」

1人そう呟くと、白龍皇は片手を乱入者のほうに向けて、膨大な魔力の塊を撃ちはなつた。あまりの膨大さに旋風が巻き起こり、戦いにまったく参加していないリアスたちも腕で顔を覆う。

的にされた乱入者はその魔力に怯えることなく、手に持つている武器を振り上げる。それだけ、たつたそれだけで、膨大な魔力を両断し攻撃を防いで見せた。

乱入者が行つた行動に白龍皇は鎧の中で笑みを浮かべる。自身が楽しむことが出来る強者との邂逅が嬉しいのである。

「鎧の君は異世界に行く方法を知つてるか？」

唐突に乱入者がそう尋ねる。

白龍皇の答えは攻撃だった。話を聞く気ゼロ、そんな暇があるなら戦えという意思表示である。

乱入者は、ハアと溜息を付いて白龍皇を迎えた。

超かっこいい鎧を纏つた人型？今俺の前で地面に転がってるよ。見事なまでに話を聞かないでの極東流説得術OHANASHIをつかつた結果である。致し方なし。

というか、勝負にならなかつたわ。この鎧の人のセイクリッド・ギア？が俺にまったく効果を及ぼさなかつたんだ。異世界にいく方法ついでにこの鎧の人聞いてみただけど、このセイクリッド・ギアは漢字で書くと神器と書くらしい。読めるか。

そしてこの神器というのは聖書の神が作り出したものなんだそうだ。

だから効かなかつたんだな。

正直今の俺は完全に神キラーと化しているのだ。大体箱庭の所為。そのため、聖書の神が作つたといわれる神器の効果をまんまと殺していたのだろう。相性が悪かつたね。うん。

でだ、それはともかく、異世界にいく方法は彼も知らないらしい。というか、この世界に異世界旅行的なことは出来ないという。一応冥界やら天界やらもあるらしいが、それが限界とのこと。次元の狭間という場所もあるが、生身ではすぐに消滅してしまうような空間の上にこの世界最強がそこに住んでいるんだという話をしてくれた。

割と有益な情報だったので、背中を踏んでいた足をどけてあげる。立ち上がりつた鎧の人は俺が倒した長身のおじさんの羽を一枚拾つたあと、赤い籠手をした少年と少しだけ話してこの場を去つていた。去

り際に再戦を申し込まれたけどスルーしておく。

今までの情報を整理すると、この世界には箱庭のように修羅神仏や魑魅魍魎が割りといるらしい。そういう連中相手にしておけばそのうち帰れるかな？

いや、その前に……

「そこの貴方、少し話を聞きたいのだけどいいかしら？」

敵意をビンビンぶつけている赤い髪の女子の相手が先かもしけない。というかいい加減胸かくしなよ。

これは、過去最高レベルにバグった神機使いが、自分の世界に帰るために、向かってくる敵や味方をバツタバツタなぎ倒す物語である。

もちろん嘘ですよ？

神殺し先生仁慈

場所は学校。

無駄に広い敷地、外国にありそうな建物が乱立する空間に俺は立っていた。周囲には複数の人影。誰もがスーツを着て、場所から考えて教師ということが分かる。

ただし、持っているものは銃やら刀やら杖やらと、とても授業で使うものとは思えないものを手に俺を囲んでいるのだ。全員が険しい表情をしていて、俺と仲良くするために近付いてきたわけではないことがはつきりと分かつた。

まつたく、せっかく箱庭で異世界に渡れるギフトが手に入つたのに。いろいろなごたごたを片付けて、ようやく帰つていけると思つたのにこの様だ。一応世界は超えられたものの、俺の元々居た世界ではなく、別の世界……いわゆる並行世界に来てしまつたらしい。

でも、普通の学校じやないよなあ……明らかに。

刀、拳銃、ナイフ……その辺のものならまだ分かる。

しかし、この不審者（俺）を相手に杖を構えるということは、それを媒体に何かを発動できるということだ。このことから、この世界では魔法や超能力があるということが推測できる。あの杖が実は仕込み刀の可能性もあるけれど、構え方が刀を抜けるような体勢でないのでとりあえず排除しておく。

「君は一体何者かな？ 関西呪術協会の人間か？」

色黒眼鏡の男性がそう問いかけてくる。

名前からして、陰陽師的な力を使う組織なのだろうか。それと敵対しているということは、この学校はそういう力を教えている場所なのか？

彼の言つた言葉からこここの世界のことを思考を廻らせながら、彼の

言葉に答える。この平行思考は当然極東の事務処理から手に入れたものだ。……あいつら、事務処理中に俺にどうでもいい話振つてきやがつてこの野郎。

まあ、愚痴はともかく。

どうやら俺は敵対者に間違われて囮まれているようだ。かと言つてここで弁明してもどうせ意味のないパターンな気がするんだよなあ。

「どうやつても答えないというわけか」

「そういうわけではありませんよ。ただ、俺が何か言つてそれを素直に信じるんですか？」

「…………」

痛いところを突かれたという顔をする色黒眼鏡の男性。まあわかつてた。余裕の回答です。経験が違いますよ。

さて、ここからどうしようかな。逃げようと思えば多分逃げることは可能だと思われる。こうしてパツと見るだけでも、状況から自分達が圧倒的に有利だと油断をしている人が数人見受けられる。そこを穴として突破するとは可能なのが……ここで逃げても絶対に面倒なことになると思われる。どうしたものか。

俺が次に取るべき行動を思い起こしていると、状況のほうが先に動き出した。こちらにもう1人、白いスーツを着こなし眼鏡を掛けている中年の男性が向かってきているのである。その男性を見て俺を囮っている人たちは大層驚いていた。どうしてこの人がここにと言つたような風である。

……実力はこの中でも随一、戦闘経験も豊富そうだな。浮かべる表情と雰囲気がそう継げていてる。

「た、タカミチ先生……!?」

「ガンドルフィー二先生。ここはひとつ警戒を解いてくれないかな？彼の様子を見る限り、ここを襲おうという雰囲気ではなさそうだ。……それに、彼の実力ならこちらを害する気なら既にかなりの被害が出ているだろうしね」

そうこちらを確認しながら言葉を発するタカミチ（仮）

予想はなんとなく遭っていたようだ。この態度、この言葉使い……強キャラのにおいがすごいする。もし戦うようなことになつたら全力で叩き潰そう。

「し、しかし……！彼のように身元不明の不審者を校内で野放しにするのはいかがなものかと」

「それに関しては問題ないよ。実は学園長からそこの彼をつれてくるように言われているんだ。だからここは僕達に任せて欲しい」

「学園長と貴方が言うのであれば……」

色黒眼鏡の男性はタカミチ（仮）の言葉で持っていた銃とナイフを下ろした。俺を取り囲んでいたほかの人たちも次々と自身の得物を下ろした。

「いや、失礼したね。いきなり複数人で囲んで脅すという暴挙を犯したにも関わらず、理性的に言葉でコンタクトを取ってくれて本当に助かったよ。ありがとう」

「はじめから見てましたね。別に蹴散らしてもよかつたんですけど、それだと絶対面倒になると思いましたし」

「な、なんだと!?」

「あー……ガンドルフィニー先生落ち着いてください。君も、あまり挑発しないでくれないかい?」

「今まで高みの見物を決めこんでいた仕返しです」

向かつてきたら向かつてきたで正当防衛ということを盾に返り討ちにするし。余裕の表情で現れたタカミチ（仮）の表情が苦労で歪んでいく光景を傍目に俺はこの場所の学園長という人物がどんなものなのかということにたいして思考するのであった。

ところでここつて日本なのかな。

教師の外見もこの学校の建物たちも日本のものとは思えないんだけど。

学園長はどうやら後頭部にきゅうりかナスを隠し持っているらしい。

俺がタカミチ（仮）にドナドナドーナードーナーされて連れて行かれた学園長室で初邂逅を果たした学園長に対しても俺が一番最初に思つたことである。

耳は菩薩とかそういう像のように垂れ下がり、後頭部はぬらりひよんのように後ろへ伸びている。この外見で問題なく学園長を勤められていふことが不思議なくらいの外見だつたのだ。俺がそう思つても誰も攻められやしないだろう。

「態々出向いてもらつてすまんの。何しろ、ワシも大分年でな。自分から出向くには苦労していかんのじゃ」

「そうですか」

嘘くせえ。

サカキ博士やラケル博士と同じく口八丁手八丁で人を陥れることが得意な人間だと俺の勘が言っている。あの2人が狐だとすればこつちは狸と言つた感じだな。

「おつと、そんな事より自己紹介じやな。ワシはこの麻帆良学園の学園長をやつとる近衛近右衛門（このえこのえもん）というものじや」
「どうも、全神靈種の天敵という名前を最近付けられました樺原仁慈です」

冗談に聞こえるだろ？信じられるか、これ本当に言われたんだぜ？完全体白夜叉から直々に。神様公認の仇名ですよ。

俺が言つたことを冗談と取つたのか、近衛近右衛門はフオフオフオと笑つていた。バルタン星人かな？

「では仁慈君に質問じや。おぬし、何が目的でこの麻帆良に来たのじゃ？ついでにどうやって來た？」

「まあ、信じてもらえるかは分かりませんが一応お話しましよう」

信じてもらえる可能性が低いのでそう前置きをした後に、ここに來た経緯を簡単に説明する。と言つても言うべきことは別世界から事故でやつてきてしまつたと言うことと、狙つてここに來たわけではないということか。箱庭のことは伏せてここに來た経緯だけをかいつまんで話すと、近衛近右衛門はものすごく後ろに出つ歯つている額に手を当てて天を仰いだ。

「なんとも、信じがたい話じや。まさか平行世界とは……」

「ですよねー」

こういう世界線を越えると言う現象はどの世界でもマイナーなものだもんね。知つてたよ。箱庭くらいだけだとおもう。

「そもそもどうやつてこの世界に来たんだい？」

「能力で」

「今すぐ使えばいいんじゃないかな」

「出来たらとっくにやつてます。世界線を越えるんですから、それなりのタイムラグが必要になります」

魑魅魍魎、修羅神仏、いろいろな生物がごつた煮状態の箱庭にも流石にそこまで便利なものはなかった。というか、チャージありにして何度も世界を越えられるだけでも十分破格だと言われたつけ……。まったくもつてその通りです。

「フム……そのチャージ期間はどのくらいじゃ？」

「んー……大体1年、でしょうか」

これをくれた人曰く、周囲に神力があればそれを吸つて時間を短縮できるらしいけど、この世界には神様なんていないだろうし。

「…………」

近衛近右衛門は少し黙るが、すぐに考えが纏まつたのか口を開いた。

「一応、その問題を一気に解決できるものがある」

「本当ですか？」

「本当じゃ」

「おい、ジジイ。それはもしかして私のダイオラマ魔法球を使う気じゃないだろうな？」

またしても知らない声が、会話の中に割り込んできた。音程は高く、まるで鈴の音色のような声であった。女……それも子どものものだと言うことが分かる。

「…………聞いておつたのか」

「感じたことのない不思議な存在を確認してな。興味がでた」

「引きこもりのエヴァが出てくるとは珍しいね」

「誰が引きこもりだ。私だってたまには外に出る」

タカミチ（断定）の声に反応して彼女は姿を現した。タカミチ（断定）の影の中から。

10代に届いたくらいの外見、美しいプラチナブロンドの髪を持っていた。パツと見人形に見えなくもない風貌である。しゃべりかたからして、よくある外見と実年齢が比例しない類のものだろう。とうか、何処と泣くレティシアさんに似ている気もする。十六夜曰く「金髪で口リで吸血鬼は定番」らしいから、彼女も吸血鬼だろうか。

そんなことを考えているうちに金髪少女は俺に近付いてきた。

「…………お前、純粹な人間じゃないな。意味不明なものがいくつか混ざっている」

「よく分かりましたね」

証拠として両腕を捕食形態に変形させる。一番色濃いのはこれだろう。

普通の腕が急に黒くなり、ついでに化け物の口みたいになつたため、近衛近右衛門とタカラミチ（確定）は警戒したように表情を引き締めて臨戦態勢を取つた。しかし、目の前の金髪少女はクハハと愉快そうに笑つていた。

「何だこれは、私も長い間生きてきたがこんなのは初めて見たぞ！」

「なんと禍々しい……」

「これは……見ているだけでも鳥肌が立つ……！」

三者三様の反応を見せてくれたところで、俺は腕を通常の状態に戻す。

ところで先程いつた解決策とはなんなのだろうか。

「そういうえば解決策っていうのはなんなんですか？」

「ダイオラマ魔法球というものなのだが……」

「それの持ち主は私だ。そして、私はあいにくその道具を貸す気がない」

「……なら仕方がないな。

俺は近衛近右衛門とタカミチと金髪少女に挨拶をするとその部屋から出るため扉に手を掛けた。

「おおい！待て待て待て待て！」

「？なんですか？」

「何でそんな素直に帰ろうとするんだ!?」

「もうここには用がないので」

「ちょっとドライすぎないか!?」

どうしたんだこの金髪少女。一年くらい別に構わないと思う。ど
の世界線も基本的に時間を共有していない。ここで一年過ごすと、
極東支部では一日しかたつていないという精神と時〇部屋理論が働
いたりもするのだ。そして、その逆はありえない。そういう風にギフ
トを改造したからな。

なのでこの一年をこの世界での観光で費やすことも出来るのだ！

「ここはほら、色々あるだろ？条件をつけても貸してもらおうとか
さ」

「別に一年くらいは……」

「ハツハツハ、素直じゃないんだからエヴァは。要があるなら普通
に頼みこめばいいのに」

「悪の魔法使いがそんな真似できるか！」

賑やかだなあ……。

「……そうじやな。仁慈君ひとつだけいいかね？」

「なんですか？」

中年のおっさんと金髪少女の言い合いという果てしなくシユールな光景を視界に納めつつ、近衛近右衛門の言葉に耳を傾ける。

「一年、行く先がないと言うのなら少しばかり頼みごとをしてもいいかね？」

「対価は？」

「一年間の衣食住の保証。それと、この世界の知識じや」

「俺のするべきことは？」

「ある人物の護衛をお願いしたい」

「護衛って言うのは一年?」

「そうじや」

「戦闘の可能性は?」

「護衛だから当然あるのう」

「それは魔法使い?」

「まあの」

「世界の一個や二個壊せるやつが来る可能性は？」

「あるわけなかろう」

……うん。その程度なら問題はないかな。

「わかった。受けましょう」

こうして俺はこの麻帆良で働くこととなつた。

「所で、護衛って誰の護衛ですか？」

「うむ、このこじや」

そう言つて差し出されたのはひとつの中写真。

そこには赤毛でめがねをかけた少年が映つていた。

「この子は？」

「護衛対象で、この冬に女子中等部2—Aの担任となるネギ・スプリングファイールド君だ」

「えつ？」

「えつ？ マジで？」

カルデアでの日常

人理継続保障機関・カルデア

魔術だけでは見えない世界、科学だけでは計れない世界を観測し、人類の決定的な絶滅を防ぐために成立された特務機関である。

しかし、2015年。

何の前触れもなく近未来観測レンズ、シバによつて観測されていた未来領域が消失した。

計算の結果、人類は2016年で絶滅する事が判明——いや、証明されてしまった。

そんな中、シバは新たな異変を観測した。

西暦2004年 日本 ある地方都市。

ここに今までにはなかつた、「観測できない領域」が現れたと。

カルデアはこれを人類絶滅の原因と仮定し、それを回避するためには、いまだ実験段階だつた第六の実験を決行する事となつた。

それは、過去への時間旅行。

術者を靈子化させて過去に送りこみ、事象に介入する事で時空の特異点を探し出し、これを解明、あるいは破壊する禁断の儀式。

その名を聖杯探索 —— グランドオーダー

そんな、人類の未来という超弩級の荷物を抱えてしまつたのは、魔術に明るくない殆ど一般人と変わらない少年だつた。たまたま魔力があるということでカルデアに訪れていた彼が急に世界の命運を左右する人物になるなんて、周囲の人のがいれば同情を禁じえないだろう

が、生憎同情をくれる人すらないような状況である。

さて、そのような重すぎる役割を承った少年だつたが、現在はカルデアの中でのんびりと過ごしていた。

既に5つの聖杯を回収した少年は次の特異点が現れるまで、仮初めの平和を享受しているのである。

「先輩、お茶です」

少年の初めてのサーヴァントであり、カルデアで初めて知り合ったメガネをかけた少女、マシユ・キリエライトの入れてくれたお茶を礼を言いつつ受け取り、口に含む。半分ほど飲んだところで、ホツと一息ついた。

「……平和ですね」

【そうだね】

マイルームのベットに2人で腰掛けながら、しみじみとつぶやく。それはさながら、縁側で寛ぐ老夫婦のような光景で、少年が呼び出した他のサーヴァントが目にすれば烈火の如く暴れ回るレベルのものだつた。

このままこの時間が永遠に続けばいいなと思う少年であつたが、その直後に

ドカンッ！

マイルームにいるはずの自分たちにすら聞こえる爆発音と衝撃が発生する。

彼の平和はこうして儚く散つていった。少年はため息1つ吐いてお茶を一気に飲み干すと、爆発音の発生源へと足を進めるの出会つた。

きっと、その爆心地にいるのは、呼び出した英靈の中では古参であり頼りになる彼だろうというあたりをつけながら。

――――――――――――――――――――――――――

カルデアは今日もカオスです。

開幕早々何を言っているんだと思われるかもしれないけど事実なんです。正直、樺原仁慈おれにも何だかわかりません。

強いて言えば大体ノッブの所為。ふあつきゅーノッブ。

「散々なものいいじゃのう。流石のワシもちと傷つくぞ」

「嘘つけ。それくらいで傷つくタマじやないだろ」

「何故ばれだし」

「何故ばれないと思つたし」

いきなり俺の背後から地雷をぶん投げて吹き飛ばそうとしたノツブに向き直る。

普段の行いを振り返ってみろよ。大体ノツブの所為とか言つても過言じやないくらいには色々やらかしてるだろ。そもそもお前がカルデアにきた理由を思い出出してみろ。

「是非もないよネ！」

「ならここで俺に切られるのも仕方ないな」

「うおおい！今のマジ！マジもんの一撃！」

チツ、間一髪で避けたか。

腐つても織田信長というわけか。腐つても。

「なんでワシそんなにディスられてんの……」

「1996回」

「お前が背後から俺の事を爆撃してきた回数だ」

「……」

わかる？この回数の壮大さ。まだこいつが来てから半年くらいだつていうのにこの回数ですよ？単純に計算して1日10数回爆撃食らっているわけですよ。控えめに言って頭おかしいでしょ。しかも俺バーサーカーですよ？オラクル細胞のおかげで軽減されてるけど、すべての攻撃が致命傷レベルだからね？

「…………えへっ」

「ギルティ」

例え身長が小さくとも、例え女だろうと、CV釘宮理恵だろうと、慈悲はない。

俺は一瞬でノツブの背後に回り込むと、彼女の首を後ろから締め付けて地面に沈めた。

「だから貴様は最後まで靈基再臨されんのだ。限界レベル70めが」

「それ……は……禁、句……ガクツ」

ふつ、勝つた……。

ノツブを地に沈め右腕を天に向けて突き上げると、このカルデア唯一のマスターとその初めてのサーヴァントとなつたマシユが廊下の奥から顔を覗かしていた。

「またやつているんですか？ノツブさんも懲りませんね」

【まあ、わかつてた】

マスターとマシユはいつものことという反応を示す。実際その通りなので反論はない。ノツブはカエサルとパラケルススに続くカルデア三大黒幕（笑）のうちの1人だからな。

「それはいささか不本意だな。私は幸せを運んでいるのだぞ」

「ええ、ええ。全くその通りです。私たちはこんなにもあなた方のことを想つていてるのに」

「どつから湧いてきた」

俺たちの会話に唐突に割り込む2人。つい先程話題に挙げたばかりのカエサルとパラケルススである。

ちなみにこいつらの言い分は、カエサルが自分のみの幸福を自分だけに運ぶこと、パラケルススは他人の不幸を想つているということである。

マスターとマシユもそのことがわかっているため、彼らに白い目を向けている。残酷なことだが、普段の行いの結果だ。これを機に悔い改めろ。

そのことを彼かに突きつけてみるが、そんな言葉で改心するくらいなら彼らも周囲からこう思われてはいないわけで、予想通り特に気にすることなくその場から去つていった。

「マスター、マシユ。俺もそろそろ自分の部屋に帰ることにするわ。

……なんか騒がせてすまん

【別にいいよ。仁慈さんは被害者だから】

【そうですよ】

「ありがとう。じゃあまた」

マスターとマシユに背を向けてその場を離れる。彼らももうここ

には用がないとすぐに自室へと帰つていった。

……残されたのは先程から床と同化しているノッブのみである。
「何処でも割と思うんだが、ワシの扱いひどくね？」
是非もなし。

――――――――――――――

「おや？」

「げつ」

マスターと別れてしばらく、サーヴァントが増えて地味な増築を続けるカルデアの廊下を歩いていると今度は、明らかに着物ではない着物を着用したキツネ耳の女性とでくわした。思わず変な声が出てしまい相手側にそれも聞こえていたのか眉をひそめた。

「げつとはなんですか。人の顔を見た瞬間にそんな声を出すだなんて失礼にも程があります」

「ごめん。出会つて早々攻撃されたトラウマが ggggg」

「うぐつ！……それを言われると、なかなか痛いものが……」

出会い頭に一夫多妻去勢拳を撃つてきた恨みは絶対に忘れない。

衝撃の痛さだつた。あれを食らつた時死すらも覚悟したわ。主に男として。

「いやーあれはー……なんといいますか、こう……月かなんかで戦つたことがあるー？みたいなーあれが有りまして……」

「相変わらず要領得ないな、オイ」

月が如何の斯うの初エンカウン特にも言われたけど、俺には心当たりが全くない。

確かに獸耳の女性とは何回か鬪つたことはあるけどもさ、この玉藻の前とはやりあつた記憶はないんだよな。

「如何にも覚えがないといった風ですね。まあ、私も確固たる記憶があるわけではないのですが。私にあるのはあ、とりえず月に私好みのイケ魂がいるつてことくらいですね、ハイ

「本当に何言つてんだこいつ」

玉藻の前の人格の1つであるキヤツトにも言えることだけどこいつら本当に話しあじないな。

「貴方も中々のイケ魂ですけど……神殺しEX^{それ}が邪魔なのでタマモ的にはお断りなんですよ」

何をどうしたら俺が彼女に振られることとなるのだろうか。そもそも、俺的にタマモのような本能と理性が逆転しているような人はちょっと……。

「なんですかその言いよう！失礼にも程があります！…………と言いつつ否定できない自分がいますね」

「否定できないんかい」

もうなんなのこの狐？ジャッカル？話しててすごい疲れる。

タマモの態度と言葉に思わずため息をついていると、タマモの背後からタマモとは違うしつかりとした和服を身にまとったショートヘアの女性が歩いてきた。

彼女の名前は両儀式。俺とは何かと氣があう女性である。ちょっとジユリウス^{闘狂}成分の氣があるけど。

「げえっ！式さん！」

「随分な挨拶だな狐。その尻尾諸共殺してやつてもいいんだぜ？」

「貴方が言うとシャレになりません！」

ジャンケンゲーなのに1つ1つ手を潰していくとかどんな無理ゲーですか……などと意味不明な供述をする。また月に意識が飛んでいるのではなかろうか？

そんな彼女を他所に式は俺の眼の前まで来ると、着物の上になぜか羽織っているジャケットからナイフを取り出して構えた。

「構えろ仁慈。今度こそお前を殺してやる」

「やめて（切実）」

割と本気でやめてほしい。

こいつの攻撃は当たればそれで終わりなのだから、スリルが半端じゃない。

「仁慈が闘うとな。どれ、私もませよ。お前たちの勇気を私に示してくれ」

「また厄介なのが湧いてきやがった……っ！」

いつの間にやら槍を構えている全身タイツ女ことスカサハがいき

なりそのようなことを曰う。

式はその瞳を青色に輝かせ、ヤル気満々の状態となつていた。
もはや逃げることな永遠不可能。

俺も神機を出現させて、いつでもことが起こせるように構える。
――――今ここに、大惨事神殺し大戦が勃発した……！

ちなみに余談だが、その戦いに巻き込まれたランサー（兄貴）はお
亡くなりになられた。

ランサーが死んだ！
この人でなし！

つまりアラガミつてことだな！

I S……正式名称インフィニット・ストラトス。当時女子高生だった日本人の少女、篠ノ之束が作り出したと言われているパワードスース。絶対防御という機能を始めとしたとんでもスペックを誇るそれは既存の兵器を軽く凌駕していたらしい。その結果、この世界をひっくり返すという言葉がこれ以上になく合うくらいにはこの世界の情勢を変化させたようだ。

なんでもこのI Sという兵器、女性にしか扱うことができないらしい。で、何が起こったのかと言えば既存の兵器を使いこなす（可能性がある）女性＝強い、偉い（小並感）ということになってしまったのだという。特にI S開発（正確には兵器や機体の類）が盛んな国ではそれに比例して女尊男卑が広まつていったのだという。まあ、この手の輩は何処の時代にでも出てくるし別にいいんじゃないだろうか。むしろ俺がこの話を聞いて一番気になつたのはこの兵器I Sを作り出した人についてである。

当時女子高生だったその子は一体何を思つてこのような兵器を作り出したのだろうか。いや、そもそも本当に兵器を作り出そうとしていたのだろうか？ダイナマイトみたいな例だとするとそれはそれで中々悲惨なことだと思うんだけども。……その辺は部外者である俺が何を思つたところでどうしようもないか。本人に直接きいたわけではないし、なんだつたら俺はつい数分前までこの世界の人間ですらなかつたんだから。

今までの思考をカットし、頭を切り替える。そしてそれと同時に今俺の目の前でただのガラクタと化した件の兵器——I Sとその操縦士に視線を向けた。I Sということで操縦士は当然女性なわけだが、彼女は身体を思いつきり震わせ、こちらをしきりに見上げていた。

「お、お願ひ……殺さないで……」

傍から見たら俺の方が悪役に思えるかも知れないが、ところが残念。こちとら完全に被害者である。いきなり機械を纏つた人間に襲われた俺が完全な被害者、そしてここで泣きついているのは哀れにも返り討ちを喰らった加害者に過ぎないのだ。攻撃してきたのが俺でよかつたな。別人なら今頃殺人犯にされているところだ。

はあ、と溜息を一つ吐き、目の前で転がっているISを踏みつぶして空を飛ぶ部分であろう場所を完全に破壊した。流石に空を飛ばれると俺としては困る。オラクルだつて無限に湧いてくるわけではないのだ。半分アラガミだから半自動で生成することはある程度可能だけれどもそれも完全というわけじゃないし。

スラスターを破壊した俺にさらにおびえる女性ではあるが、残念ながら慈悲はない。他人を殺すのであれば殺される覚悟を持つべきである。

「この役立たず！なにやつてん……!?」

次は何を聽こうか、それを考へているとどうやら女性の仲間と思わしき人物が現れた。ボディ以外は装甲に覆われており、蜘蛛のような形をしているISを使つている人物だ。彼女は壊されたISとその前に立つ俺を見て一瞬だけ動搖したような動きを見せた。けれどもそれも一瞬ISがないと分かつた瞬間、こちらに對して殺意を向けてくる。

「ちつ、こんなやつの尻ぬぐいなんて面倒くせえが、仕方ねえ。ここで死ね」

こここの世界は喧嘩ばやつ過ぎると思う。

蜘蛛を思わせる——というかまんま蜘蛛の足に見える部分を使つて俺の身体を貫こうと操作する。どうでもいいけれど、ISの操作は思考で行つているのだろうか。もしそうであるならば人間には本来ない部分である足を動かす感覚とかどうなつてんだろう。

機械に対する考察を交えつつ、襲い来る足を回避する。ここいらで速度と反応の鋭さ、ついでに質量等を見ておこうという算段である。「はあ!？」

どうやら生身で攻撃を避け続ける俺に驚いたのか蜘蛛女は甲高い声を上げた。その声を無視し、ひとまず向かってくる足の一つを蹴り上げてみる。すると、固い装甲の感触とどしどく重さを感じ取った。やはり相応の質量はあるようだ。……しかし、完全に防げないほどではない。まあ、大体アラガミと一緒にいる。そこまで問題ではないだろう。一応殺してはいけないと神機は使わないよう意識しながら八本の足を潜り抜けた。途中足が伸びた気がしたがきつと気のせいだろう。

八本の足を操っている当たり、かなりの集中力を使っているのではないかと俺は睨んでいる。その予想に従い八本の足を潜り抜けたのちに俺は全力全壊の蹴りを放つた。すると、バチリツとシールドのようなものが発動し、操縦者にはダメージが行くことはなかつた。一応衝撃だけは伝わっているらしく、僅かに後退していくがまだまだ戦えそうだ。

「成程、あの程度じゃあだめなのか……」

「こ、このクソ野郎！」

蹴り上げた方の足首をぐりぐりしつつ、再び蜘蛛女に視線を合わせてみればどうやら向こうはブチ切れたらしく、足と同時に銃火器も使用してきた。成程、触手で逃げ場を塞ぎつつ銃弾でとどめを刺すと、そういうことなのだろう。実に有効な手段である。

が、残念なことに――

「化け物かよ！」

体の半分がアラガミ細胞で形成されている俺に、銃弾の類は効果がない。四方八方から襲い来る足を回避しつつ作り出した手刀で銃弾をはじき返していく。機械に搭載されているだけあって経口がは大きいが問題は特になかつた。

「隙あり」

動搖による動きの揺らぎ。そこについて、制御の甘くなつた足を二、三本ほど押借し、遠心力の力を借りて蜘蛛女を振り回す。最後の仕上げとしてそのまま地面に叩きつけた。すると再びバチリツという音が鳴る。もしかしてこれが絶対防御というものなのだろうか。

とりあえず、これ以上襲われても面倒なので、地面に叩きつけた拍子に持っていた三本の足を引きちぎって壊すと同時にそのまま移動。残りの足も本来ついているであろう部分以外は全て引き千切る。千切った部品に関しては神機で処理しているために環境にも優しいのだ。

「さてつと……」

なんだかんだで二人とも無力化したわけだけれども、ここから先どうしようか。この世界がどんなところなのか——は大体わかつたが、ここがどこなのかはわかつていらない。そもそもこんなにあつさりと人を殺そうと思えるくらい命が軽い世界の可能性も無きにしも非ず。科学技術はだいぶ進歩してそうだけど情勢自体は中世とかその辺レベルなのだろうか。

必死に頭を回していると、唐突に閃光が目の前を覆った。どうやら先ほどのどちらかが俺から逃げるために閃光玉を投げて逃走を図ろうとしているようだつた。

「おーっと逃がさないぞ」

ここで彼女たちを逃がしてしまつたら俺の存在が公表される可能性がある。あの機械はこの世界に置いて最強に近い位置に居るらしいし、それを生身で倒すことができるとなれば研究対象にされるくらいの可能性は十分にあるだろう。それに、逃がせば確実に愉快な仲間たちを引き連れてお礼参りに來ることも考えられるしな。

地面を蹴りつけ、一步目で全速まで持っていく。そして、そのまま飛んで逃げようとする蜘蛛女の機械をぶち壊そうと思つたその時——唐突に横やりが入つた。俺の攻撃を受け止めるることはせずに横から力を加えることにより進路を変更させたのだ。急に横からの力を受けた俺は当然体のバランスを崩すが、そこは神機使いの意地として耐えた。が、俺を襲撃してきた人間は一撃では足りなかつたようで間髪入れることなく一撃目を叩き込んでくる。

音だけでわかるのは直撃すれば命の危険が訪れるレベルの攻撃である事、尚且つこれが生身の人間が出しているということだけであつた。なんということでしよう。先程の兵器二連ちゃんよりも確実に

この拳の主の方が強敵というありさま。世界最強の兵器が木陰で泣いている気さえする。

二撃目の拳を掴み、そこから腕をこちらに引き込む。そして、勢いよく身体がこちらに向いてきていることを読んで蹴りを放つ。この場合は足を置いておくという表現でも間違ってはないだろう。

だが、向こうはこちらの引っ張る力に抗うことはない。むしろその逆で自分でも俺の方に向ってくる。そして俺の足に接触する瞬間地面を蹴つて飛び上がりそのまま頭上を通り過ぎ、逆にその時に発生する勢いを利用して投げ返して来た。

後方に跳んでいく俺ではあるが、すぐに宙返りからの着地を果たし不意打ちかまして来た人物の外見を把握する。

どうやら俺を襲つてきたのは女性のようで、腰にまで届く若干紫がかつた髪が艶めかしい。実に大人の女性という感じであった。しかし、その恰好はしわだらけのエプロンドレスに機械のうさ耳を装着しているという奇怪な恰好である。そして何よりも雰囲気というか生き物としての在り方がラケル博士に似ている気がする。この段階で俺の警戒心はMaxを通り越してもはや迎撃態勢を整えるレベルである。

「……」

正面切つて対峙するものの、痛い恰好のラケル博士（失礼）は特にアクションを起こすことなく棒立ちをしていた。いや違うな思いつきり俺のことを踏みみ寄っている。頭のてっぺんからつま先までくまなく見られているようだ。

唐突であるが、俺の勘は鋭い方である。元々半分アラガミで他の人よりも五感が鋭いということも関係しているかもしれないが、それ以外にも結構早い段階から鬼畜ゲーよろしくの環境に叩き込まれたからではないかと考えている。何はともあれ、俺の勘は十中八九当たるのだが、その勘が現在俺に警告を鳴らしていた。対象は当然目の前の女性。そして警報の種別は——ラケル博士に呼び出された時のモノである。

「——脱兎！」

こういう時には逃げるに限る。

本能のままに、考えるよりも早くその場から脱出を図る俺であつたがもう既に遅かつたらしい。目の前の女性は今までの無表情が嘘と思える位の笑みを浮かべた。あの顔はどう考へても素敵な実験素体を目の前にしたラケル博士の顔である。もはやいい予感なんてしない。このままダッシュで逃げる。

声をかけられようとも、後ろの方で爆音が響こうとも俺は振り返ることはなかつた。只ひたすらラケル博士の幻影を醸し出すあの女性から逃げるために必死に身体を動かした。

——まあ、この数時間後には見事に拉致られたんですけどね。後で理由を聞いてみると世界中の監視カメラの映像と自分で作り出した機械たちによる人海戦術で見つけたのだと言つていた。これは酷い。

異端児と異常児と

「やあやあやあ！まさかちーちゃん以外でISを倒すような存在が現れるとは思つても居なかつたな！」というわけでその身体解剖してもいい？大丈夫！これでも束さんは天使と言わわれているくらいには優しいからしつかりと麻酔もつけてあげるよ？」

「はやいはやいはやい、そして何より俺のことを何も考えられてない」

現在進行形で俺の身体をバラバラにしようとしてくる女性——篠ノ之東を躊しながらなんとか言葉を紡ぐ。ISという未知の機械たちに遭遇し、返り討ちにした後この女性とい逃走したのだが……そのISというものが大量にやつて来た結果、篠ノ之東が使っている移動用のポッド（的な何か）に連れてこられていた。

ぶつちやけ、倒すだけならどうとでもなつた。元居た世界で神機兵MK2……ドヒヤーと動く変態機械を相手にしてきた経験があるために、どうにかすることはできただけどそれには神機を使わなくてはならない。火力が足りないので。一体、二体なら何とかなるけど、それ以上となると中々に辛いものがある。

話を聞く限りこのISという機械があること以外は普通の世界と言つていいだろう。想像以上の化け物が出現したりはしないし、眞の人外も居ないし、超能力も使わない。そういつたところで偏食因子を活発させるなんてろくなことにならないだろうし。俺は自重を覚えたのである。

「え？ 麻酔するんだし十分でしょ？」

「え？ それで十分だと思つてるの？」

やだこの人。取り繕うことしない当たりラケル博士よりも酷いかもしれない。の人内心はともかく外面だけは完璧だつた。が、この人はまるで取り繕わない自分の欠落を堂々と見せることができるので精神力には尊敬の念を抱くね。憧れはしないけど。

しかし関心ばかりしていられない。このままでは本当に解剖しかねないので、現在俺のことを拘束している機械類を壊して肢体の自由を取り戻した。拘束されていたために少しだけ凝り固まっていた肢体をほぐす。……行動に支障はないようである。

「……おつかしいなー。ゴーレム君達と追いかけっこしてた時のデータをもとに作つたはず。理論的には誰にも壊すことはできないはずなんだけどなあ」

人間外の理論を適応しないとだめみたいですね（確信）少なくとも神機使いを他の人と同列に考えてはいけない。俺達は遠足感覚で自分の数倍でかい化け物を狩りに行くんだしね。体の扱い方なんかも割とわかっているんだぜ。対人は若干苦手だけど。

「とりあえず解剖されるのは嫌なので帰りますね。さようなら」

世間体を気にしないラケル博士とか最悪以外のなにものでもない。どうせこの人もその内ラスボスと化すんでしょ。ラスボスにならないとしてもこの人が俺に厄介事を運んでくることは明白。この世界に来た原因なんかはよく分からなければ。その点に関しては別に深く考えていない。過去に行つても戻つてこれたし、大丈夫だろ。

返答を待つことなくその場から脱出。そこまで広くはない篠ノ之東の移動用基地の中を駆け回る。そして扉を見つけ、ひよいとそこを開けるとそのまま飛び降りた。どうやら海上の遙か上を跳んでいたらしく下には広大な海が広がっていた。常人なら確實にお亡くなりになるだろうが、まあ、俺は何とかなるだろう。

肢体の偏食因子を活発化させ体外に出す、尚且つ強度だけを高められるような調整を行つ海面と接触する瞬間を待つ。だが、その時はいつもになつても訪れるることはなかつた。何故ならば、俺の背中にはつい数時間前俺のことを散々追い掛け回してくれたゴーレム君とやらが居るからである。

そのゴーレム君——いわゆる無人機と言われるものに捕まれ、抵抗らしい抵抗もできずに俺は再び移動基地に引き返すこととなつた。……もしかして本格的に俺は科学者もしくは研究者に弱いのかもしれない。

「勝手に逃げないでくれるかな? こうしている間にも東さんの貴重な時間が無駄に浪費されているんだけど」

「俺の事ほつとけばいいんじゃないんですかね……」

「だーかーらー、そういうわけにはいかないんだよねえ。だつてさ

……君、この世界のどこにも存在した記録がないんだもの」

篠ノ之束の表情が途端に鋭く変化し、尚且つ言葉にも一層の冷たさが混ざる。どうやら彼女が俺のことを捕獲しようとしていたのは強さ以外にもあつたらしい。

「最悪、身体能力の方はどうでもいいんだよ。ちーちゃんに東さんという前例が少なからず存在しているんだから在り得ない話じゃない。……けど、記録の方はそもそもいかない。こつちは戸籍に乗つていないうことも加味して非合法の実験場の監視記録までのぞき見したつていうのに君らしい人物も、同じようなスペックを誇る人間も存在しない……ねえ、これつてまるで急に何処からか湧いて出て来たみたいだと思わない?」

「……人をその辺の雑魚モブみたいに言いますね……」

俺がこの世界に来てから一日も経過していない。そんな短期間で地球上の情報を全てのぞき見したのか篠ノ之束という人物は……ツ!これをアラガミの影響なんてなく、自然に身に着けているということに戦慄を隠せない。もしかしたらラケル博士を越える邪悪にもり得るのではなかろうか。

「モブとは失礼だね。私だって君のことは認めてるよ。実験用のラットとして、だけど

「それは認めてるつて言わないんですけどそれは」

「あーもー、面倒くさいになあ。なら、今回は特別に……と・く・べ・つ・に! この東さんが譲歩してあげよう。君のことを調べさせてくれたら——君が元々いた世界に帰れるように最大限尽力しようじゃないか」

……成程、彼女はそう結論付けたのか。

この世界で生まれて来た記録がない。すなわち別の所から来た。それを彼女は異世界から来たと仮定しているようだ。常人であるな

ら考えはすれ確信に至らない発想……むしろ妄想話として片付けられそうですらあるのに。

その結論がドンピシャというのがさらに質が悪い。これだから天才っていうのは面倒臭い上に厄介なんだ。何をどう頑張つても手のひらで転がされている気しかしない。

「……」

「君にとつても悪い話じゃないとと思うけど？」

確かに悪い話ではない。最悪、篠ノ之東が俺の中にいる偏食因子の扱いを間違えても元々この世界の住人ではない俺には何の影響も与えないわけだし。ただ……荒廃した世界を知っているからこそ同じようなことは起こさせたくないという想いもある。キチガイだんだ言われているけど人間として破綻しているわけじゃない、当然ことだ。

うんうんと頭を悩ませること十分間。そろそろ向こうの我慢が限界なのか浮かべている笑顔が引きつり始めたころ、ようやく結論を下す。

元の世界に帰ることが一番の急務ではある。だからこそ俺は覚悟を決めよう。それを第一に考え、状況によつてはそれ以外を捨てる覚悟を。

「……わかりました。その条件を飲みましょう」

「決りだね」

手間を取らせやがって、という顔をしている篠ノ之東のことを一瞥してから再び自分のことを拘束していた機械を無理矢理に外す。協力はするけれど、その前にいうべきことがあるからだ。

俺はこの世界に来てから一度も話すことなく、また触らせることもなかつた神機を篠ノ之東の方に向けてから口を開く。

「ただし―――これの取り扱いには十分に気を付けること。……貴女が手を出そうとしているのは文字通り世界を喰らう世界にとつての癌細胞。扱いは俺の前でのみ行い、そしてむやみやたらに実験しないこと。それが条件です」

「かたつ苦しいなあ……そんなこと君に心配されるまでもない。なん

たって私は――

「――お前が誰かなんて関係ない。それほど危険なものだ、このくらいの心意気で取り扱え。もし約束を違えるようなら」

「――お前を殺す」

再三繰り返すようだが、別にこの世界がどうなろうと俺には関係ないし、この世界が俺達の世界と同じようになつたとしてももしかしたら極東人のようなキチガイたちが生まれ案外どうにかなるのかかもしれない。

が、その結果を得るためにあらゆる犠牲が発生する。それは、シエルのような人間を作ることであり、ナナ・ロミオ先輩・リヴィ・ジュリウスのような子どもを作り出す行為であり、ギルさんのような悲しみを背負う人間を生み出すということである。ISなんて兵器が存在しているが、それでも世紀末なあの世界に比べればいくらかましだろう。そんな世界を懲々世紀末に変えるなんて質の悪いことになるのは気分が悪すぎる。

「……分かつたよ」

……まあ、とりあえず許可が下りたようで何よりである。

こうして異世界のラケル博士と呼んでもいいような天才、篠ノ之束との生活が始まつたのであつた。

何なのだろうか。アイツは。

私は目の前で見たことがない武器を向ける人物に対して初めて『恐怖』という感情を抱いている。

外見年齢は大体20に届くか届かないかという程度。特に肉体が発達しているわけでもない。強いて言えば白髪に赤目という人間的

には珍しいカラーリングをしているだけで、それ以外は特になんとも変わったところのない人間である。

そんな人間に私はちーちゃんにすら感じたことのない恐怖を抱いている。これでも東さんは世界各国から求められるほど人気者なのだ。凡人共の相手なんて吐き気がするけど。ともかく、そいつらは国の利益ひいては自分の利益のために私のことを捕まえようと様々な人材を送つてく來た。そのかなには殺氣を放つてくる連中だつているし、なんならちーちゃんが時々飛ばしてくる。

でも……こいつの殺氣はそういうものではなかつた。ちーちゃんの殺氣は鋭いけど、けど中身がどこか空っぽだ。それは当然で、ちーちゃんは人を実際に殺したことなんてないんだから。各国から送られてくる連中だつて、私のことを殺すわけにはいかないから脅しにも重みはない（実際に殺り合つて殺されるなんてありえないけど）

別世界というだけあつてかなり殺伐とした世界に生きているのかもしれない。もしかしたらこいつに力を与えているのはそういうた代物なのかもしれない。

いいでしよう。

お前がそう来るというのであれば私だつてそれ相応の態度を取つてやる。この、世界一の天才である篠ノ之東が、全力でお前の言葉を否定してやる。万に一つも私には存在しないことを目の前で証明してやる。今に見て居る。

新しい実験体兼おもちゃである樺原仁慈という異世界人（断定）を発見してから一週間が経過した。樺原仁慈の話と肉体から採取した細胞を見た結果を合わせると確かにコイツが言つたことに矛盾は存在していなかつた。この細胞は世界を根底から喰らいつくすこと

のできるほど強力なものだ。対抗手段が自分たちと同じものしかないというところは私が作り出したISに似ているかもしない……。本当はあんな使い方じゃないのに……。

——いや、そのことはいい。今はこの細胞のことだ。オラクル細胞、あいつのいた世界ではそのような名称で呼ばれていたらしいこの細胞は活発化するとその細胞ごとに好んだものを捕食して行くようだ。また、侵食力と繁殖力も強大で増えるのは一瞬であるらしい。コイツが最大限に警戒し、実験が終わつた後必ず自分で処理するのは増殖を抑えるためだと言つていた。

そしてこいつが持つていてる武器——神機もこのオラクル細胞を使つて作られた武器だという。まあ、同じ細胞でしか傷がつかないのであればそうするしかないのだろう。毒を以て毒を制する。よくある話だ。

「つまり君たち神機使いは人類を守るための道具だつたわけだ」「言い方悪つ！……まあ、事実だけど。守つている人から嫌われるのとかざらにあるし」

それはそうだろう。人間は自分達と違うもの……未知の存在を忌み嫌い排除する性質を持つていて。自分たちを追い詰めた化け物と同じ細胞を持ち、それを振るう神機使いを凡人たちが恐れないわけがない。

「とんだお笑い草だね。背後から石を投げつけられてるなんて」

「ぐうの音もでない……」

「でもまあ、私も似たようなものだけどね」

「ふーん」

一週間たつて分かつた事は、この細胞のこと。知れば知るほど使い道がないのだ。こいつのようにオラクル細胞を完全に制御することができれば全てを捕食するという性質でかなりの応用が効きそだが、ほとんどの人間がそれをできない上に失敗すればこいつのいた世界を荒廃させた化け物に早変わりするという。

リスクとリターンが恐ろしいほどに釣り合つていない。性質 자체は面白いから研究はするけどね。

そしてもう一つ分かつたこと。こいつあからさまに私——いや、この世界に興味がないようだ。ここに来てから私の実験に付き合うこと以外に何かしているところを見たことがない。一度特別に私が作ったISを見せたときも対した反応を見せるることはなかつた。

——こういうのは見たことがあるから（多分もつと高性能で厄介な奴）

こいつの世界、荒廃しているはずなのにISみたいな機体が生まれるなんて本当にどうなつてているのだろう。

それは置いておくとしてこれは屈辱だ。まさか、東さんの自信作が興味すら引けないなんて私のプライドが許さない。

「これぞ、私が開発した家事万能ロボット。その名も、カジえもん！」
「おいやめろばか」

私の作り出したロボットにツッコミを入れる樺原。一体に何が不満なんだよ。これは私たちにない家事能力を全て補つてくれる万能ロボットだというのに。秘密道具は出さないし、未来からも来ていけど。

「その点は別にいい。篠ノ之博士が既に○ラえもんみたいなものだということは分かつてる。名前がマズイって言つてるの。というか、料理はできないのに料理を作ることができる機械は作れるとか、アンタの頭んなかどうなつてんだ」

「天才だからね！」

「説明になつてない」

呆れるように溜息を吐く樺原。そのしぐさがちーちゃんに似いてむかついたのでとりあえず脇腹にコークスクリューを放つておく。

「甘い」

「うごこつ!？」

逆に返された。

細胞までハイスペックな東さんの不意打ちを完全に防いだ上に華

麗なカウンターを決めてくるなんて……。完全に人間外の細胞を取り込んでいるだけはある。

「いつつ……って、私でも結構痛いと思える力加減つてことは……」

「それなりに力入れた。多分普通の人なら三メートルは飛ぶ」

殺す気だ……！容赦のなさもち一ちゃんと同じ感じになつて来た。もしかして、こいつとちーちゃんを会わせた時が私の最期になるかも。

「未来から来た家事型ロボットの件はもうどうでもいいけど。やるべきことはやつてんの？篠ノ之博士」

「この私に隙はないんだよ！凡人の癖に心配とか身の程知らずだね！」

「はいはい凡人凡人」

適当にあしらわれ、その対応に腹が立つ。……そして連鎖的にこんなやつに諭されたことにも腹が立つた。

——こいつと知り合つて一か月経つたある日。何とかISの魅力を伝え興味を持たせた（ドヤア！）私は樺原から一つ質問を受けた。曰くこの世界に来てISのことを知つてから気になつていたことらしい。

それは、どうしてISという兵器を開発したのかということだった。その言葉を聞いた時自分でもどうかと思うくらいに感情が死んだ。あんなのはISを否定されたとき以来だ。結局異世界人だとしどもその辺の凡人と同レベルだったかと落胆した私だつたけど、樺原はその後続けたのだ。

——本当は何を作りたかったのか、と。

樺原は、自分を襲つてきたあの女からこの世界のことを聞いており、開発者である私のことと何よりその時の年齢を聴いて疑問に思つたらしい。普通に考えて女子高生がこんな兵器を売り込むのはおかしくないかと。余りに普通の着目点だつたけど、この世界で私のことを普通だなんて思つている人間は恐らく誰一人としていない。無論ちーちゃんがつてそうだろう。こんな切り口で質問してくる人間は

初めてだつた。だから、私はちーちゃん以外知らない I.S の誕生秘話
を何の気まぐれか話したのだ。すると帰つて来た言葉は――

――プレゼンの仕方間違えてね？ そりやそうなると思う。

私のパフォーマンスはどう考へても I.S の兵器としての有用性を
示すだけのパフォーマンスであり、宇宙開発を視野に入れるのであれば
武装を取り除いて月にでも行けばよかつたんじやないかと言わ
た。

……しかし、私は樺原の言葉を否定した。私はあのバカ共に見せ
つけてやりたかったのだ。私が作り出した I.S は理論上の空論じや
ないってことを。

――まあ、当時女子高生だつた篠ノ之博士は我慢ができなかつ
たつてことか。

我慢ができなかつた、と樺原は語つた。早急に手をうたず少しずつ
開発を進め、徐々に世間に知らせておけばよかつたのだと。何を言う
のだろう。そんな非効率的なことをして何の意味があるのだ。既に
完成していたものを小出しして、何の意味があるのだろうか。

――他の宇宙関係のこととで実績とか作つておけばよかつた
んじやないかな。そういう連中は肩書だけしつかりしていれば割
といふことは聞くものだぞ。其れか火星あたりにでも行つてみれば
よかつたんじやないかな。ま、止めてくれる人間がいなかつたつてこ
とは不幸かもしれないけど。

わからない。私は生まれたときから天才だつた。天才だつたが故
に私に並び立てるのは別のベクトルでの天才であるちーちゃんだけ。
両親だつてある意味で篠ちやんだつて同列じやない。

全員は私のことを奇妙なものを観る眼を向ける。何も言うことは
ない。私はそういう人だからで片付ける。それが普通で当たり前
だつたのに……。

「……」

「篠ノ之博士？」

「……オラクル細胞を使って何かしようかなー」

「やつたら殺すよ?」

「ぬお!? ガチ殺氣!?!」

「前もって言つたじゃないか。そういうことをすれば殺すつて」「口に出しただけでもアウトなんだ!?」

こいつはそんなこと関係なしに止めてくれるようだ。まあ、私と同じステージに立てるっていうのもあると思うけどね。

「クーちゃん! 挨拶!」

「はい、束様。クロエ・クロニクルと申します。よろしくお願ひします。仁慈様」

「何処からパクつて来たんだこの兔……！」

「じーちゃんおこ? おこなの?」

「その呼び方やめて、切実にやめて。まだおじさんですら行き過ぎなのに、おじじにランクアップとか勘弁して」

「じーちゃん様?」

「君も真似するのはやめようね」

はあ、と溜息を吐くじーちゃん。やめないよ! だってじーちゃんのその表情が見たいからね!

というか、兎に関してはじーちゃんに言われたくないな。白い髪に赤い目は完全に兎のカラーリングだと束さんは思うんだよ。中身狼だけどね!

「途中から声に出てるんですけど」

呆れながらも視線で私に訴えかける。流石に人ひとりを攫つてきたことに関しては理由を聞いて来てくれるらしい。ふつふつふ、分かつてるねえ。じーちゃん。伊達にこの一年間一日たりとも離れずともに過ごした仲だね。

クーちゃん。クロエ・クロニクルを連れて來た理由は明白。この子が私の被害者だから。私が間違った方向で世間に浸透させてしまったISの所為で生まれてしまつた被害者だからせめてもの償いの気持ちで連れて來た。……詳しいことは省いているけど、ここだけ言え

ば大体伝わると思う。

「やつぱどこにでもマツドサイエンティストはいるもんなのか……」

「……？どうかなさいましたか？」

「いや、こつちの話。で、束さんや。貴女に子育てはできるんですかねえ？……リンドウさんたちの様子を見る限りかなり大変だぞ。ある程度成熟して、言葉が通じる分まだいいかもしないけど」

「その点において抜かりなし。何故ならこつちには逸般人の癖に常識を兼ね備えたじーちゃんが居るからね！」

「丸投げかよ」

ちゃんと私だつて責任もつてお世話しますとも。けどね、私だけだと色々偏つてしまふかもしれないから……ね？

「自覚している当たり成長はした……のかな……。まあ、とにかく本人の意思を確認してみないことにはどうしようもない。クロエちゃんはそれでいいの？」

「はい。もとよりこの身は廃棄寸前だった不良品です。助けていただいた束さまに全てを委ねます」

「…………了解」

クーちゃんの言葉でさらに頭を抱えるじーちゃん。アツハツハ、これから頑張ろうね！じーちゃん！

「所で束。俺を元の世界に帰すつて約束はどうなつたわけ？」

「な、何のことかなー？」

「おいイイ？」

頑張ろうね、じーちゃん！

ダンジョンに出会いを求めるのは間違っているだろ
うか編

もしも仁慈がだんまちの世界に来たら

数多のモンスターがうごめき、あらゆる冒険者たちが夢を抱いては死んでいく場所……ダンジョン。

今、そのダンジョンの中でも極めて異例な出来事が起きていた。

唐突に現れた、黒く変色したゴライアスは、その階層にいた冒険者たちをすべて結集して相手をした。

しかし、黒いゴライアスの力は想像を絶し、圧倒的な力に加え、驚異的な再生能力も持ち合わせていた。この時誰もが思った。こんな奴に勝てるわけがないと。だが、それでも英雄を目指す少年を筆頭とする一部はくじけなかつた、折れなかつた。例え、己が吹き飛ばされようとも、ボロボロの体に喝を入れ、何度も立ち上がつた。何度も立ち上がり、自身が持てるすべての力を出し切り、己が役目を果した。

そしてついに、その結果が身を結ぶ。

格上殺しの異名を持つ白髪の少年が、全身を白銀色に染め上げて、鐘の音と共に、再生の暇すら与えない絶対の一撃を放ち、黒いゴライアスの上半身を食い破つた。

圧倒的な力をちっぽけな個人の集団である者たちが力を合わせて紡いだ、まさしく英雄たちの一撃。

誰しもが、やつたと思った。

俺たちは勝つたんだと、思つた。そう、神でさえも。

ゴライアスは生きていた。

上半身こそ失つたものの、モンスターの核となる魔石には傷一つ
いていなかつた。

核が無事であれば、黒いゴライアスが持つてゐる再生能力が発動す
る。白髪の少年が放つた一撃で消し飛んだ上半身が物凄い勢いで再
生しようとしていた。

それを許す白髪の少年ではない。彼は自分の腰に備えてあつたナ
イフを引き抜き、再生した上半身で魔石が隠れる前に破壊しようとし
た。

が、遅かつた。

先程の一撃で葬つておくべきだつたのだ。自身の弱点が露見して
いることを悟つた黒いゴライアスは再生と同時に一步後ろへ下がつ
た。それは生物が故の防衛行動。生み出された体に刻み込まれてい
た本能。

黒いゴライアスの下半身は全体の四割と短いが、それでも魔石を碎
こうと宙に身を躍らせた白髪の少年の一撃を回避するには十分な距
離だつた。

目標を失つた白髪の少年は地面で転がり、何とか衝撃を和らげる。
しかし、彼が顔を上げると、眼の前には完全に復活した黒いゴライア
スの姿が。

今度こそ、思つた。

俺たちは終わりだ。遠くから見ても強烈だつた一撃を受けて生き

ている奴をどうやって倒すのだ。

周囲にいた冒険者たちの心は絶望一色に染め上げられる。

誰しもが、白髪の少年の最期を……己の最期を悟った、その時……

「GUOOAAAaaaaaaa!!!!????」

黒いゴライアスの体が大きく傾いた。それと同時にゴライアスの大きな叫び声も上がった。

絶望の中に居た冒険者は皆一斉にゴライアスとその周囲に視線を向ける。するとそこで見たものは――一人の青年だった。

髪の色と目の色は、先程ゴライアスの上半身を吹き飛ばす一撃を放つた少年と同じような白に銀が混ざったような色に血のような赤目。

服装は大勢が正気かと思えるほどの軽装備だつた。プレートを含めた防具の類は一切身に着けず、背中に狼の顔が刺しゅうされたジャケットに動きやすさ重視のズボンだけである。

しかし、彼が持つ武器は異様であつた。

大きさは、武器を持つている青年と同じくらいあるのではないかと思われるくらい巨大なもので、刀身は刀をイメージしているのか片方にしか刃がない。持ち手に近いところには半分に割れた円盤に、この世界では見ることのできない銃口のようなものも取り付けてあつた。

冒険者たちの頭は混乱を極めた。

誰だアイツは。あの装備は正気か。どうやって黒いゴライアスをブツ飛ばしたんだ。

さまざまな疑問が浮かんでは消える。

けれど、結局行きつく先是一人でアレを相手取るのは無理だという考えだった。

彼らは知らない。

この青年が、日夜世界を喰らう化物と対峙していることを。

彼らは知らない。

この青年が、日夜世界を喰らう化物からも化物と思われている、よくわからない存在だと。

彼らは知らない。

この青年が、世界を救つた正真正銘の英雄であることを。

彼らはまだ、知らない。

ラケル博士とサカキ支部長の実験に付き合っていたいつの間にか良くわからないところに飛ばされたでござる。

……いや、あの二人の実験つてところから嫌な予感はしていたわけですよ。だってさ、あの二人が開発したのはワープ装置だぜ？俺で試す前にものでやつてみて成功だつたから今度はヒトで……と言う発想は分かるけどさ。それ、控えめにいって人体実験ですよね？

そんなことを言いつつ抗議してみても、

「大丈夫よ」

「そうだとも。我々を信じなさい」

と言われて押し切られた。

その結果がこれだよ！

なんか宙に放り出されたし、どこか広い洞窟っぽいところに來たし、周囲にはボロボロの雑巾みたいになつた人たちがたくさんいるし、その辺にはクリスタルやら木々やらが生え渡っているし、何より……下半身だけの状態から上半身を再生して元気にしてる黒い巨人みたいなやつが目の前に居た。

もう、あの人たちの言葉は二度と信用しないわ……。

そんなことを考えつつ、俺は目の前にある巨人の顔に八つ当たり気味の蹴りをお見舞いする。すると、意外や意外。巨人は蹴られたところを押さえながら馬鹿でかい声で騒ぎ出した。

そのなりで俺の蹴りが効くとかどんだけひ弱なんだよ……。

トンと地面に着地すると、黒い巨人の方も体勢を立て直したらしく、グルグル唸りながら俺の方をジッと見てきた。

と言ふかホントにでかい。首が疲れる。

神機を二、三回その場で振り回して特に異常がないことを確認する
といつでも戦えるよう重心を低くする。

とりあえず足元に行つてみると、走り出そうとしたその時背後から
声がかけられた。

「ひ、一人で行く気ですかッ!?」

「そうだけど……?」

振り向いてみればそこにいたのは十代半ばかと言うくらいの幼い
顔立ちをした少年だつた。髪の色は白髪で目の色は赤目とか、ちょつ
と親近感湧いちやう。

「そ、それはあまりにも無謀すぎますよ！いくら自分のステータス
に自信があつてもアレは普通の階層主じやないんですよ！」

白髪少年が何やら焦つた風に俺を止める。ステータスとか階層主
とかいろいろ聞き捨てならない言葉が聞こえたような気もするけど
……

「グウウオオオオアアアアアア」

黒い巨人がこつちに向かつて腕を振るつてるのでとりあえず退
避。

着て いる服とか、体のあちこちに傷がある白髪少年を神機を持つて
いない左腕で咄嗟に抱え込み、大きく後ろに下がる。

……とりあえず、この子を安全な場所に置きに行かなくちゃいけないな。

「すみません、突然ですがお名前は？」

「え？ ベル・クラネルって言いますけど……」

「それではクラネルさん。貴方の仲間はどこに居ますか？」

「へ？ えつと……あそこです」

「わかりました。今から貴方を仲間のところまで運びますね」

その前に目くらましだな。

俺はクラネルを抱えつつポーチの中にあるスタングレネードを取り出して、クラネルに忠告する。

「ちよつとばかし耳と目をふさいでくださいね」

「え？ あ？ ちよつ」

「それ！」

逃げている途中に体を反転させると、俺達目掛けて歩いてくる黒い巨人に向かってスタングレネードを投げる。

あの巨体でも、音と光は効果があるようで黒い巨人は両手で目を抑えていた。

「うああああ！ 目がああああ！」

…………こつちも効果があつたらしい。

黒い巨人と同じような反応を示すクラネルを華麗にスルーし、彼が示してくれた仲間のところまで一時撤退する。

そこには奇抜な服を着た黒髪のツインテールや、女版リンクと言えるような服装をした女性。赤髪の男性や青い髪にメガネをかけた女

性などが居た。……カラフルなことだなと思ったのは内緒である。

「クラネルさんの仲間であつてますか？」

「そうだけど……ベル君はどうしたんだい？」

唐突に現れた俺に警戒しつつ、奇抜な衣装の黒髪ツインテールの子が俺の質問に答えた。しつかりしてるね。そこで剣を抜き放つている女版リンクさんにも見習つてほしいぜ。気持ちは分かるけど。

「あー……不幸な事故です。そのうち収まると思うので」

状態異常：ムスカなクラネルを奇抜な衣装の子の横に下ろすと、踵を翻して未だにムスカ状態の黒い巨人に向かっていこうとする。

「ちょ、ちょっと待ちたまえよ！君、もしかしてあれに一人で挑むつもりか!?」

「そうですけどなにか？」

よほどあの巨人は強いらしい。

俺が即答すると、クラネルの仲間らしき人達は皆信じられないようなものを見る目でこちらを見てきた。

「それは無謀つてものだ！アレは君一人でどうにかなる相手じやない！」

「平気ですよ。過去にあのような輩は相手したことあります」

ウロボロスとかアマテラスとか。

あいつら超でかいし、固いしで狩るのが物凄く面倒なんだよね。そ

の分、あの黒い巨人は相手にしやすそうだ。

弱点もさつきのやり取りを見てて大体分かっただし。

「えつ？ 嘘は…………ついてない……君は一体……」

黒髪ツインテがなんか言つてるけど、黒い巨人がこっちに気付いたんでとりあえず無視。

再び重心を低くして、俺は一気に力を解放して地面を蹴り上げ、木々をつたいながら黒い巨人に向けて疾走した。

気分は進撃の巨人である。

冒険者たちは、その場に居合わせた二人の神は、その光景が信じられないなつた。

「グオオオオオオオオ!!」

「耳栓つけといてよかつたぜ」

絶望の中突然現れた青年は、咆哮を放つゴライアスを完全にスルーして、一気に足元へとその姿を寄せた。そして、手に持っている大剣でゴライアスの足を切りつける。

今まで、多くの冒険者がやつてきた行動だつたが、効果は全く違う

ものだつた。まるで紙でも切り裂くかのように黒いゴライアスの足を両断して見せたのである。

足を切られたゴライアスはその巨体を地面に横たえたが、すぐに足を再生させると立ち上がりようと両手で自身の巨体を持ち上げた。

「おつとそれは困る」

しかし、いつの間にか手元まで来ていた青年が今度はその腕に向けて武器を振るい体を支えている腕を切り飛ばす。

支えを失ったために黒いゴライアスはその顔面を地面へとぶつけた。

あまりにも一方的だつた。

その場にいた冒険者が皆そう考えた。俺達でもきれなかつた手足を簡単に切り裂き、あの再生能力を前に余裕すら見せてはいる。

こんなことができるのかなりの高レベルになるのだが、そこまで高いレベルであれば、自分たちが知らないわけがない。高レベルの者は神々が宣伝し、オラリオにおいてかなりの有名人になつてはいるからである。

そんなことを考えているうちに、戦いはもう終わりに近づいていた。

腕を再生しつつ、青年に襲いかかろうと地面をはいながら大きな口を開けて突っ込む黒いゴライアス。

それに対しても青年は真っ直ぐゴライアスの口に向けて走り出し、中へと入つてき、飲み込まれる。

その光景に冒険者たちは唖然とするも、すぐに青年の狙いが分かつた。

青年を食べて満足そうに立ち上がったゴライアスが突然絶叫し始めたのだ。そしてしきりに自身の腹を叩いている。まるで中に入つて暴れているものが出そうかというような動きだつた。

だが、その行動も虚しく、黒いゴライアスはしばらくしてから灰になつてその場から消え失せた。

残つたのは巨大な武器を肩に担いだ、銀髪赤目の青年だけ……。

こうして、ダンジョンのイレギュラーは同じくこの世界のイレギュラーによつて特に見どころもなく淡々と倒された。

「ちょっと待ちたまえ」

黒いゴライアスを倒したその後、青年の元にベル・クラネルを筆頭としたパーティーメンバーと神へスティア、かつて疾風の名で恐れられていたリュー・リオン、そしてヘルメスファミリアのアスフィ・アル・アンドロメダが件の青年に話しかけていた。

「？」

神へスティアに呼び止められた青年は首を傾げながら彼女たちに振り返る。その様は自分がいつたいどのようなことをしたのかまるで理解していないようなさまであつた。

色々と聞きたいことがあり、逆に何て話したらいいのかわからぬヘスティアよりも早く、ベルが一步前に出て青年にお礼を言つた。

「あ、あの。助けてくれてありだどうございました！」

「ん？ああ……別に大したことじゃありませんよ」

何の澁みもなく言い切つて見せる青年にヘスティアがようやく何を聞くのか決めたようで口を開いた。

「なあ、君は言つたい何者なんだい？あのゴライアスを単独で倒すくらいだし、かなりの高レベルなんだろ？」

「レベル……というのは分かりませんが、そういうえば自己紹介してませんでしたね」

ここで一回言葉を区切ると、

「どうも、櫻原仁慈と言います。何者かと聞かれれば……ゴッドイーター神喰らい

をやっています」

と、この世界の神々が絶叫するようなことを平気な顔して口にした。

（）から仁慈の冒険者生活が始まる！

もしも仁慈がだんまちの世界に行つたら そこに！

「まずは、今回急に集まつてもらつたことを詫びるわ」

そんな出だしで、ロキ・ファミリアの主神であるロキは口を開いた。普段であれば彼女がそのようなことを言うと囁し立てる周りの神々も皆一様に緊張した表情を浮かべており、格ファミリアの団員が見たら別人なんじやないかと疑つてしまふレベルである。

神会デナトウス

何時もは雑談や情報交換、まったく真面目につけないランクアップした冒険者への命名等を行つてゐるこの集会だが、今回はまったく毛色が違つた。

本来は三ヶ月に一回と定期的に行われるこの神会であるが、今回のものは予定にはないわば緊急の集会だつた。

「(ノ)に居る奴は今から言うことをよう聞いとき。聞き逃したら、割と命に直結する用件やで」

そういつてロキはその場を下がる。

てつきりロキからの案件かと思つていた神々は多かれ少なかれ誰もが驚愕の表情を浮かべるが、次に前に出てきた人物にさらに驚いた。

「ヤア、今回の案件は珍しいことに俺なんだあ……驚いたかい？」

「ヘルメス……今はそんな事言つている場合じゃないよ……」

出てきたのは何かと口キと喧嘩するロリ神様ことヘスティアと飄々とした態度で何時もファミリアの団員に迷惑と苦労を掛け捲っている自由人ヘルメスであつた。

「そうだつたそだつた。いやいや、ここに立つ機会はなかなかいからね。緊急時であれば尚のこと……」

「緊急時だからこそ、急いで話すんだよ。ヘルメス。君が言わないなら僕から言つてしまふよ」

「おつと、それはおもし——ゲフングフン。…………では、話をしよう。アレは今から36万——」

「実は、数日前。異世界から来たという人間が現れたんだ」

ああ、言われてしまつた……と残念そうにするヘルメスをガン無視して結局ヘスティアは話し始めた。神々は思ったヘルメス何のために出てきたんだと。

それと同時に思つた。異世界から來た人間なんて恰好の暇つぶし道具ではないかと。この発想にたどり着いた神々は総じて目を光らせた。しかし、前もつてある程度の話を聞いていたロキやヘスティアの友人であるヘファイストスはヘスティア本人のこわばつている表情を見てそつは考えられなかつた。

「問題はその人間のことだ。彼は自らの職業を神喰らいと言つたんだ」

浮ついた空気が一気に凍つた。

今、あの口り神はなんといった？職業が神喰らいだと？もし本当なら俺達大ピンチじゃねーの？

と、そこに居る神々の殆どがそう思つた。

「でも、それが本当だかわからないだろう？」

ヘスティアとも親睦の深いタケミカヅチがそう言葉を発する。彼の質問には今の今までガン無視されてきたヘルメスが答えた。いつの間にか無視された悲しみから復帰したようである。

「確かにそうだけど、直接会つて見れば分かると思うぜ。アレがどれだけ俺達の存在に仇なしているかどうか、ね」

普段は飄々としたヘルメスが珍しく（これ重要）真顔で宣言する。ギヤップもあつて他の神々は口を閉ざした。

「しかも、俺の神の恩恵^{フアルナ}も受け付けなかつた」

さらりと付け加えられた一言で、三度目の驚愕が神々を襲つた。異世界からの住民という超絶面白そうな存在を普通に自分のファミリアに入れようとしたことも驚くべきというか文句をつけるべき案件だが、神の恩恵を受けないと云うことも十分に驚くに値する内容である。

「アレには流石に驚いた。この世界をしょっちゅう旅しているけど、あんな存在は初めてだよ」

くつくつくと愉快そうに笑う。

コイツは恐れるのか面白がるのかどっちなんだと誰もが思つた。彼が話していると埒が明かないと思つたのはヘスティアが結論を述べる。

「要するに、その異世界人にはうかつに手を出すなということさ。彼に神の力は効かないし、ついでに言うと彼は神の恩恵がないのにその戦闘力は少なくともレベル5の冒険者と同等だ」

『―――っ!?

今日一日で俺達は一体どれだけ驚けばいいんですかねえ……。神々の心境はこれに尽きた。

神の恩恵なくしては、ダンジョンのモンスターはおろか地上に出るゴブリンやコボルトすら命がけで戦い勝てるか勝てないかといったレベルなのに、ダンジョンの下層でも実力が通じる一級冒険者と同じ戦闘能力とかふざけてんのか。

「いいかい? 元の世界で神喰らいという職業であれば、神という存在をよく思っていないことは確かだ。その異世界人に余計なちょつかいを出したらどうなるか……わかるだろう?」

「…………とりあえず、その異世界人の特徴を教えてくれないか?」

神の一人が言う。

注意するといつても、その人物の特徴を知つていないとどうしようもないだろうし、その問ひは当然の問ひだつた。ただし、それが本当にその異世界人に近付かないようにするために聞いたのかは分からぬ。

新しいものが大好きで、退屈を紛らわすために割と何でもやらかす神々のことだから特徴を聞いてあえてちよつかい出しに行くのかもしない。

そうなつたらそくなつたで自己責任だと思いつつ、ヘスティアはその異世界人の特徴と名前を口にした。

「異世界人の名前は樫原仁慈。特徴は白に近い銀色の髪に、血のように赤い瞳。自分の背丈と代わらない巨大な大鎌を持っているからすぐに分かると思うよ」

彼女の一言を最後に神会は終了。

神々は解散ということで、各々が各々の考えを持つて自分のファミリアに帰還した。

「おい、ドちび。その件の異世界人は今何処に居るんや？」

「それは……」

「今はうちのファミリアの団長を監視につけてる。心配は要らないよ」

どこか胡散臭い笑みを浮かべるヘルメスを一目見たロキはそうか、とだけ返事をして踵を翻す。

そして、そのままこちらを向かずに言った。

「あんたらが言つた情報が確かなら、注意しどき。あの話し方じやあいくらかの神には逆効果やで」

それだけ言い残すとロキは今度こそその場を離れていった。

「うー……なんか唐突に不安になつてきたよ……」

「まあ、さつきも言つたようにアスファイを付けてるし彼自身も理性的な人だつたし、滅多なことでは力を振るわないだろう。心配なら、これから見に行つてみるかい？」

「遠慮しとくよ。彼自身の性格は嫌いじゃないけど、雰囲気が

ちよつとキツイ」

どこか疲れた様子のヘスティアをにやにやした表情で見つつ、ヘルメスは思考する。

「（彼の存在は一体どのようなことを巻き起こしてくれるのか……いやはや、これは面白くなってきたねえ）」

…………さて、神々にここまで色々な影響を与えていた当の本人はどういふと、

「まつたく、ヘルメス様はいつも何時も私に仕事を押し付けてくるんですから……」ちらの苦労も知らないで……！」

「わかる、分かりますよ。上司とか、目上の存在がロクデナシだと。下は苦労するんですよねえ……」

「そなんですよーこの前だつて——」

豊饒の女主人という店で、盛大に愚痴を溢し合っていた。

もしも仁慈がだんまちの世界に行つたら そのさん
!

ここは豊饒の女主人。

神々すらも恐れることなく接する最強の女主人が切り盛りする、冒険者になかなか人気の店である。従業員は皆女性で彼女達を目当てにかよう冒險者も少なからずいるであろう。唯、女性だけが働いているということがこの店の人気につながっているわけではない。女主人の料理もしつかりとその人気につながっていて、このオラリオの中でも最大の派閥といつていいロキ・ファミリアもよくよく訪れている。まあ、あの主神の場合女性従業員目当てといわれても納得できるが。

そんな店の中に注目を集めている2人組みの男女。女のほうは目立たないようなローブを着込みながらも水色の髪と眼鏡が知的な印象を持たせる美人、彼女はヘルメス・ファミリアの団長。万能者、アスフィイ・アル・アンドロメダ。

そして、男のほうは白に近い銀髪に血のように赤い目、隣においてある自分の背丈と変わらないであろう巨大な大鎌が特徴的な今神様の中では話題の異世界人、樅原仁慈である。

彼の事やそのやらかしたとも表現するべき行動の数々は未だ大衆に知られていないものの、方や万能者、方や目立ちやすい髪の色に見たこともない武器を携えているという2人組みに視線が集まるのは必然的だつたといえる。

しかし、当の本人達は周りの視線などは一切気にすることなく、盛大に愚痴を溢し合っていた。特に、仁慈の監視を申し付けられたアスフィイが。

一言口を開いてみれば出るわ出るわ。その勢いは大雨が降つた際の排水路から逆流した水並みの勢いで尽きることなく出てきていた。基本的に神も冒険者もわが道を行き、自分のわがままを通し、ガサツで、乱暴で、何より馬鹿と言つた要素をふんだんに含んだ生き物である。むしろそれらの具現化といつてもいいだろう。

そんな環境の中にいれば、まとめ役である彼女の苦労も納得のものである。仁慈もそのことをなんとなく感じ取つているのか、彼女が全てを吐き出すまで黙つて話を聞いていた。

何を隠そうこの仁慈。取る行動の一つ一つのぶつ飛び加減から周囲に苦労をかける側の人間かと思われぎみだが、実はそういうわけでもない。

彼がブラッド隊の隊長に就任してからはアラガミと実際に戦いながらも書類仕事に追われていた。それだけならまだいい。しかし、元隊長の金髪の暴れ具合によるクレーム、猫耳おでんパン娘の格好を何かしてくれというクレーム、兄貴の速さについていけないので何かしてくださいという要望、ニット帽とスク水がいやいやして砂糖吐きそうというクレームと言つた本当にこれ俺がやる意味あるの？と疑問に思つても仕方がないことの対処もやらされていた。

さらに言うなれば、上司に当たるダブルマッドからの無茶振りや実験等の相手もさせられていた。ぶっちゃけ、仁慈じやなきや死んでるレベルの仕事量である。

それらの修羅場とも言える場面を乗り切つてきた彼にはアスファイの苦労はよく分かつていたのだ。

「はっ！…………なんかすみません。色々愚痴を言いたい放題言つてしまつて……。貴方だつて知らない世界に飛ばされて大変だというのに……」

一通り話し終えて落ち着いたのか、アスファイは今まで自分が何を話

してきたのかを自覚して、顔を真っ赤にしながら仁慈に対して謝罪する。

そんな彼女に仁慈は気にしないでくださいと返した。

「いえ、似たような経験があるのでアスフイさんの気持ちは痛いほどわかります。たまにはこうして誰かにぶつける勢いで吐き出したほうがいいですよ。溜め込みすぎると体に悪いですから」

仁慈も、我慢の限界に達したときは誰かに愚痴を溢した。その愚痴を溢した相手の名をキグルミという。継ぎ接ぎだらけのウサギのキグルミを着た謎の神機使いでどんなときにも言葉を発しづ、中身を誰も見たことがないという極東の不思議名物でもある。

仁慈は一度そんな彼（？）のことを利用し、愚痴をこぼしたことがあつた。そのときキグルミは無言で一杯の飲み物を奢ってくれ罪悪感にさいなまれたのはいい思い出である……かどうかわからないが、記憶には刻まれている。

「……ありがとうございます。本当に貴方のような人は他に居ません。ああ、どうして貴方には神の恩恵^{アーラルナ}が効かないのでしょうか。効いてくれば、ヘルメス様がなんといおうとファミリアに入れるのに……」

声がガチだつた。

この団長、仁慈が神の恩恵を受けることが出来るならば本気で自己達のファミリアに突っ込むつもりだとひしひし感じることが出来た。

仁慈は冷や汗を流しつつも、口を開く。

「そういうえば、まだこの世界のことを何も知らないんですね……よかつたら話していただけませんか？」

「もちろんです。……あ、待ってください。この世界のことを説明

してあげるので貴方がゴライアスと戦った時に使つた道具や、そちらの世界の話をしてくれませんか？」

「いいですよ」

そうして、追加で飲み物を頼みつつ、今度はお互の世界のことを話し合つた。このオラリオの話を聞いているときの仁慈は物凄く微妙な顔をしていた。それはレベルという概念である。この世界では2以上のレベルを持つものは上級冒険者と分類される。彼からしてみればレベルは100が限界だという固定概念があり、レベル2といえば、ポケ○ン貰つたばかりの主人公がチュートリアルで捕まえるポ○モンと同レベルである。なので彼はこの世界の冒険者のレベルを自分が思うレベルと捕らえることはせずランクとして捕らえることにした。

一方のアスファイは仁慈の持つ道具や世界のことを聞いて、驚愕の色に染まつたり、目をキラキラと輝かせたりしていた。

世界観は、神々が降りてこないまま、世界中にダンジョンのモンスターが闊歩しているのだと考えるとその深刻さが分かつた。どういう無理ゲーだと彼女は感じた。それと同時にそんな過酷な環境下で生きてきたからこそその力なのだと納得した。きっと神機使いという生き物は皆、彼のように強いに違いないとも考えた。

道具のほうは、素材自体はオラクル細胞の存在をよりどころとしているもの多いため複製は出来ないものの、道具のコンセプトに大変刺激を受けたようだつた。

スタングレネードと言つた系統のものは特に感じるものがあつたらしい。

気が付けば、太陽は傾き空は茜色に染まり始めていた。彼らがこの店に立ち寄つたのは昼頃……単純に考えて三時間ほど時が過ぎていった。若干この店の女主人が仁慈たちを煩わしそうに見ているのに気

付き、急いで勘定を済ませて外へ出る。

「思つたより話しぃ込んでしまいましたね」

「そうですね」

「所で俺は何処に寝泊りすればいいんでしょうか?」

仁慈がこのオラリオに着てから既に一日が経過している。成り行きで黒いゴライアスをぶつた押した仁慈は微妙に胡散臭い笑みを浮かべている金髪の男神ヘルメスのファミリアのホームで一晩を明かした。しかし、今日どのようにするのかは予定してなかつた。

一応、黒いゴライアスを討伐してくれたということで、ヘルメスから多少の金は貰っているものの一人で宿屋に泊まれるかといつたら不明である。何故なら、話は通じるのに文字は分からぬという意味不明な状況に陥っているからだ。このことが分かつたとき彼は思わずなんでさと呟いたという。

仁慈に指摘されてアスファイも初めて気が付いたようでハツとしていた。

「どう……すればいいんでしょうか……」

「頑張れば出来ると思うんですけど……先程からなんか視線を感じていまして……」

仁慈の言うとおり、道行く人は仁慈に珍獣でも見るかのように視線を向けていた。先程までの大鎌を持っているからつい反射的に見てしまうものとはまったく違う。意識的に向けている視線が明らかに多かつた。

「おそらく、神会での報告が行き渡つたのでしょうか」

「納得です」

異世界人、わけの分からん武器、神の恩恵が効かない……これだけの珍要素があれば注目されるのも致し方ないといえる。

「…………まあ、ヘルメス様がしつかりと事実だけを伝えるかは分かりませんが」

「一気に不安を煽るようなこと言わないでくださいよ」

この視線、本当に大丈夫なんだろうか……。

仁慈は若干不安になつた。

とりあえず、昨日も泊まつたヘルメス・ファミリアのホームに戻ることにした。ヘルメスも仁慈のことを気に入つてゐるし無碍にはしないだろうということだ。

方針を決めていざ、向かおうとしたときに待ち行く人と肩がぶつかってしまった。仁慈は反射的に謝りそのまま去ろうとするが、不意に肩を掴まれる。

この後、起ることがなんとなくわかつた仁慈だが、ここで無視するのも感じが悪いと思い振り向いた。

「おい、ぶつかつておいてそれだけで済むと思つてんのか？」

相手のほうがよっぽど感じが悪かつた。

「本当に申し訳ない。少々他の事に気を取られていたものですか
ら」

そういって謝る仁慈だが、肩を掴む人物は一向に放す気配がない。
というか、いつの間にか人数が増えていた。

先程までは仁慈がぶつかってしまった男性とその隣に居るもう1人の男性だけであつたはずなのに、今では五人ぐらいの人人が囲つている。顔つきは完全にヤの付く人であつた。

「許して欲しいならそれなりの誠意つてやつを見せてもらわないと
なあ？」

「ああ、その武器。俺によこせ」

言葉と共に手を差し出す男性。
周囲に居る男達も逃げ場を無くすことと、プレッシャーをかけるために距離つめて仁慈を囲う。

「それは流石に困ります。これは唯一の武器なので」

「ふうん。お前、レベルはいくつだよ」

「俺は冒険者ではないので、レベルはありませんよ」

そういうと、男達は一斉に笑い出す。

「ぼ、冒険者でもねえのに武器を持つてんのか？」

「ブツ、ハハハハハツ！笑わすなよ！そんなの、お前が持つて無駄だ。冒険者様である俺達が有効活用してやるよ」

「結構です」

「…………これは、これは、お前……自分の状況がまだわかつてねえみたいだな」

彼らが仁慈に対してもここまで大きな態度を取れるのは冒険者であることが関係している。

冒険者とは神の恩恵を受けた者。その効果は凄まじく、恩恵無しなら並みの達人だつて手こするモンスターに戦いのたの字も知らない素人が勝ってしまうほどの身体能力を与えるのだ。だからこそ、恩恵を受けていない人は冒険者に強く出ることが出来ない。ここまで粗暴なやからは滅多に居ないものの、遭遇してしまったと弱い者達は泣きを見るしかないものである。

これは流石にまずいと、アスファイが止めに入ろうとする。
しかし、それは止められてしまった。

「――つ!?誰です?」

「手を出すのはちょっと待つといで」

「――口キ様!？」

彼女を止めた人物とはいつの間にやらそこに居たロキであつた。
その後ろにはこのオラリオ最大派閥のロキフアミリアの幹部達も居る。

神に止められては彼女も引き下がるしかない。しかし、何が目的かは問うて置かなければならない。

「――無礼を承知で申し上げます。目的は何なのですか?」

「別にたいしたことじやあらへんよ。あのドチビとアンタんとこの主神が言つたことが本当か確かめたいだけや」

神会でヘスティアとヘルメスが口にしたこと。

——彼は恩恵無しでも最低レベル5くらいの戦闘力を持つている。

彼らが嘘をついているとは思っていない。しかし、自分の目で見てみないと信じる気になれないのは確かだ。相手が小物というのはいささか不満だが……この状況は、絶好の機会でもある。

ロキから仁慈のことを聞いていたであろうロキファミリアの幹部達も彼の行動に注目していた。

そんな周囲には気にもとめず男達は言う。

「これで最後だ。おとなしくそれを渡すのと、ボコボコにやられてから取り上げられんのと、どっちだ？」

「……どちらもお断りです。というか、もし直接手を出すならこちらも受けた分はきつちりと返しますよ?」

「やれるモンならやってみろよツ! これでも俺は上級冒険者様だぜエ!」

何故か上級冒険者ということをカミングアウトしながら殴りかかる男。それを皮切りに周りの男達も一斉に拳を振るい、仁慈を殴つた。

顔、腹、鳩尾、背骨、肩。

これが唯の恩恵を受けていない一般人だつたら最悪死に至るような攻撃。男達は内心で最後まで武器をおとなしく譲らなかつた仁慈を見下しながら武器を奪おうとする。

しかし、

「全員、一発のお返し」

その言葉が男の耳に聞こえた瞬間には、もう自分は地に立つていなかつた。ふわりと体が宙に浮いている感覚と共に男の意識は途絶えた。

何がおきたのか分からぬ周囲の男達。

だが、仁慈は困惑の中にいる彼らを決して見逃したりはしなかつた。肩と腹を殴った男を先程顔を殴った男と同じように瞬時に彼らの前に姿を現し、頸にアツパーを決めて空の旅に案内する。

背骨と鳩尾という洒落にならない、明らかに殺す氣で殴った二人には頭を掴み、全力で石畳の地面へと叩きつけ、その後追い討ちに足で踏みつけた。

「い、いふあふ^発つふえ^てふあふ^話あふ^{じや?}いふあ?」

「アレは嘘だ」

そこまで言うと、最後にもう一度だけ踏みつけた。それをやり終えた仁慈はとてもさわやかな笑顔であつた。

異世界行きはやはりストレスが溜まるらしい。

ごく普通に冒険者五人を返り討ちにした仁慈は普通にアスファイの元へと帰つて來た。アスファイはとてつただただ溜息を吐くだけである。黒いゴライアスと戦つているところを見たのだからこの結果は火を見るより明らかだと知つていたからだ。

「お待たせしました」

「やり過ぎでは?」

「いい薬になつたでしよう?あの手口大分やりなれているようだし

たので、少々お灸をすえただけです」

「ストレスの捌け口には？」

「少ししました」

「まあ、いいでしよう」

そんなやり取りをしつつ彼らは帰路に着く。だが、アスファイはそれがすんなりスムーズに行くとは思っていなかつた。何故なら、

「なあ、そこのお前さん。ちょっとええか？」

仁慈に興味津々と言ったロキファミリアの皆様が居るからである。アスファイは思つた。仁慈は自らが望もうと望むまいと、面倒ごとに巻き込まれるたちなのだと。

何でこう偉い人つて話し聞かないの？ b y 仁慈

今から帰ろうとしたのにまた戻つてしまつた豊饒の女主人。出て行つたすぐ後にまた入つてきたから、従業員さんと女主人の視線が痛いこと痛いこと。俺だつて自分から戻つてきたわけじやないよ。

俺がすぐ入つた後から続く人たちを見て合点がいつたらしい女主人は俺に少しだけ同情的な視線を向けた。その視線が俺をとても不安にさせます……。

「（アスファイさん。なんでもまたこの店にすぐさま帰つてしまつたんでしようか？）

「（すみません。神にはあまり大きく出れないもので……それがこのオラリア最大ファミリアの一角となると……）

何処の世界、いつの時代も権力には抗えないものなのだろう。彼女の表情を見て思わず不憫に思つたので気にしないようにも言つておく。

「ホラ、そこの神喰らいの兄ちゃんもこつちに来んかい。アンタの世界の話とか色々聞かせてや」

こちらの事情は関係ないと、糸目の女性——女性？……多分女性の神に呼ばれる。そこにはテーブルを一つ二つ貸しきつてお酒を飲み始めている男女の集団があつた。というか、あの人神なんだよな。何で似非関西弁を使つていいんだ。一体何の神様なんだ……？

たこやき神か？それともグ○コが神格化したのか？

そんな疑問を抱きつつも、呼ばれたとおりに近付く。

「なに立つてんの。しつかり席もとつてるから、はよ座り」

「は、はあ……」

椅子を引くことで俺の座る場所を分かりやすく示してくれた。しかし、今はその気遣いが怖い。あそこに素直に座つていいいものなのだろうか。チラリとアスファイさんを見る。彼女も彼女でなかなか手一杯と言つた雰囲気でつた。表情も微妙に硬くなつてるのが分かる。まあ、ここで帰るのはどう考へても得策とはいえないためにおとなしく座る。その後に女神…………うん、女神は店員を捕まえて注文を終えるとすぐさまこちらに視線を向けて、そのままロツクした。

「なあ、アンタ。異世界から來たんやろ？ アンタの居た世界はどんな所だつたん？」というか、神喰らいが職業として成り立つくらい神々が闊歩してゐるん？」

「あー…………えつと……」

なんと説明したらよいのだろう。

というか、まだ俺は貴方達のことを欠片も知らないんですけど。向こうはこうして話しかけている以上知つていては思うんだけど……。なんともまあ、困り果ててていると見た目十代前半の金髪の少年が察してくれたのか俺にくい氣味で言葉を発する糸目の女神を止めに入つてくれた。

「まあまあ、まだ自己紹介もしてないのにそんなくい氣味で質問しても、彼は口を開き難いと思うよ？」

「ん？ それもそうやな。ウチは口キつていう神や。そつちの世界では口キという神は居つたか？」

「相手取つたことはないですねー」

というか思つてたのと全然違つた。

日本欠片も関係なかつたぞ。何で似非関西弁なんだ口キ。そして、口キが俺の元に来るとかフエンリルに所属している身としては何かしらの運命的なものを感じる。関西弁だけど。

「そうなんか……まあ、ええ。自己紹介も終わつたことだし、早速話を——」

「僕達の紹介はいいのかい？」

「後でええやろ」

自由……いや、欲望に忠実というべきか。

少年の言葉を遮り、もう逃がさんとばかりに近付く神口キ。少年は若干申し訳なさそうな表情を浮かべつつも、視線で相手をしてあげてくれと語りかけてきた。俺はそれに頷くことで返答する。まだ若いのに、苦労しているなと思いつつ、アスフィイさんに話した内容とそうでわらないことを語つた。

異世界からの来訪者、樺原仁慈が語つた内容は口キの想像とはまったくの別物であつた。彼はオラクル細胞というものから出来た化け物をアラガミと総称し、仁慈はそれらを刈り倒すことから神喰らいと呼ばれているらしい。

本来は神機使いと呼ばれるらしいが、仁慈はそれなりの実績がある

のでそう呼ばれているそうだ。

てつくり、本物の神々と戦っているのかと思ったロキを初めとするロキファミリアの幹部達は拍子抜けする。しかし、ロキは同時に疑問に思つた。ならば、この自分の身に絶え間なく来る寒気の正体は何なのかと。

「…………なあ、そのアラガミは誰かから信仰されたりとかしてたん？」

「……一部にはアラガミを純粹に崇拜するやからも居ました。しかし、畏怖という名の信仰なら、全人類がしていたと思います。アラガミという漠然としつつも、自分達を喰らいつくした存在を」

この言葉を聞いてロキは理解した。

アラガミは、少なくなつたとはいえる意味全ての人間達から認知され、信仰され、畏怖された存在なのだと。これならば、神格を持つ条件としては十分すぎる。そして、それらを片つ端から片付けた彼はまさしく神殺しといえるだろう。

「はー……そりいえば、その神機使いっちゅうのは、なるうと思えばすぐなれるモンなんか？ウチらでいう冒険者みたいに」

「……この神機は、元々先程言つたアラガミと同じ存在んですよ。人工的に調整されたアラガミともいえます。なので、神機使いになるにはまず自分に適合しているかをとどうか調べる必要があります。そして、適合した神機が見つかってもそれで神機使いになれるとは限りません。適合者が神機に負けた場合はアラガミの仲間入りです」

強大な力を使うには、当然それ相応のリスクが生じる。それは当たり前のことである。しかし、神の恩恵はそうではない。少なくとも恩恵を受けること事態にデメリットは存在しないのである。

それを普通としている冒険者達は個人差はあれど驚愕していることがその雰囲気から感じられた。

「もし、神機に負けてアラガミになつたら……？」

「当然殺しますよ。それも、完全にアラガミになつたら厄介なのでまだ人型を保つていてる状態で」

さらりと言われた言葉に皆目を見開く。

その反応は普通だろう。ここまで何の動搖もなく殺すといつたということは、彼自身その行動を経験しているもしくは同様もなく言い切れるまで慣れてしまっているからだ。

「……ま、なかなか割りに合わない仕事ですよ。特に自分なんて、仲間の問題行動の責任を片つ端から取られましたからね」

ニット帽とスク水がイチャイチャしてますなんとかしてください
という要望とか、どうすればいいんですかねえ……と仁慈がおどける。
そう言うと幾分か雰囲気も軽くなり、何処からか笑いもこぼれていた。

「じゃあ、その武器に私達が触つたら……」

「アラガミになり討伐対象になります。だから絶対に触らないでくださいね？冗談とか抜きで死にますよ」

仁慈の武器——神機をマジマジと見ていたきわどい服というより布を纏っている褐色肌の少女、ティオナの質問に仁慈は脅しの意味も含めて実にさわやかな笑顔で言つた。ティオナは若干顔を引きつらせた。

「……神機使いちゅうも大変何やなあー。……そういうえばドチリのやつが、恩恵受けてなくてもレベル5ぐらいの戦闘能力を持つてる言うてたけど、それはホンマか？」

「レベル5相当の戦闘能力ってどの程度ですか……というか、ドチリってどちら様ですか？」

「すまんすまん、レベルで言つてもアンタには通じなかつたな。ちなみにドチリはヘスティア言うやつのこつちや」

「ああ、あの人ですか」

思い浮かぶのは自分と同じような髪の色と瞳の色を持った少年をとても大事そうにしていた黒髪ツインテールの女の子のことが浮かび上がつた。ちなみに、何かと仁慈に對して怯えたりしていたので仁慈にとつてはあまり会いたくない相手である。

見た目は幼女とまでは行かなくともそれに近しい成りの少女であつたため、流石に仁慈も堪えたらしく、遠い目で店の天井を見ていた。

そんな彼には気にも留めず、口キはいいこと思いつきましたよとも言いたげにPON☆と手を叩いて言った。

「そうや。アンタの実力を測るには同じレベル5をぶつけてみるのが一番やないか！」

「えつ」

「えつ」

『えつ』

あまりに唐突で脈絡もないロキの一言に仁慈とアスフィイはもちらんのこと酒を片手に料理や会話を楽しんでいたロキファミリア幹部達も思わず間の抜けた言葉を溢し、同時にロキに視線を集中させた。しかし、そんな事は関係ねえと言わんばかりにロキは気にせずそのまま言葉を続ける。

「なあ、アンタ——んいや、仁慈。アンタ、今から暇やろうか?」

「え、は、はい。一応……? 家なき子、というか居場所無き子なので……あ、でも今俺のを預かってくれているのはヘルメスさんなんですよね」

「ヘルメス……ヘルメスかあ……どうせアイツも仁慈のこと気になつてるんやろうし、この話を言つたらノリノリで許可すると同時に見学しにくるんやないかな?」

「(絶対そうなる……)」

アスフィイは思つた。

これ絶対自分が伝言役として借り出されるな、と。その予想は正しく、そう考えた直後にアスフィイはロキから伝言を頼まれた。ついでに仁慈の身柄も持つて行かれた。

「……はあ」

私は結局こんな役回りかと、彼女は深い溜息を吐き、自分のホームへと向かう。どうせ主神であるヘルメスがニヤニヤしながら迎えてくれるに違いないと考えながら。

「よつし、じゃあ早速ホームに戻るで! 仁慈と戦いたい人この指止まれー!」

といいつつハイテンションな口キ。

そんな彼女にどうしたらいいのか分からぬ仁慈は取り合えず、激流に身を任せることにした。

「と、言うわけです。ヘルメス様」

「うんうん。唯單に町を歩いているだけでそうなるとは、やはり凄まじいね。彼は。実に面白い」

ホームに帰つたアスファイは早速自分の主神であるヘルメスに報告をした。それはロキとの戦いの件もそうだが今日一日の行動全般も報告してある。そして、その反応がこれである。予想は出来てた。彼女は心中で深い溜息を吐く。

「では……」

「もちろん見に行くさ。アスファイ、行くよ」

「はあ……分かりました」

この主神。こうなることを願つて態々神会に行つたのやもしそれない。そう思わずには居られないほど、この神の表情は輝いていた。その輝きようは、今から新作の戦隊ヒーローの映画を見に行くと告げられた子どものようである。つまるところ超嬉しそう。この埋め合わせとして、仁慈にスタングレネードの解体許可を貰おうと少しだけ思つたアスファイだつた。

一方、仁慈を攫——ゲフング芬、連れて行つたロキフアミリアのメンバー達。話の流れからして一番相手をさせられそうなレベル5組が、ガレスに引きずられている仁慈を見ながら会話をしていた。

「ねえ、ティオネ。ロキが言つてたこと本当だと思う?」

「恩恵無しにレベル5相当つて話のこと?……正直、俄には信じられないわね」

「だよねー。アイズは?」

「…………わからない」

「うーん。じやあべーと」

「じゃあつて何だよ。ペタゾネス」

「誰がペタゾネスだ!?」

「ティオナ。話が脱線してるわよ」

「フウー、フウー……で、あの異世界から来たっていう人の実力」

「さあな。一応、恩恵無しでもレベル2の冒険者くらいは倒してたが……」

ベートと呼ばれた青年はここでいつたん言葉を切ると、ガレスにドナドナされている仁慈の姿を視界に納める。

「……今ではアレだ。せいぜいが3程度の雑魚だろうぜ」

そう言つて笑つた。

他の人たちもベートに釣られて仁慈を見る。

「お前さん軽いな！ちゃんと食べているのか？」

「食べてます。食べてます。これでもかなり雑食なんで……それからいい加減引きずるの止めてもらえません？逃げませんから、自分で歩けますから」

「ガハハ」

「聞いて」

……とても強そうには見えなかつた。

異世界からきたというのも、根拠となるのは神の恩恵が効かないことと、見たことのない武器くらい。

いや、実際に異世界から来たのだろうが、それで本当に強いのか。その確証が無かつた。

「なになに？みんな相手はしたくない感じ？」

「興味ないもの」

「雑魚なんて相手するだけ無駄だ」

「…………」

大分不評のようである。

これはどうしようも無くなつたら自分が出ようかと思いつつティオナは帰路に着いた。

場所はロキファミリアのホーム。

その中でも戦闘に支障が出ない場所に、ロキファミリア幹部とロキ、ヘルメスとアスファイが集まっていた。

彼らが囲っているのはこれから模擬戦をする仁慈とティオナである。結局誰も名乗り出なかつたので彼女が相手することになつたらしい。

「勝負内容はどちらかが戦闘不能もしくは降参言うまでや。武器も好きに使つてええで。判定はフイン、頼むわ」

「わかつた。仁慈君、決して仲間だからといってティオナ優先の判定とかにはしないから安心してくれ」

「そこは別に心配してませんけど……いいんですか？自分の武器のこと、話しましたよね？」

「心配あらへん。ティオナは散々武器ぶつ壊してるから、今更もう一回ぶつ壊したところで変わらへんよ」

「なんか納得いかないけど、そういうことー遠慮なんてしなくていいんだよ？」

「は、はあ」

ティオナは超硬金属製の巨剣である大双刃を振り回しつつ構え、仁

慈も戸惑いつつ神機を構える。

2人の準備が整つたと考えたフインは一つ間をおいてから始めと声をかけた。

最初に仕掛けたのはティオナ。レベル5という高ステイタスから生み出される力を利用し、一瞬にして仁慈の元へと駆け抜ける。

その姿はレベル4のアスファイにも捉えられるかどうかと言つたところである。しかし、これほどの速度でも彼女は速度に重点を置いているわけではない。

レベル差とはたとえ1の違ひだけでもそれだけの差を生み出すのだ。まして恩恵すら受けていらない仁慈は本来なら、何も出来ずに攻撃され死に至る選択肢しかない。

一瞬にして仁慈の元へ接近したティオナはすかさず大双刃を振りかぶり、上段から振り下ろす。仁慈の視線は武器に向いていない。おそらくは未だ、急に目の前に現れたティオナに状況が追いついていないのだろう。彼女はそう予想し、勝利を確信した。それと同時に残念にも思つた。あれほどのこととき語つてくれた男は結局口だけだったのかと。

だが、彼女の予想は裏切られることとなる。

仁慈は自分に大双刃が当たる直前に体を捻りながらティオナの懷に潜り込み、武器を持つてゐる両腕を神機を持つていないほうの手で掴むと背負い投げの要領で地面へと叩きつけようとした。

思わず反撃に一瞬だけ動きを止めるティオナだつたがすぐさま、意識を戻し、体を反つて背中ではなく足で着地すると、投げられていた勢いを上乗せして逆に仁慈を投げ返した。

色々な勢いが合わさつた投げは強力で、勢いよく飛んでいく仁慈だつたがなれたように宙で2、3回回転するとすぐさま勢いを殺して着地を果たす。

無意識に取つた行動だつたがティオナは今のやり取りで理解する。この人は本物だつた。

……神機使いとは常に人手不足である。

しかし、相手のアラガミは多く、1人で複数対相手しなくてはならない場合が多い。それも今の自分に合っていないアラガミが来ることも多々ある。

そう、彼ら神機使いは、神機使いとして戦う力を得たとしても基本的に立場は一般人のときと代わらずに弱者の側なのだ。

弱者が強者と対峙するときどうやってその差を埋めるか……小手先の技術や環境等を考慮して埋めるのだ。

そんな戦いをしてきた神機使いたちが、弱いわけが無い。常に自分を弱者の立場におき、何が何でも戦場を生き抜いてきた……そんな彼らが弱いわけが無かつた。

ティオナは考えを改める。そして、一新した気持ちで改めて仁慈と対峙しようとしたとき、彼の姿は無かつた。

「えつ」

何処に行つたと、仁慈を探す。

そうしていると急に自分の背筋に強力な寒気が襲つた。なりふり構わずその場を前に転がつて移動すると、先程まで自分の居た——正確には首があつたところ——に何かを振り切つた残像が見えた。

当然それをやつたのは仁慈である。彼はいつの間にか自分の背後に移動し、武器を振るつていたのである。

ティオナの頬に冷や汗が流れた。これはヤバイ。今まで戦つてきた中でも上位にも食い込むやバさだと思えた。だが、

「……フフ」

アマゾネスという種族の特性か、この戦いが楽しいと感じ始めてい

た。

「今のはどういうことや?」

「彼は、ティオナの呼吸や視線にあわせて接近したんだ。体勢を低くして視界から外れやすくし、呼吸を合わせることで完全に気配を消して見せた。その手際もさることながら、背後まで移動したあの足捌きも素晴らしいものだよ」

ロキの疑問に審判を勤めるフインが答える。

それを聞いたときロキはふえーという若干間抜けな声を洩らした。

「……やつぱり、アイツの言つとつたことは本当やつたみたいやな」

「そのようだね……これはステイタスに頼りを置いているティオナじや危ないかもね」

そう呟くフインの視線の先には、悉くと振るう武器をいなされて攻めあぐねているティオナの姿がある。

「くつ、面白いくらいに攻撃をいなされるね! というか何で対抗できるのかなつ!」

「一応、側面に攻撃を加えて剣先を変えているだけですから。ほら、どこかが力任せな所がありますし。それだと翻しやすいんですよ」

「あちやー……最近強敵は仲間と一緒に戦つてたから、フォローされている部分とかが表面化しちゃつたか」

「まあ、この世界のステイタスのことを考えると性能でのゴリ押しが強いらしいですかね!」

「うおわ!?」

今までいなされるだけだったが、急に仁慈が武器を弾き返すので思わず仰け反る。そして仁慈はその隙にティオナの首に鎌をかけた。

「どうします?」

「降参」

「勝者、仁慈」

決して見ている人は多くない勝負だったが、全員の頭に確実に焼きついた勝負だった。

何故そんな事が分かるかというと、神機を下ろす仁慈に神々からの熱い視線とか、ほかの冒険者からの好奇のまなざしに去られたりしているからである。

神機使いの苦労はこれからだ！

「（樺原仁慈ですが、部屋の空気がカオスです……）」

仁慈の実力に興味を持ったロキが行つた仁慈とレベル5冒険者、^{アマゾン}大切断と呼ばれるティオナ・ヒリュテと一対一の模擬戦をさせた。

誰も彼もがティオナの勝利を考えていたが、その考えは覆されることとなる。仁慈は自分の身体能力と戦闘技能を十分に活用してティオナの攻撃を捌き切り、勝利を収めた。

だが、それによつて元々高かつた神々の関心はMAXに近付き、仁慈の力を目の当たりにしたフインをはじめとするロキファミリアの幹部達も何かしらの関心を集めていた。

——ゆえに、仁慈の居心地の悪さはとんでもないものであつた。ついでにアスフィイも罪悪感とか良心の呵責とかで大変なことになつていた。

「なんや、仁慈。お前さんめつさ強いやんか」

「まあ、これでも自分が居たところではなかなかの強さを持つてますからね」

本当はなかなかどころの強さではないのであるが、流石にそれを自分で言うのは恥ずかしく、それで居て神羅ユウのような正真正銘の化け物を知つてゐるためにそう言う。この言葉が彼らに、また誤解を抱かせるのだがそれは関係ないのでいいとしよう。

「どのようにしてあの技術を見つけたんだい？」

「アラガミと戦う中で自然と、ですかね。神機使いは戦う力を持つても決して力で勝てたり速さで勝つたりということができません。こちらの世界のようにレベルを上げるといって身体能力の底上げは出来ないので、このように技術を磨くしかないのです。力で勝れないなら受け流す、必ず先制を取れるように視界から外れる……これらはデフォスキルですね」

「ふむふむ」

「神機使いは数も少ないですから、本気の戦闘に置いては何でもしますよ。不意打ち、ハメ殺し、同士討ちの誘発……ようは、勝てばよからうなのです」

敵は自分達の状態も強さも考慮して襲つてはくれない。それにもとよりアラガミのほうから仕掛けてこと、数的な不利もあり、何が何でも敵を減らし、自分達に有利になるようにする。それこそ、今の神機のように変形機能がついていなかつたときから受け継がれるものである。要は極東の神機使いは大体修羅。

「まあ、当然だね。敵のほうが自分よりも強い場合には手段なんて選んでられないからね。君達の世界では特にそのようだつたし」

フィンは仁慈の返答に嬉しそうに同意した。

戦いを指揮する側としては、こういう発想を持ち、尚且つ実行に移せる人物は好意的に見るのでだろう。

彼と同じくロキファミリアの最古参メンバーのガレス・ランドロックも仁慈の力と発想が氣に入つたようで彼に言葉をかけていた。
……拳と同時に。

「お前さん強かつたんだな！ それも見抜けないとは……ワシも衰え

たものよ」

「そんな強力な拳繰り出せるならまだ現役だと思いますよ。ただし、いきなり殴りかかるのはどうかと思いますけど」

僅かに後ろに下がり、手も引くことによつて衝撃を緩和しつつガレスの拳を受け止めた仁慈はそう告げる。しかし、言われた当の本人は笑うだけで全てを誤魔化した。謝つてよ……と思つた仁慈は悪くないだろう。

「なあなあ、仁慈。ウチはお前のことが結構気に入つたで」

「は、はあ」

「せやからウチのファミリアに入らへんか?」

『ファツ!?』

ガレスを離し、受け止めた腕をグルグルと回す仁慈に口キが唐突にそう言つた。これには神も、一流冒険者も、二流冒険者も関係無しに驚きの声を上げる。あの女好きの口キが自ら男を勧誘したと。

「いや、でも、自分は神の恩恵を受けられないでの、冒険者になることもましてやダンジョンに潜る事も出来ないのでですが……」

「大丈夫や、問題あらへん」

「(すつぐ不安だ……)」

キリリとした決め顔で即答する口キに仁慈は言いようの無い不安を感じた。なんというか完全にフラグっぽいのである。

ここでようやく、ロキが男を誘ったショックから開放されたヘルメスが会話に割つて入ってきた。

「ちよつとそれは困るな。この子に一番初めに目をつけたのは俺なんだから」

「なんや、ヘルメス。ウチの邪魔するつて言うんか？」

「俺だつて優秀な人材が欲しいのは同じさ。アスフイも、彼を大層気に入つているようだしね」

チラリとヘルメスが視線をアスフイへとずらす。彼女はその視線から逃れるようにそっぽを向いた。ヘルメスは分かりやすいとくすぐす笑いつつロキに向き直る。

「でも、お前のファミリアじやあ有事のときに庇いきれんやろ。もしかしたら仁慈はこの町の全ての人間から狙われるのかもしれないんやし」

「…………」

「んえ？ どういうこと？」

ロキが言つた一言に今まで黙つて状況を見ていたティオナが尋ねる。

「こいつの存在は一応、今日行われた神会で明らかになつとる。でもな、その詳細は一切知られてへんのや。公になつとる情報は、神の力の無効化、最低でもレベル5クラスの力、異世界から來たこと、神喰らいであつたこと……。正直、これだけでも狙われるレベルの情報やな。それが勧誘か抹殺かはともかくとして」

最低でもレベル5クラス。

その言葉を聞いたティオナを含めたレベル5組はさりげなく驚くが流石に最古参であるレベル6の三人にはそれが分かつていたのか特に反応はしなかった。だが、ロキが何を言いたいのか粗方察したようだ。

アスフィもそれにたどり着いたようでまさかと言つた雰囲気を出している。

「それに、その武器のことや。仁慈以外の者が触つたら、アラガミちゅう化け物になつてしまふ……これが広まつたらえらいことやで」そこから先は皆が想像出来るからか、これ以上口を開くことは無かつた。

神機のことがばれれば確実に抹殺のほうに天秤が傾くだろう。仁慈を殺さないほうが安全だとそう伝えるのは簡単だが信じてもらえるかはまた別だ。僅かでも可能性があれば襲うには十分な理由だ。

「……心配^ご無用。俺に策はある」

「そうか。ならお手並み拝見や」

「……俺の意思は何処に言つたんですかね」

本人の意思をガン無視したまま話がついたらしい。

あまりにも唯我独尊を行く神々を前に仁慈は深々と溜息を吐く。そして、溜息を吐いたところで、

「——しつこい」

ティオナとの戦いの辺りから感じていた視線の主に向けて全力で

殺氣を放つ。それが効いたのか、視線はぱつたりと止んだ。

「どうしたんですか？」

「いえ、ちよつと先程から見られていたようだつたので」

「…………それ、ホンマか？ どんな感じやつた？」

「殺氣や敵意はありませんでした。観察している、というのが適切ですね。まあ、少々ねつとりした感じでいい気分ではありませんでしたが」

「うわー……その表現と行動、心当たりあるなあ」

「十中八九アイツやろな。これまたエライ面倒なやつに目え着けられたで……」

彼らの反応でどう考えてもいいことは起きないだろうと、漠然と仁慈は思った。

「―――つ！ あらあら、ばれてたのね……」

「ここはバベルの最上階。

オラリオでも最大にして最強ファミリアもあるフレイヤ・ファミリアのホーム。その一室で水晶のような球体に映る仁慈に視線をフ

レイヤは向けていた。

その映像に映つたのは信じられない仁慈の実力。恩恵もなしにレベル5の冒険者に勝利した。それも唯勝利しただけではない。勝負内容は終始仁慈の優勢で彼が戦いの流れをコントロールしているといつても過言ではなかつた。そうして見ていると、向こうもこちらに気付き、濃密な殺氣を飛ばしてきた。自分が殺されるというヴィヴィジョンがはつきりと浮かぶほどのものを。

——フレイヤは身をもつて知つた。あれは自分達の天敵であると。

確實に殺されると思つたのは初めてではないだろうか。意識せずに冷や汗がたれるがそれも含めて思う。

——面白いわ

魂の色は鮮烈な紅色。

その輝きは他の魂のはるか上をいく。

彼女の見てきた魂の中でもその輝きはトップクラスのものだつた。彼女は知らないが元々居た世界で一度世界滅亡を阻止した本物の英雄であるため当然だつたが、それでも人一倍鮮烈な紅色に、人をモンスターを神々でさえも魅了させる自分が逆に魅了されてしまった。

——ベルと同じく手に入れたい。あの紅を。

「オツタル」

「ここに」

行動の方針を決めたフレイヤは、このオラリオ最強の冒険者であるレベル7のオツタルを呼びつける。

彼はすぐにフレイヤの前にひざまずいた。

その様子に怒った様な感情の揺れは存在しなかった。自分を侮辱するものには激昂するオッタルが自分に殺気を向けられて平然としていられるのは考え難いとして、あの殺されるというヴィジョンが浮かんだ濃密な殺氣はピンポイントで自分にのみ向けられたものであるということが分かり、さらに欲しくなつた。

「…………近々ここに移る人間と少々遊んできてあげて頂戴。ダンジョンの中でね」

「畏まりました」

心酔する主神の言葉に二つ返事をするオッタル。
そんな彼を満足そうに見るとフレイヤは仁慈がダンジョンに入れるように手を回すのであつた。

「じゃあね、仁慈。また戦つてね」

「今度は是非、相手をしてほしいな」

「ワシも頼むわ」

「…………」

「…………また」

「妹がごめんね」

「仁慈ー！ ヘルメスんところが嫌になつたらいつでもこっち来い。歓迎するで、盛大にな！」

「お前ら、少しはまともに見送らんか」

何処までもマイペースなロキファミリアの面々に見送られながらヘルメス、アスフィイ、仁慈はすっかりと暗くなつたオラリオを歩いていく。

「ヘルメス様。あのようなことを言つてましたが、本当に秘策なんであるんですか？」

「ん？ 問題ないよ。そもそも、仁慈に危害を加えられる存在はこのオラリオの中でもかなり限られるから。それに、唯一の懸念だつた彼女も、排除には行かなかつたみたいだしね」

「は、はあ……」

何のことだか分からないアスフィイはあいまいな返事をする。

一方仁慈は本当にこのままヘルメスのところで世話になつていいのか疑問に思つていた。

「いいんですか？ さつきも言いましたけど、ダンジョンは入れませんよ？」

「そつちのほうは俺がなんとかする。だからさ。君にはアスフィイたちではなかなかもぐれない下層の方にアスフィイを連れて行つて欲しいんだ。彼女はこれでも万能者と呼ばれるほど、道具作りに優れてい

てね。なかなか取れない下層の素材も取れるようになれば、商業系のファミリアであるうちは結構な利益になるんだ」

「はあ!?

「なるほど」

初耳です、というか正気ですか!という感情が丸見えのアスフィ。納得したように頷く仁慈。対照的な反応であった。

「(いいんですか?彼が死んだら洒落にならないんですよ!?)」

「(問題ないよ。おそらく、彼はそのくらいでは死はないだろうし)」

ティオナとの模擬戦と仁慈の過去、そして彼自身の立ち振る舞いから下層くらいでは死はないだろうとヘルメスは当たりをつけた。彼の技量と身体能力もさることながら何より防御無視で攻撃できる神機があるからである。

「(でも、どうやつてダンジョンに入れるようにするんですか?)」

ダンジョンは冒険者しか入れない。

いくら素でレベル5以上の戦闘力を持つていたとしてもギルドがそれを認めるかどうか。

「(そこは神である僕が声をかければ問題ないさ)」

それを最後にヘルメスは何も語らなかつた。アスフィは諦めて彼の後に続く。

仁慈は、先程感じた視線について考え、なんとなく飛んできた方であるバベルを見ていた。

ダンジョンに神機使いがいるのは間違っている

仁慈とティオナの勝負から五日後。

冒險者のクエストや、ダンジョンの出入りなどを管理しているギルドにヘルメスの姿があつた。彼と対峙しているのはギルドでも中々権限のある役職についているものたちである。ここギルドの主神、ウラノスは君臨すれども統治せずを行つてゐるため、主神を説得するよりこうしたほうが速いのである。

「今回は何の御用でしようかヘルメス様。団員のレベルアップ報告ですか？」

「いやいや、ウチの連中はなかなかレベルアップしなくてね。今回は別件さ」

用意されたお茶を口に運びながらヘルメスは笑つた。
その笑みがギルドの重役を不安にさせる。

「ここ最近、噂になつてる異世界人がいるだろ？彼を特別にダンジョンにもぐれるようにして欲しいんだよ」

「あの、神の恩恵なしでもレベル5相当の実力を持つと、神々が言った異世界人のことですか？」

ギルドの重役はそう聞き返す。ヘルメスは笑顔で頷いた。嫌な予感がした。

「しかし、いくら強いといつても神の恩恵を受けていないので……」

「…………多くの神から彼に対する処置を迫られているんじゃないかな？」

ヘルメスが言つた一言にびくりと反応する。

……実は、異世界人である樺原仁慈がロキファミリアのレベル5である大切断テイオナ・ヒリュテを下したという噂が彼女と模擬戦をした翌日にオラリオ内を駆け巡つたのである。

このことは瞬く間に広がり、ロキファミリアの団員が本人に確かめてみたところ、本人もこれを肯定。

こうして、異世界人樺原仁慈の名前はその実力と共に大衆へと広まることがとなつた。ここで危機を覚えたのは弱小ファミリアの神々である。唯でさえ自分たちを駆逐できる能力があるにも関わらず、二流冒険者も斬つて捨てる事ができる存在となれば排除しに動こうとするのも納得する。

ギルドには正式に討伐許可を要請する声がいくつか届いていた。

「…………」

「ダンジョンに入れれば、自分達で手を下すまでもなくそのまま死ぬとは思わないかい？」

レベル5を倒した。それは事実だが、ダンジョンでは何が起こるかわからない。いくら強くても、人とモンスターを相手にするときはまた違う。異世界人ということと彼が持つている能力からいって、彼とパーティを組んでくれる相手もいないと推測されダンジョンにはソロでもぐる可能性が高い。

それならば、ダンジョンで勝手に死んでくれるんじやないか。ギルドの重役にそんな考えが廻るが、ここでもう一人が口を開いた。

「ヘルメス様。その件については既に許可が出ています」

「えつ？」

「…………何だつて？」

ヘルメスが離しかけていた重役もヘルメス自身も、そう発言したギルド職員のほうに視線を向ける。

特にギルドの重役なんて、どうして俺知らないの？話通してくれなかつたの？俺結構な役職だよ？とクエスチョンマークを浮かばせまくっていた。

「実はつい昨日、同じようなことをおっしゃった方が居るんです。そのときに対応した職員が既に許可を出したようで、今日の昼頃には公になるかと」

「ちなみに、それを言つて来たのは誰かわかる？」

「フレイヤ様です」

フレイヤ——その名前が入つてきた瞬間ヘルメスは頭を抱えた。そもそも、ヘルメスはこの噂をおかしいと思っていた。どうしてあんなに早く仁慈とティオナの戦いのことが公になつたのか。

あの場にはロキファミリアの幹部と自分、仁慈、アスフィイしかいない。ロキファミリアの面々は特に言いふらす理由も見当たらないし、ロキに限つても仁慈が余計危険視されるような噂は流さないだろう。自分は流してダンジョンに突つ込ます気満々だつたが未遂に終わり、仁慈本人もアスフィイもこんなことを言いふらしたりはしない。といふか仁慈に限つてはこの話をする相手すら居ない。

ならば、残つているのは仁慈曰く、戦いを覗いていたフレイヤのみである。

「（俺と同じことを考えていたとは……）」

彼女らしい手段とも言える。

自分の欲しいものを手に入れるためには神の力を使うことも他の男神を利用することだって厭わない女神だ。このくらいは想定して然るべきものであった。

「(しかし、彼女は彼をダンジョンに入れてどうしようというのだろうか?まさか本気で彼を殺すつもりじゃないだろうし)」

だが、フレイヤが興味を持つというのは十中八九仁慈の魂にだろう。ということは、別に殺しても問題ないといえなくもない。

「(…………まあ、いいか。彼女が何を考えていようと俺には大して関係ない。俺は唯、仁慈の異世界人が起こす変化を影響を見てみたいだけだし)」

呼び出したギルドの重役とフレイヤのことを教えてくれたギルド職員に礼を告げてからヘルメスは来客用の部屋を後にした。

扉を閉める瞬間、重役が職員に詰め掛けている姿を見たような気もしたが、気のせいで済ませた。

「と、言うわけで今日から遠慮することなくダンジョンに潜つて来ていいよ!」

「いや、いやいや」

「待ってください、ヘルメス様。なんかもう、色々と怪しいでしょ
うそれ」

ギルドの職員の話を聞いた仁慈とアスフイはそのまま笑顔でダンジョン入りを進めてくるヘルメスに意義を申し立てる。まあ、仕方もないことだろう。何故ならフレイヤのくだりも全て彼らに説明したのだ。ぶつちやけ、何か厄介ごとに遭遇するのは目に見えている。

「？何が？」

「フレイヤ様のことです。彼のことを監視していた件もあり、確実に何かあることが確定しているじゃないですか！」

「あー……彼なら大丈夫じゃないかな？」

「その適当な反応止めてください。ほら、貴方も何か言つたらどうですか？」

「何時も通りなので、問題ないです」

「もと居た世界でもこんな扱いなんですか!?」

仁慈の洩らした言葉に反応するアスフイ。この適当な扱いがデフォルトってどういうことだ、この人実は自分よりも職場環境悪いんじゃないのだろうか？アスフイはそんな事を考えた。大体あつてる。

「それに、俺だつて何もしないやつを置いておくほどお人よしじゃないぜ？」

「それは……そうですが……。いいのですか？そんな事言つて口キ

「アミリアに移動でもされたらどうするんですか」

「流石にそれはありませんよ。ここ一週間分の宿とこの世界の知識、その他与えられた分の恩はしつかりと働いて返します」

聞かせてやりたいそのセリフ。

自分で作った貸しを平気で踏み倒す、最低の冒険者達とヘルメスファミリアの団員達に聞かせてやりたいセリフだった。アスフィイは涙した。

ここまで普通の人間性を兼ね備えた人物にここ最近で出会ったことがあつただろうか？いや、ない（反語）

あの比較的まともな冒険者、ベル・クラネルでさえこの町に来てダンジョンにもぐるのは出会いを求めてやつてきたらしい。別にそれが悪いというわけではないのだが、なんかこう……あるだろう、とアスフィイは思っている。

「…………分かりました。ただし、私も行きますからね。ついでにモンスターの解説もします」

「ありがとうございます。情報は重要ですからね。…………マジで」

最後に付け足された言葉には万感の想いが込められている。

そう、雰囲気から感じた2人であつた。

「」のモンスターはキラーアント。その外皮は鎧のように頑丈で、今まで出てきたゴブリンなどのモンスターとは一線を画する堅さを誇っています。その攻撃もなかなかに強力なこととピンチに陥ると

仲間を呼ぶフェロモンを出すことから『新米殺し』とも呼ばれているのですが……貴方には関係ありませんでしたね」

「まあ……戦いに関しては素人ではありませんしね。冒険者としては新米ですが」

お前のような新米冒険者がいるか、とはアスファイの心の声である。現在ダンジョンの7階層で戦闘を終えた仁慈は魔石というモンスターの核となるものを抜かれて灰になつたキラーアントを眺めていた。

「核を失つて消えるのはアラガミと似てますね……魔石食わせたらオラクルとか回復しないかな……」

「止めてくださいね」

手に取つた魔石をマジマジと見つつ割とガチトーンで咳く仁慈から魔石をアスファイがかづぱらう。

無駄のない動きでそれをしまうと、彼女は改めて周囲を見渡した。

「それについても、今日はモンスターの沸きが悪いですね。何時もならもう少し遭遇するものなのですが……ここに来るまで戦闘したのが三回ほどだなんて……」

「そうですよね。いくらなんでも、元々居た世界みたいに十分その場に立つていればあつという間に囮まれるというレベルはないと思つてましたが、これは少なすぎますね」

「貴方の所は多すぎです。後、出来れば比較とか止めてもらえませんか？聞いているこつちが絶望してきますので」

「ですよねー」

オラリオに来てから一週間が経ち、ここ)の状況もある程度把握してきた仁慈は自分の居た環境がどれだけサツバツとしているかを自覚していた。魔法などという摩訶不思議なものがない代わりに、圧倒的な科学力から作られた魔法にも劣らない兵器でも対抗が難しいアラガミが複数で襲つてくるなんてどう考へてもおかしいに決まつている。

どこか微妙な空気になりつつも足は止めずどんどんダンジョンの奥深くへと潜つていく。

すると、ばさばさと翼を羽ばたかせ、上から降りてくる竜が現れた。

「インファンント・ドラゴン……」

「強いんですか?」

「上層では最も強いですね。それにレアモンスターでもあります」

「へえー……なんか、正統派ドラゴンって感じですね」

「…………ちよつと、何武器構えているんですか? 私達なら逃げ切れますから、相手にする必要はないんですよ?」

「あ、そなんですか?…………もう向こうはやる気満々ですけど」

「えつ」

指をさした方向には口を開き、炎を蓄えた状態でスタンバイするインファンント・ドラゴンの姿があつた。

その姿はどこか怯えているように見えるのはアスフィの見間違い

であると本人は思つて いたいようだが、そんな事は関係ないと放出されるブレス。そのブレスに神機を化け物のような口に変形させて突撃をかます仁慈、その表情はそれはそれは嬉しそうだつたという。

—— 榎原仁慈の戦いはこれからだ！

「いやー、インファンント・ドラゴンは強敵でしたね……」

「どの口が言うんですかね」

得意のブレス攻撃は全て神機に飲み込まれていき、尻尾や爪を使った攻撃はヒラリヒラリと回避される。

全ての攻撃方法が効かないとわかつたらすぐさま尻尾を巻いて逃げ出そうとしていましたからね。初めて見ましたよ。インファンント・ドラゴンの逃走なんて。

…………まあ、逃げ切れませんでしたけど。

翼を喰われ、地面に落ちたインファンント・ドラゴンの姿がそれはもう涙を誘う光景でした……。

榎原仁慈という存在の不条理さとか理不尽さとか意味不明さを改めて思い知らされるような出来事もありつつ、歩みを止めることなく進んでいく。

もう少しで十八階層にあるリヴィイラに着こうとしている段階で、私の前を行く仁慈さんが急に歩みを止めた。

「どうしました?」

「…………」

質問には答えず、近くにおいてあつた小石を拾い上げると、急に振り返ったのち、後方に向かつて小石を投擲した。

神の恩恵を受けていてもそう出せないであろう速度で飛来するそれはまつすぐ曲がることなく飛び、途中で両断される。

「……!?」

「さつきから尾行してた奴、でてこい」

彼の一言で観念したのか、彼曰くずっとこちらをつけていた人物が姿を現す。私はその人物を見て思わず声を洩らしてしまった。

「おうじや猛者オツタル……ッ！」

姿を現した人物は、このオラリオにおいて知らない人など居ないくらいの冒險者。

オラリオ最大にして最強のファミリア、フレイヤ・ファミリアの中で最も主神の信頼を受け、このオラリオにおいて最強の名を欲しいがままにする。

そんな化け物とも呼べる存在がそこに立っていた。

私、今日死ぬかも。

仁慈さんとオツタルが睨み合う中、ちょうどこの2人の中心部分に立っている私は思わずそう思ってしまった。

201

最強と最凶が交わるのは間違っているだろうか？

猛者オツタル。
おうじや

この世界の中でも、レベルの高い冒険者達が集まるところで知られるオラリオにおいて最強の名をほしいままにする冒険者。

そのレベルは現在認知されている最高レベルの7。

彼に肩を並べる人間はおらず、このオラリオに居る冒険者達の憧れであり目標でもある男。

そんなオツタルが現在対峙しているのは最近話題になつてゐる異世界からの訪問者樅原仁慈。

神の恩恵なしという圧倒的なハンデを背負つてゐるにも関わらず、並みの冒険者やモンスターでは相手にならないレベル5の一級冒険者を真正面から降した男である。

その技量に疑念を抱くところはなく、現在神々から最も恐れられている男もある。

オラリオ内でどちらも知らないものの方が少ない者同士の睨みあい。

中心にいるアスファイは本気で帰りたいと思つた。

「お前が、カシハラジンジだな」

「そうですけど……どちら様？」

仁慈の言葉には答へず、樅原仁慈本人であると言う確認を取つた瞬間に背中に背負つてゐる出刃包丁のような大剣を抜くとその剣先を仁慈に突きつけた。

「あのお方の命により、今からお前の力を試す」

「無視か……」

自身のかけた言葉を完全に無視して戦闘宣言とも取れる発言をしたオツタルに仁慈はがつくりと肩を落とした後、また話を聞かない勢かと呆れかえっていた。

「ちょ、ちょっと仁慈さん!? 流石にこの人は相手が悪すぎます！」

「アスフイさん知っているんですか？」

「知っているも何も、このオラリオ最強の冒険者ですよ。そして唯一のレベル7でもあります。こう言ってしまうのもなんですが、先日相手したティオナさんなんて目ではありません！」

「うえ……マジですか……でもこれどう考えてもこのままさよならできる雰囲気じゃなんんですけど」

そう言いつつアスフイと仁慈は同時にオツタルを見る。

彼は武器をこちらに向けたまま微動だにしていなかつた。一応構えるまで待ってくれるらしい。紳士である。不意打ち上等の仁慈にはなかなか出来ない芸当だ。

だが、そんな紳士な彼も逃げようとすれば最強の力を遠慮することなく振るうであろう。

何故なら、オツタルにとつてのあの方といえばフレイヤだけであり、彼が彼女の命令に逆らうことなどありえないからである。

「確かに……」

「力を図るだけだから、多分命まではとらないでしようし……とり

あえず、アスフイさんは下がつてくださいな」

まつたく氣負った様子もなく言い切る仁慈にアスフイの不安は最高潮まで達した。彼が強いのは知っている。そして、その強さに油断することなく全力で敵と戦っているのも知っている。何故ならそれはつい先程のインファンント・ドラゴンとの一戦で済みであるからだ。だが、オツタルはそういう次元ではないのだ。

あれは冒険者ではなくモンスターにカテゴリしたほうがいいのは?と思えるほどのものなのである。

「先手は譲る。全力で来い」

「なら、胸を借りるつもりで……行くぞ」

アスフイの疑念や心配など知ったことかと言わんばかりに仁慈は神機を構えたまま、地面を蹴り上げてオツタルに向かっていく。その速度はティオナと戦つたときよりもさらに早く、もうアスフイの目では捉えきれないほどのものであった。

しかし、最強たるオツタルには捕らえられる速度だ。彼は仁慈が近付くタイミングに合わせて出刃包丁のような大剣を横薙ぎに振った。

自分に向けられた斬撃に気が付いた仁慈はスライディングの要領でその斬撃を潜り抜けると、すぐさま跳躍、重力も合わせた一撃を頭上からお見舞いする。だが、オツタルは背負っていたもう一本の大剣をすぐさま引き抜き、仁慈の一撃を真正面から受け止めた、そのまま弾き返した。

体重も乗せた一撃だったが、大木のような豪腕から繰り出される力に押し負け、仁慈は後方にミサイルのように飛んでいく。何時ものようすに体勢を整えることが出来なかつたが、壁とぶつかる直前に神機をダンジョンの壁につきたて勢いを無理矢理殺し、なんとか激突だけは回避する。

そのまま突き刺した神機の上に立つた仁慈は相手であるオツタルをまっすぐに見つめると彼も同じように仁慈に視線を返した。その視線には、その程度かという落胆の色が浮かんでいる。

オツタルの心情を受け取った仁慈は、唇の端っこをニイと釣り上げると、地面に降りて神機を壁から引っこ抜く。直後、先程と同じようにオツタルに突っ込んだ。それに対する彼の対応は同じ横薙ぎの斬撃を放とうとしたが、

「——ツ!？」

フツと、視界から仁慈の姿が消え失せた。

一瞬にして捕らえられなくなり、焦りを覚えたオツタルだが長年の経験をもつて冷静を取り戻し、仁慈の気配を探ると彼の気配を感じたほうに体の捻りを加えた大剣を向ける。その後にトラックが高速で物にぶつかったときのような重量感のある音が響き渡る。そこにはお互いの獲物をぶつけ合いながら向きあう二人の姿があった。

アスフィイは、そんな2人を見ながら若干震えていた。この戦いで一番皺寄せを受けているのは間違いない彼女であろう。

さて、アスフィイが怯えていても関係ないと、武器と武器をぶつけ合う。しかし、ここで忘れてはならないのはオツタルにはもう一つ武器があるのだ。

彼は片方の武器で仁慈の攻撃を防ぎながらもう一つの大剣で仁慈を斬りつける。その出刃包丁のような刃が仁慈の体を真つ二つにしようとする。

が、その程度のことを予測できないほど仁慈は弱くはない。彼は神機を持っている左手を離してフリーの状態にすると、迫り来る凶刃を親指とその他四本の指で挟みこみ受け止めて見せた。

オツタルが大剣を動かしてみてもビクともせず、がつちりと固定されている。

硬直状態にあつた彼らだが、仁慈がオツタルの腹に蹴りを不意打ち氣味に繰り出した。大剣を止められたことに気を取られていたオツタルは不覚にもその蹴りを受けてしまう。二メートルはあるだろうその巨体を蹴り飛ばした仁慈はそのまま、オツタルに追いつき追撃としてもう一発蹴りを叩き込み、ダンジョンの壁にぶち込んだ。

猛者たるオツタルがブツ飛ばされ尚且つ壁に叩き込まれる。オラリオに住むものなら誰もが驚愕するであろう光景だが、オツタルのことを詳しく知らない仁慈には関係ないことだ。むしろ、まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！と言わんばかりに神機を咬刃展開状態にすると、オツタルが突っ込んだ場所を切裂こうと振るう。

この男、人型を相手するときは躊躇するがひとたび戦闘に入るとことん容赦がない男である。

一部の壁や岩を切りながら殺到した神機にオツタルは大剣の内の一本を両手で握つて受け止める。

そして、神機を受け止めた後、もう一本の大剣を仁慈に向けて投擲した。彼はこれを上半身をそらすことで回避するが、視線オツタルに戻したときには既に彼は仁慈の目の前まで来ていた。

それを確認するとすぐさま咬刃展開状態の刃を戻す。その時、伸びてきた刃が収納する際に神機に戻つてくるため、オツタルも収納に巻き込まれる可能性がある。

背後をチラリと見たオツタルはそのことを即座に予測すると仁慈の頭上を飛び越えて、彼の背後に刺さっている大剣を引き抜いて回収した。

回収し終えたときには既に体を反転させて、元に戻つた神機を構えた仁慈の姿が。

「…………」

「…………」

人智を超えたスピード下で行われた攻防にアスフイはもう何がなんだか分からなくなつてきていた。

だが、彼女を責めることは出来ない。

片や、オラリオ最強にして最も神に近い男。片や、神と恐れられるものたちと殆ど同じながらもその神々を刈り倒す、神に仇名す男。ぶつちやけ、どちらも人にカテゴライズしていいのか不明の化け物である。理解できないのも当然といえよう。

「…………オッタルと言つたな」

「…………」

「…………今日はここまでにしよう。武器のほうも限界だろう」

そう指摘する仁慈。オッタルは自身の武器の状況を見て驚愕した。そこには所々刃こぼれをしている自身の武器の姿があつたからである。ここ最近ダンジョンに潜つていなかからといって武器の手入れば怠つていない。であるならば、この傷は今の戦いの中でつけられたものなのだろう。

「…………その申し出を受けよう。今回は、お前の技量を測りそこなつた私の負けだ」

仁慈の力量を見誤つたとして自らの負けを認めたオッタルは二本の大剣を收める。それを見た仁慈も神機をそつと下ろした。

そのまま踵を翻し、ダンジョンの出口へと歩いていくオッタルだったが、ふと立ち止まると視線だけをこちらに向けて一言。

「次は、お互に全力で剣を交えよう」

それだけ残して、オッタルは去つていった。

仁慈はその言葉を聞いて少しだけ笑うと、アスフイを呼び出す。

そこから先、帰るまでのダンジョン探索はアスフイの説教をBGMとして決行された。仁慈は割とマジで反省したという。

「…………それでオツタル。彼はどうだつたかしら？」

バベルの最上階。いわずと知れたフレイヤファミリアのホームの一室に主神たるフレイヤの問いかけが反響する。

問われたのは、今日ダンジョンで仁慈と戦いを繰り広げたオツタルである。

「…………よい戦士でした。力と技量、双方共に高いレベルを誇つており、まさに戦うために生まれてきたといわれても納得できるほどの逸材です。今回の戦いも、全力ではなさそうでした」

「あら、並大抵のレベル5やレベル6もなぎ倒せる貴方がそこまで言うの？」

「……正直、あの者が本気で戦うことがあれば私やロキファミリアの勇者達以外は相手にならないかと」

「そう…………そうなの…………フフフ……」

オツタルの報告を聞いたフレイヤは、持っているグラスを手でもて

あそびながら考える。

「(強さとしては十分合格ライン。魂の輝きも鈍ることはない。むしろ、オッタルとの戦いを経てさらに輝きを増している……ああ……もう、我慢できない……)」

もてあそんでいたグラスを一気に傾け、中に注がれていたワインを飲み干すと、フレイヤはスッと立ち上がる。

「オッタル。彼を私のものにするために、近々会いにいくわ」

「かしこまりました。他のものにも伝えておきます」

「ええ、お願ひね」

飲み終えたグラスとワインを持つて部屋を出て行くオッタルを見送つたフレイヤは水晶に映るベルと仁慈を見る。

「(ベルのほうは後もう少し…………ああ、本当に楽しみだわ…………)」

水晶に映る彼らを撫でながらフレイヤは恍惚とした笑みを浮かべていた。

神機使いのオラリオでの日常

「アスフイさんまじすみませんでした反省していますなのでなんか機嫌を直してくださいもう耳元でずっと説教を聞かせないでくださいお願ひします今でも説教が流れてくるんです幻聴が途切れないとホント調子乗つて申し訳ありませんでしたあばばつばばばつばばつばばつばばつば」

「…………アスフイ。君は一体ダンジョンで何したんだ」

「…………と説教をしただけです」

ちよつとの説教で廃人が出来上がるわけがないだろう。普段飄々とした態度を崩さないヘルメスは内心でそう突っ込みつつアスフイの底力に心底戦慄していた。何をやらかしたのかはまったく分からぬが、自分も何かをやらかしたらそうなるといういい見本になつた。彼の犠牲は無駄にはしないと、うずくまる仁慈に黙祷をささげた。

「で？ 彼は一体何をやらかして君を怒らせたんだい？ 着替えでも覗いたか？」

「ヘルメス様じやないんですからそんなことされてませんよ。…………彼、ダンジョンで猛者と戦いました」

「へえー……猛者と戦つたねえー……は？」

見事な二度見を決めるヘルメス。その表情は珍しく、本気で驚いているような感じであつた。

それに対するアスフイの返答は、肯定。

「なるほど、フレイヤはこれが目的だつたのか……」

「彼と猛者をぶつけることが目的だと？」

「そう。彼女は気に入つた人……正確には魂だろうけど、それを見つけたとき、自分に相応しい実力を備えさせようとすることがあるんだ。今も、気に入ったベル君にちよつかい掛けているようだしね。ところで、仁慈君と猛者オツタルの勝負はどうだつた？見込みありのライン超えちゃつてたと思うかい？」

ヘルメスの問いかけにアスフイは全力で視線を逸らしたくなつた。
……彼女のステイタス上、完全に戦闘内容を把握することこそ叶わなかつたが、オツタルが言つた言葉は彼女も聞き届けていた。

——仁慈は、オツタルと互角以上。

これは本人も認めていたことである。

出なければ、今度は本氣でなどと再戦を申し出るようなことはしないだろう。

面倒ごとが加速すると分かつていても、神に嘘は吐けない。アスフイはヘルメスに自分の見たこと、聞いたことを全て話した。

言葉を聞くたびに、ヘルメスの表情が引きつっていくのが分かる。全て話し終わる頃には溜息を付いていた。

「これは完全に興味をもたれたね。まさか、猛者と引き分けるとは……」

フレイヤが仁慈のダンジョン入りに関与した時点で何かをたくらんでいるのは分かつていた。それを大して問題ないと考えていた。

大間違いだ。ヘルメスは何より、仁慈のことを完全に読み違えていた。最低でもレベル5？間違えてはいなかつた。いなかつたが……ヘルメスは正直、レベル6がせいぜいかと思つていた。恩恵なしならそのくらいが限度、むしろそのレベルにまで到達したことことが異常。

そう、考えていた。それ自体が間違いだつた。

仁慈は異世界の人間である。それをこの世界の定規で測つても、正しい結果が出るはずがない。まして、神として全人類の信仰を受けて、かなりの神格を有しているであろうアラガミなる存在を常日頃からバツタバツタぶつ殺している連中だ。最も神に近い男といわれるオツタルとも互角の勝負を繰り広げられるはずである。

何はどうあれ、神々を相手にしてきた存在なのだから。
ぶつぶつぶつと未だに咳いている仁慈に視線を送り、ヘルメスは彼の扱いを十分に考えてることにした。

彼らがダンジョンの中でオツタルと引き分けた翌日。ヘルメスはロキに昨日アスフイから聞いたことをロキに報告しに行っていた。理由はもちろん、彼女も巻き込むためである。こんな案件ヘルメス1人で抱えきれないの道連れにしに来たとも言う。

「んで、そのことを態々ウチに言つてどないするん？自分のところで抱えきれなくなつたから仁慈をウチのファミリアに移籍させてくれるとか？」

「残念ながら違うよ。…………道連れに来ただけさ」

「なんやて？」

「こんな案件俺一人で抱えきれるわけないだろう？」

「舐めどんのかボケ。今すぐ天界に送り返してやろうか」

「冗談、冗談。眞面目な話、どうすればいいのやらまつたくわからないんだ。だから、とりあえず相談しに来た。もし、この一件の隠蔽等に協力してくれたら、君達の遠征に仁慈が行くよう本人に進言してあげるよ」

「猛者と引き分けるくらいのやつが来てくれたそら嬉しいけど……大丈夫なんか？ 本人の意思とか？」

「心配ないよ。彼なら行ってくれるさ」

「そうか？ それならええんやけど…………いやいや、今はそんなことより、仁慈が猛者とひきわけたつちゅうことや。もしこれが本当だったら、仁慈排除の話は遠ざかると思うで。何せ対抗できるやつが限られどるし、その対抗できるやつを抱え込んだる神^{やつ}が排除する気なんて

まつたくあらへんからな」

「そうなんだけど、余計な勧誘や挑戦が後を絶たなくなると思うんだよね。君のところの大切断のときも本人が肯定するまでは荒れたから」

「今回の場合は噂の真偽が確かめようが無い。この町に居る連中は猛者と引き分けるやつなんて居ないと考えとる。正直広まつたら、挑戦者というかやつかみを受けることは確実やな。最悪、複数からの闇討ちもありうる」

「負けることは無いと思うけど、誰かがうつかり彼の神機に触れてしまつたら……」

「彼を生み出すような化け物がこの町に誕生することになる。この前の怪物祭の騒ぎなんて目じやないくらいの問題が起つて」

「…………」

「…………」

「是非とも内密に済ませようじゃないか」

「せやな」

こうして2人の神の会合は終わった。しかし、このときこの2人の会話を偶然にも耳にしてしまった人物がいたことをこの神たちはまだ知らない。

「…………な、なんかすごいこと聞いたやつたね、アイズ……アイズ？」

「…………」「

ヘルメスとロキの会話を聞いていたのはロキファミリアに所属する一級冒険者のティオネ・ヒリュテとアイズ・ヴァレンシュタインである。

彼女たちは自身のステイタス更新のためにロキの部屋を訪れていた。しかし、中には既に先客が降り、時間を改めようとした瞬間にロキのあの叫び声が聞こえたのだ。

だから、彼女達が部屋の外でちょっとと話を盗み聞きしてしまつてもしようがないのである。

ティオナは今聞いた話の衝撃を共に話を聞いていたアイズと共にするために彼女に話しかけるが、アイズは反応を返さずすぐにその場を離れてしまった。猛ダッシュで。

「あー…………これは、もしゃ」

ティオナはアイズが何をしにいったのか検討が付いているらしく、頭を抱える。しかし、頭で考えるのは彼女の得意とすることではないのですぐに考えを散らせると、面白そうだとアイズについていくことにした。

アイズ・ヴァレンシュタインは強さに並ならぬ執着を持つている。そんな彼女に、自分を簡単に一蹴できるであろうほどの猛者と肩を並べるものが近くにいるという報告を受けたらどうなるだろうか？

当然、会いに行つて戦うか教えを乞うに決まつている。

「と、言うわけでベルの特訓は中止してもいい?」

「何がどういうわけなのかさっぱりなんですが……というか、もしかして特訓しても限界が見え始めたから止めるとかそういうことなんですか!?」

「……違う。ベルはしつかり強くなつてる。でも、私も一緒に強くしてくれそうな人を見つけたから、その人に会いに行こうかと」

「そういうのは本人に許可とつてから言つたほうがいいと思うなあー……」

「うわあ!?.て、ティオナさん!?.」

「やつほーアルゴノウト君。ごめんねーウチのアイズが……なんか久しぶりにスイッチ入っちゃつてね」

「は、はあ……?それはいいですけど、その人は誰なんですか?」

「最近噂の檍原仁慈君だよ」

「えつ」

その人物の名前を聞いたとき、ベルは驚愕と共に深く納得したといふ。

こうして、三人の仁慈搜索が始まつたのである。

——一方その頃

「オッタル。行つてくるわね」

「行つてらっしゃいませ」

ローブを被り、自身の姿を隠したフレイヤも仁慈を自分のものとするために行動を開始した。

「おう、お前。あの大切断に勝つことがあるらしいな。てことは、
お前を倒したら――――――」

「別にティオナさんより強いことにはならないと思ひますよ」

「ガアア!?」

最近、絡んでくる冒険者が多い。

このオラリオに来て（不本意）からしばらく経ったため、ある程度町の中を1人で歩けるようになつた。そのためダンジョンに潜らな一日はたまに町の様子を見て廻つたりして いるのだが……先ほど行つたようによく絡まるるようになつた。前に絡まれたときも思つ

たけど冒険者というよりチンピラやゴロツキの間違いじゃないのかな。

「てめエ！なにしゃガツ!?」

「逆切れはダメでしょう」

襲つてくる連中を適当にあしらいながら町を歩くと、突然嫌な予感がした。アラガミと戦っているときに稀に感じる嫌な予感だ。

この勘は大体あたるので、進路を変更して別の場所を見て歩くことにした。

「しゃーおらー」

「はいはい、つよいつよい」

おかしいな別の道を進んでいるはずなのに、やつていることがさつきと変わつてないぞ。街角の死角から不意打ち氣味に殴りかかってきた冒険者の腕を掴んで投げ飛ばして地面に叩きつけて、顔面を踏みつける。二、三回踏んで静かになつたら再び歩き出す。

……周囲の人が若干引いているが気にしてはいけない。

何故なら、こうでもしないと何度も絡んでくるからだ。圧倒的な力の差を見せ付けないとこの手のやからは集団になつてさらに絡んでくる。このオラリオに来てから学んだことである。

……よし、元の世界に帰つてロミオ先輩やジュリウスが絡んできたら同じようなことをしてやろう。

「それにしても、ステイタスっていうのは本当に便利だよなあ」

三人目の冒険者とかいてチンピラと読む人物を地面に沈めながら、そんな事を考える。

ファミリアに入ることがまあまあ難しいだけで、神の恩恵を受けてから冒険者となるのは物凄く容易だ。だからこそ、その力に溺れて勘違いをし、墮落する人間も多く沸くのだと思う。

世紀末な世界観の極東より治安が悪いとかどうなつてんだよ本当に。ギルドとかその辺は取り締まつたりしないのだろうか……。

今日も、疑問が尽きない一日でした（小並感）

「…………」（ずーん）

「（すつごい落ち込んでる……）」

「（目に見えて落ち込んでいる）」

仁慈を捜し歩いていたアイズたち。

しかし、結局本人を見つけることは叶わなかつた。彼が滞在しているヘルメスファミリアのホームに行つてみても、出かけたといわれ、町の中を探してみてもそれらしい人物は見当たらなかつたのである。銀髪赤眼と目立つことこの上ない外見をしているのに見つけられなかつたため、ベルはともかくレベル5の2人は地味に傷ついていた。

現在はアイズが大好きなじやがまる君を三人でパクついている。

「今日はもう諦めて、明日早くにホームを訪ねればいるんじやないかな？」

ティオナの言葉とじやがまる君の効果で元気を取り戻したアイズ

は領いて、お詫びとしてベルと少し特訓をした後、自身のホームへと帰宅した。

ちなみにベルはなんだかんだデートっぽかつたので、思ったより楽しかんでいたという。

一方

こちらは仁慈に魅了を掛けて自身のファミリアに引き入れようとしたフレイヤ。

彼女は今日一日ローブで姿を隠しながら仁慈と遭遇できるように彼の行く先に待ち構えていたのだが、彼の謎勘で結局遭遇することは叶わなかつた。

「…………会えなかつたわ」

「……今度は、確実に会えるように拘束でもしておきましょう」

その日の夜。

若干涙目のフレイヤにオッタルがどう反応していいのかわからず動搖していたらしい。

1対3とかもはやいじめじゃないかな

「お久しぶりです。ジンジさん！」

「やつほー」

「…………おはようございます」

「何これどういうこと……」

朝起きてみたらロキファミリアのティオナさんと……アイズ・ヴァレンシュタインさん？とクラネル君が来ていた。ヘルメス・ファミリアに。

しかも彼らの様子を見る限りどうやら俺に用があるようだ。しかし、まったく心当たりが無い。ヘルメスさんが勝手に呼び寄せたのかと考え、彼のほうを見てみれば予想外の客だつたらしく目を見開いていた。ついでに冷や汗もたらしていた。

……アレは、何で来たのかは分からぬけれど心当たりはあるやつだな。

ついでにアスファイさんを見ると、こっちに目を合わせてくれなかつた。この人、分かりやすいなあ。

「おはよう。こんな朝早くから一体どうしたの？ヘルメスさんが迷惑掛けた？」

「ちょ!? 第一声がそれってどういうこと!?

「アスファイさんに教えられました」

「事実です。このファミリアで私の味方をしてくれるのは仁慈さん

だけですので、彼にはなるべく正しい情報を教えるようにしていま
す」

「なんのフォローにもなつてないんだけど……」

「当たり前です。してませんから」

主神の扱いに困惑するクラネル君。何、氣にすることは無い。何時
ものことだ。このファミリアの頂点はアスフィイさんと決まっている。
……決まっているんだ。誰もあの説教に勝てるものなど居ないので

(実体験)

「それで、御三方はどうしたんですか?」

アスフィイさんの恐怖を思い出しそうになつたので話をそらすこと
で何とか回避しつつ、彼らが朝早くからここを尋ねた理由を聞く。
すると、この三人の中で一番かかわりがないであろうヴァレンシュ
タインさんが、一步前に進んだ。

「……あの猛者と引き分けたって本当?」

「…………ああ、オツタルか」

猛者といわれてパッと浮かんできなかつた。

というか、何でこの人がそのことを知つているのか―――あつ

(察し)

先程、ヘルメスさんが冷や汗を流している理由が分かつた。この
人、誰かに話したな。ヴァレンシュタインさんが知つているというこ
とはロキファミリア、それも主神のロキさんに話をしたのだというこ
とが予想できる。

この2人はたまたまその話を聞いたのだろう。そして、何故かクラネル君を巻き込んできたと。

「え？ 仁慈君本当に猛者と知り合いなの？」

「つい一昨日、ちょっと肉体言語でコンタクトを取つた仲です」

まあ、進んで取りたいとは思わない意思伝達方法だつたけど。反応は鋭かつたけど、体が微妙についてきていたのが幸いだつた。もしアレで体の反応も付いてきたらさらにヒートアップしていたに違いない。様子見で本当によかつた……。

「へー……だつたらさ、この子達を鍛えてあげてくれない？ ついでに私も」

「えっ」

鍛えるといつても、この世界での能力値上昇の基準や、ランクアップに必要な偉業というのも基準が分からなさ過ぎて正直どのようにならいいのか未知数である。

ぶつちやけ、強い人同伴でダンジョンの深いとこ潜つてればいいんじゃないかな。この世界は便利なことに敵の強さがある程度分かるシステムになつてるし、自分より一つ二つの格上に挑んでいれば技術も胆力も能力も上がると思う。

「それはそうなんですが、冒険者は冒険してはいけないという言葉もあつてですね……」

「じゃあそれもはや誰なんですかねえ……」

やつぱりチンピラか？

というか、そもそも安全圏にいながら強くなろうというのがそもそももの間違いなのである。極東勢にそれを言つてみろ。鼻で笑われるぞ。

自分のレベルに合つたところでステイタスをあげて、次の段階にいっていたらそりや能力値にものをいわせたごり押しが横行するに決まっている。命を大事に、それは当然大事だ。だが、無茶をしなければ強さは身に付かない。というか、無茶くらいならバンバンするべきだ。無理は出来ないことだが、無茶はやれば何とかなるレベルだと俺は考えている。

「……なるほど」

俺の言葉を聞いてヴァレンシュタインさんはうんうんとしきりに頷いていた。クラネル君もどこか納得してるような表情を見せている。しかし、ティオナさんは微妙な表情をしていた。

「（実は昔のアイズはまさにそんな感じだったの。今では改善されときたけど、君の一言で再発したらどうするの!?）」

「（病気か。……ちなみにそれはソロで？）」

「（基本はそうね。たまに遠征に行つたときも有るけど）」

「だからといって1人でひたすら突き進むのもよくない。疲れた体で無理をすれば、効率が落ちるし、命の危険にもつながる。無茶をするなら計画的にしないといけない」

この一言を放つと若干しょんぼりするヴァレンシュタインさん。この人あんまり話さないけど分かりやすいな。

俺のフォローにティオナさんはぐつと親指を立てた。このくらい部隊長をやっている身としては余裕だぜ。彼女の親指に俺はドヤ顔

で返した。

「さて、強くなる方針はこんな感じですかね。参考になりましたか？」

「はい！ありがとうございます！」

クラネル君がすぐさま頭を下げる。その姿にはすぐく好感が持てるものであった。正直このままお帰りいただきたかったのだが、ヴァレンシュタインさんはその場から動かず俺をじつと見つめている。……これは何かしらのことを俺に求めている感じだな。経験から分かる。

「…………私と戦ってくれませんか？」

予想通り。

「正直、やる意味が無いので断りますね」

その顔止めて。

俺が断ると言うと、雨の中にダンボールの中で濡れている子犬のような視線を向けてきた。美人の彼女がやると罪悪感が半端じゃない。クラネル君とヘルメスさんからの視線が鋭くなつたような感じもある。これだから男は……。

「…………なんなんですかね。この空気。俺が悪いんですかね」

「さあ？」

「んー？どうだろうね……」

「……お願ひ」

なんだろうね。この人。

外見の割には精神年齢が低い気がする。どこかナナと似たような雰囲気だ。…………仕方ない。

「分かりました。一回だけですよ。ついでにクラネル君もどうだい？」

「え？ 僕もですか？」

「君も強くなりたいんだろ？ ど、かの誰かのように」

ヴァレンシュタインさんのほうを見ながらそう言うと彼はわかりやすいくらいに頬を赤く染めた。分かりやすい。

「じゃあ私も、参加するね。猛者と引き分けたんだから、そのくらいはいいでしょ？」

……やつぱり許可しなければよかつたかも知れない。

「じゃあとりあえず、どちらかが武器を放すか降参したら終了ということで」

ヘルメスファミリアの開けた場所で、仁慈とアイズ、ベル、ティオ

ナの四人は対峙していた。

一応、武器は自前のものではなく訓練用のものを使用している。だが、冒険者である彼らが使えば立派に人を殺せる武器となりうるので扱いには注意しなければならない。主にベルが死なないように。

「いつでも初めていいですよ」

訓練用の木刀を構えつつ、仁慈は言う。

その態度は、この町でも上位の実力を持つ二人と、注目を集めるルーキーを同時に相手することに何事も思っていないようで地味に彼らのプライドを刺激した。

「そんなこと言つてもいいのかな」

「…………」

「…………行きます！」

アイズが先行して仁慈に突撃を掛けてその後ろにティオナとベルが続く。アイズのステイタスから為される速度を乗せた剣戟を軽く受け流す仁慈。このままではジリ貧となってしまうだろうがこの模擬戦、アイズには味方が居る。

「ちょっとアイズばかり構うとか焼けちやうなー」

アイズの背後で追随していたティオナが背後に回りこんで、武器を構える。ベルも彼女に合わせてナイフに見立てた武器を仁慈に振るっていた。

三方向からの同時攻撃。唯一の武器はアイズの攻撃を防ぐのに使つており、残る二つの攻撃はどちらも死角から、普通であればここで決着が付く布陣だ。

——だが、猛者オツタルと引き分けたものが普通であるわけが無い。

アイズの攻撃を自身の木刀で受け止めると、体を半回転させてティオナの武器を握っている手を持ち、自分の体に当たらないよう軌道をずらすと共にベルの一撃を防ぐ。

ステイタスの差、そしてこの場で急遽作られたコンビネーションだからこそ出来る隙を利用した防御だった。

『!?

まさか防がれるとは思わず、一瞬だけその動きを止めてしまう。そんな彼らに構うことなく仁慈はアイズの攻撃を防いでいた腕に力を入れて、アイズを押し返す。その隙にティオナを地面に転がすと、ひよいと武器を奪いつつベルの武器に先ほどアイズの攻撃を防いでいた木刀をふるつて武器を弾き落とした。

一瞬にして2人を無力化されて少々動搖するが、そうでなくてはと考えを改めるアイズ。

「目覚めよ」

テンペスト

魔法を発動して自分の武器に風を纏わせる。これにより、武器が弾かれ難くなると同時に相手の武器を破壊という形ではあるが失わせることが出来る。

ルールでも特に魔法発動の制限はなかつたため問題は無い。問題は無いのだ。

「そういえば魔法なんなものがあるんだつけ……」

そんな事を呟きつつ彼は攻撃に移る。

彼は対人戦において自分から攻撃するということをしない。オツタルのときは例外だったが、基本は相手の出方を見てから攻撃に移る。

それは何故か？

理由はひとつ。攻撃のタイミングや呼吸、リズムを盗むためである。人に限らず敵と戦うときはまず観察する。そうすることで相手のしたいこと等を読み取ることが出来るのだ。つまり、仁慈が攻撃に廻るということはすなわち――相手の攻撃タイミングと呼吸、リズムを把握したことに他ならない。

だからこそ、彼の攻撃は翻すことが難しい。

相手の視界に入らない足捌きと、呼吸のタイミングを合わせることで自分と相手の境界線をあいまいにすることからなる気配遮断。傍から見ていればどうってことの無い動きでも、相対している相手からはまるで消えたように映るのである。

アイズも、自身が築き上げてきた経験から半ば無意識に背後に剣を振るうが、そこに仁慈は居ない。

彼女の死角となるぎりぎりのサイドを取つて、木刀を首に突きつけた。

「……降参」

「はい、お疲れ様でした」

こうして彼らの模擬戦は終わったのである。

「……すごい」

自身が目指しているアイズ・ヴァレンシュタインをも圧倒するその力。そして、それを自らひけらかすことをしない態度。倒れたティオナへと手を差し伸べる紳士的な行動。どれをとっても、彼が目指す英雄の姿に仁慈はとても似ていた。

「クラネル君は平気でしたか？ 誤つて手に攻撃をしていたりとかは……」

「え？ ああ、大丈夫です。しつかり武器だけ弾かれちゃいました」

「まあ、予想外のことが起きて固まるのは分かりますが、これで勝つたとは思わないほうがいいですよ。防がれた場合対応が難しいので」

「身を持つて知りました」

「アイズさんはガンガン行き過ぎですね。せっかく三人も居るんですけどから、多少の様子見くらいはしたほうがいいかと」

「ありがとう」

「ティオナさん。背後からの奇襲に声出したら意味ないですよ」

「いやー……つい、ね」

仁慈とティオナが会話しているのを見ながらベルは思う。近いうち、この人に付き添つてもらつて彼の言う、計画的な無茶をやつてみようかと。

……まあ、主神とベルを担当しているアドバイザーはかなり怒ると
思うが。そのときのベルはまったくそのことを考えては居なかつた。

バレなきや問題ないんですよ

「えつ、クラネル君がほかのファミリアとボヤ騒ぎを起こしたって？」

「そう。面白いだろ？」

ある日、森の中ではなく俺がお世話をなっているヘルメスファミリアの中。今日も今日とて真面目すぎるがゆえに苦労と精神負荷を抱え込んでいる可哀想なアスフィイさんの手伝いをしていると、急に仕事場にやつて来たヘルメスさんが俺にそのようなことを報告してきた。

あの、よっぽどのことがない限りは自分から戦うどころか争うことすらしなさそうなクラネル君がボヤ騒ぎ、しかも暴力沙汰とはとても信じられないものだつた。ここ最近は彼の訓練的なものをヴァレンシュタインさんとティオナさん付けて行つてるので人柄とかも正確に把握できている自信がある。まあ、だからこそ驚いているのだけど。

「で、それを話した真意は？」

「そのベル君が喧嘩をしたところがね。アポロンファミリアなんだ」

「だから何ですか。ここに来て間もないでの、ファミリアの名前で言われても困るんですけど

「実はアポロンは自分の気に入つた奴は多少強引な手段を使つても自分のもとに引き入れようとするやつでね。ベル君はレベル2までのランクアップが世界で最も早かつたレコードホルダーなんだ。つまり……」

「今回のことを出汁に、クラネル君の引き抜きを行うかもしれない」と……そういうことですか？」

俺の言葉にヘルメスさんは頷くなどと言つたわかりやすい肯定はしなかつたが、浮かべていた笑みをさらに深くした。相変わらず質の

悪い神である。これが敵だつたら情け容赦なく斬れるくらいだ。

「今物騒なこと考えてなかつた?」

「いえ、ただあなたが敵だと容赦なく斬り捨てられそうで助かるな、と」

「(敵対しなくて本当によかつた……ツ!)」

ヘルメスさんがどんでもなくほつとしたような表情をしていた。どうしたのだろうか。

——この時、仁慈は不思議に思つてゐるがヘルメスがほつとするのも仕方のないことである。彼ら神だつて、自身にある色々な柵を無視することができれば冒險者や人間を屠ることなど容易いことだ。何故なら、モンスターとダンジョンで正面切つて戦う冒険者は彼らの力のおかげで成り立つてゐるからである。だが、ヘルメスの前にいる仁慈はもはや神殺しという概念が人の形を得たものと言つても過言ではない存在となつてゐる。そのため、どれほど力が強かろうと、神である段階で仁慈にはかなわないのだ。それが分かつてゐるからこそヘルメスは仁慈を味方に引き込んでおいて正解だったと安心した。

閑話休題

「おつと、話がそれたね。実はこれだけで話は終わらないんだ。これ、なーんだ」

そういうつてヘルメスさんが懐から一通の手紙を出す。

無駄に装飾が入つてゐる手紙で、差出人の少しでも自分の見栄えをよくしようとする欲が透けて見えるかのような手紙だつた。

しかし、これは何だと聞かれれば、今の話の流れから答えは一つしかない。

「件のアポロンファミリアからの招待状と言つたところですか」

「そう、正解。なんでも今度アポロン主催で宴を開くらしくつてね。こつちにも招待状が回つて來たのさ。しかも、眷属を一名同伴させる

ことができるという事項まで書いてある」

手紙の内容を聞いて俺は明らかにクラネル君をはめるためということが確認できた。確かに彼らのホームは二人だけで、眷属同伴ということ残るは無人のホームとなる。ここで誰もいないホームをぶつ壊したりすれば精神的なダメージを負わせ、さらに優しいクラネル君がヘスティアさんのことを見遣つて自分のもとに来させることも可能だとパツと思い浮かんだがすぐにその可能性をうつけした。

ぶつちやけ、今までして手に入れた人材が素直にアポロンファミリアのために働くのはどう考えても無理だからだ。

頭を振つて今しがた思い浮かんだ愚かな考えを忘れようとするが、ヘルメスさんはそんな俺の考えを見透かしたように言つた。

「多分、当たつてると思うよ。その考え方」

「え、っ」

「アポロンはね。そこまで思考を巡らせるのが得意じゃないんだ。もつと言うと馬鹿で短絡的なんだ。ちよつとのことすぐ切れることもあつてね」

「うわあ……」

ほんと神様つて碌な奴がないなあ。

目の前にいるヘルメスさんと話を聞いた限りのアポロンという神のことを聞いて思わずそういう感想を抱いてしまう。

それと同時に、どうしてヘルメスさんがここまで面白がつてているのかが理解できた。つまるところ、彼はこの一連の騒動を楽しんでいるのだろう。どこかクラネル君のことを気にかけているところもあるヘルメスさんだ。彼がさらなる厄介事……いや、成長の機会と言い換えた方がいいか。そういったことに遭遇し、どう乗り越えていくかを楽しみにしている風に感じることができる。

「で、貴方がそのことを質悪く楽しみにしていることはわかりましたけど、どうしてそれを俺に報告するんですか」

「いやなに、自分の抱いている感情を共感してもらうために話するのはよくあることだろ?」

「それを行うのは基本的に女性に多いみたいですよ。あと、俺はあ

なたの楽しいという気持ちに全く共感できません」

「あつはつは。そうかそうか」

ヘルメスさんは最後にひとしきり笑つていくと部屋を出ていった。本当に何しに来たんだあの人。

ヘルメスさんの所為で止まっていた作業を再開すると、先程まで離れた場所で仕事をしていたアスファイさんが俺に近づき小声で言つた。

「多分、仁慈さんにあのことを話したのは巻き込む気満々だからですよ」

「まさか」

これはまた……どうにも面倒なことになりそだと俺はため息を吐きつつ作業を再開した。

「ということがあつたんだ」

「……」

目の前には楽しそうな笑顔を浮かべるヘルメスさん。そしてアスファイさんの手伝い中の俺。数日前と同じような状況だが、話の内容はかなり違つていた。

クラネル君を狙つているアポロンという神が開いた宴でアポロンはヘスティアさんにクラネル君を景品とした戦争遊戯というものを仕掛けたらしい。その戦争遊戯というのは神の代理戦争で、いわゆる眷属同士が戦うというもの。勝った方は相手のファミリアからなんでも得ることができるらしい。それをクラネル君が欲しいためにヘスティアファミリアに吹つ掛けたという話をされた。どう反応しようと。

「でもさ。ヘスティアの眷属はベル君だけだろ？ 戰争遊戯の内容も

攻城戦で、一人ではどうしても無理な内容だ。だから、僕らをはじめとする神が公平を期すために助つ人制度を設けたんだ

「それは聞きました。確か、助つ人にするならこのオラリオ外のファミリアから一名でしたつけ？」

「そうだよ。アポロンもなかなかせこいよねえ……」

「どうでもいいですけど。それが何か？」

「でもさ。これはファミリアから助つ人を選ぶ場合で、ファミリアに所属していない人物に助つ人を頼むときは、別にこの街からでもいいんだよ」

「…………」

話が読めたぞ。

つまりヘルメスさんはこういいたいわけだ。俺にクラネル君の助つ人をしに行つて来いと。別にそれ自体はかまわない。武器だって誰の手にも触れさせないことを条件とするならば、ここに置いて行つて無手で戦つてもいいから問題ない。

けど、俺が何よりも気になるのは彼の心情なのだ。彼はクラネル君の成長を心から楽しみにしている節があつた。今回のことと彼にとつてプラスになると感じているからこそ楽しみにしていたに違いない。しかし、そこに俺が助つ人に入るとどうなるのだろうか。自惚れるつもりはないけれど、ぶつちやけ俺はそちらの冒険者に束になつてかかるつこれても普通に倒す自信がある。この前戦つたオッタルレベルの奴が複数人出てきたらかなりやばいけど、あいつはこの街の冒険者の頂点らしいしそれはない。まあ、俺も万能じやないからかなりの準備をして臨むけれども……。

「いいんですか？ やるからには手を抜きませんけど」

一応、助つ人の範疇を出ないくらいの活躍にとどめるけど、負けないよう最大限努力するつもりだ。今まで通りの成長は見込めない可能性があるんだけれど。

「かまわないよ。アポロンのところに彼が行つてしまつたらどちらにせよこれ以上の成長は見込めないだろうから」

だから――ここで言葉を切つたヘルメスさんは真っ直ぐに、

珍しく真面目な瞳を俺に向けてきて、言つた。

「ヘスティアにはもう話を通してある。彼女も手段は問わないらしい快く受け入れてくれたよ。あれは相当キてるね。……だから、彼らの戦争遊戯に助つ人として参加してくれ」

「別にかまいませんけど……俺の顔、割れてるんじやないんですか？」

「大丈夫だ。この世界にはね。色々便利な変装道具があるんだよ」
この街にはないけどね、とヘルメスさんは言葉の最後にそう付け加えた。

なんだかんだで、この時、俺の戦争遊戯の参戦が決定した。

戦争遊戯（笑）

戦争遊戯。それは神々の代理戦争。自分たちの眷属により行われるものである。

そして今日はアポロンファミリアとヘスティアファミリアの二つのファミリアによつて行われる戦争遊戯の日である。内容は攻城戦。意味は読んで字のごとく、城を攻める戦いということである。攻め側はヘスティアファミリアというかなり公平さに欠ける勝負だ。

それはなぜか？何を隠そつ攻め手であるヘスティアファミリアは団長のベル・クラネルしかいない超小規模ギルドだからである。一人で城を攻め落とせという無茶振りとなつてゐるのだ。本来であれば、勝敗が分かり切つたつまらない消化試合になつてしまふのだが、ここでベル・クラネルが今まで結んできた縁が活きてくる。これにより、勝率が0%を越え、勝てる可能性がわずかでも生まれた。

そのことを聞いた神々も少しひここの出来レースが面白くなるだろうと熱を取り戻し観戦している。

さて、色々言つてきたが簡単にすると意外と多くの人が注目していゝ戦争遊戯が今日始まるということだ。そんな今回の戦争遊戯が開始される直前、この勝負を観戦している神々はもちろん、戦うこととなる両神の眷属たちですら注目する存在が居た。

「……」

ここに来てから無言を貫くその存在に、誰もが目を奪われていた。外見は簡単にいうなれば継ぎ接ぎだらけの兎といったところだろう。ところどころつなぎ目が見え、どこか人形のようである。全長は二メートルを超える、二足歩行。

これは注目されても仕方がない。事実、その兎を見ている人たちの内心は完全に一致している。

『（一体何者なんだ……）』

ゲームとは言え、今から始まるのはお互いのファミリアの未来をか

けた戦いと言つてもいい。そんな中明らかにキグルミっぽい奴が居たのであればこうなるのは必然と言えるだろう。件のキグルミ本人はまったく気にしていないのかボーッと突つ立つたまま微動だにしていないが。

そんな異質ともいえる空氣の中、キグルミに近づく影があつた。

ヘスティアファミリア団長、ベル・クラネルである。彼は耳があるだろうと思われる部分に口を寄せて小声でキグルミに話しかけた。

「あの、助けてくれるのは嬉しいんですけど、何故このような恰好を？」

『正体がばれないようにちょっと変装』

ベルの問いに返つてきました答え。それは白いプラカードに書かれていた文字だった。どうやら声も聽かれたくないらしい。ベルは苦笑した。それと同時にこれ以上何も訊かないことを決めた。

ベルはキグルミの中身を知つてゐるためそれで納得したのだが、彼を助けるためにヘスティアファミリアに入ることとなつた仲間たちは不審者@キグルミが気になつて仕方がないらしくたまらずベルに問いかけていた。

「なあ、あれは一体何なんだ？仲間なのか？」

「うん、相手が出してくれた助つ人枠で来てもらつた人なんだ。実力は折り紙付きだよ」

「…………大丈夫なのか？本当に」

ベルを助けるために彼の元へとやつて來たヴエルフはキグルミに視線をぶつける。そこには変わらずボーッと立つてゐるキグルミの姿があつた。覇氣のかけらもなかつた。

「うん平氣」

一応ベルが信頼に足る人物であることが分かつてゐるヴエルフはひとまずベルの言葉だけで納得することにした。

攻城戦が始まつてからしばらくして、ベル達ヘスティアファミリア

は神々の予想を裏切り善戦していた。ついでに謎の助つ人キグルミも善戦していた。ごく少人数にも拘わらず頭を使つたプレイで城の中に侵入し勝利条件である特定の人物撃破のために奮起していた。

一方キグルミは、その目立ちすぎる外見がゆえにベルたちの方法では城の中に入ることができなかつた。なので彼は自分を囮とすることで数による不利をひっくり返そうとした。

その具体的な方法は……

「ヒ、ヒィ……！」

「来るな……ツ！ 来るなアー！」

「俺のそばに近寄るなああああああああああ！！」

片つ端から敵を倒していくことである。

二メートルにも及ぶキグルミを着ていて、戦う前まではまともに動くことすらできないと思われていたキグルミが多くのファミリアメンバーを倒していく様は、アポロンファミリアに危機感を抱かせ、自然と彼に戦力が集中しつつあつた。二メートルのキグルミが無言で迫つてくる……その光景も相俟つてどんな効果を發揮している。

「くそつ、何だアイツは!? あれだけ重そうなもんを着てあの動きとかどうなつてんだ!?」

「動きが三次元的すぎて捕らえられない……！」

アポロンファミリアの面々とて黙つてやられるつもりはない。恐怖心に駆られながらもしっかりとキグルミ目掛けて攻撃を仕掛ける。だがキグルミは床を蹴り、柱を蹴り、天井を蹴り、プラカードを操つて確実にアポロンファミリアの人員を倒していった。

「何で攻撃が当たらないんだ!?」

「この人数でこの空間だぞ!!」

「こいつを止めろ! 団長のもとに行かせたら俺達負けるかもしけないぞこれエ！」

室内ということで、限りのある空間。そして孤立してゐる状態……にも拘らず倒されていくのはアポロンファミリアの面子のみ、もはやこの場にいるほとんどの人間はまともな思考すら危うくなつてきていい

た。主に恐怖で。

『いらっしゃいませー』

と書かれたプラカードで次々とアボロンファミリアの団員を地面に沈めていくキグルミ。結局、この戦争遊戯が終わるまで彼はひたらプラカードで無双を続けていた。

そして伝説へ……

アポロンファミリアとヘスティアファミリアの戦争遊戯の勝者は、自分たちの不利な状況をあの手この手でひっくり返したヘスティアファミリアだつた。

団長であるベルがアポロンファミリアの団長と一対一で戦い、レベルの壁を超えて掴んだ勝利である。弱者が強者を倒す英雄譚が好きな大衆、そして神々はこの結果に湧かざるをえなかつた。変なキグルミこそ居たものの、実際に勝利を掴んだのは、レベルの差を覆したベルだ。文句などではるはずもなかつた。

まあ、圧倒的有利な状況で敗北したアポロンは周囲の神々から尋常じやないくらいに煽られていたが。

そんな中、独自に動き出そうとしていたものたちが居た。それは勿論キグルミの戦闘能力に目をつけた神々だつた。あれほどの力を持つとんでもなく面白い存在を神々が放つておくはずがなかつたのだ。しかし、彼らがキグルミの元へと向かつた時には既に、彼の姿はなかつたという。

――――――

「あつはつは！ 予想以上だつたね！ 実に笑わせて貰つたよ。くつくく
……」

「少々笑いすぎではありませんか？ ヘルメス様」

「これが笑わずに居られると思うのかい？ この見た目での動き、あの無双っぷりだよ。特にあの時のアポロンの顔なんて本当に面白かつた。あつ、やばい。思い出しただけでも腹が……ぶつ、www
www」

「はあ……」

ヘルメスさん笑いすぎイ！

確かにキグルミで戦うなんてのは常識では考えられないことだろうけれども。耳が生えている人が最強名乗つてているんだし、キグルミが強くてもいいと思うんだけどなあ。実際に、俺のいた世界のキグルミは滅茶苦茶強かつたし。

——場所は俺がお世話になつているヘルメスファミリアのホーム。そこでこのファミリアの主人であり、アスフイさんの苦労の元凶たるヘルメスさんは、先程俺が乱入した戦争遊戯でのことを思い出して大爆笑をしていた。幾ら何でも笑いすぎである。アスフイさんが嗜めるものの一向に収まる気配はない。まあ、この人はどうせ後でアスフイさんからの折檻を食らうことになるのだろう。南無。

俺はそんなヘルメスさんから視線を逸らし、先程まで自分がその身にまとつていた継ぎ接ぎだらけのうきぎを見やる。どちらからどう見ても俺がいた世界に存在していたキグルミそのものである。正直、これがどうやつて作られたのか、かなり気になる。素材もそうだが、何よりどうしてこんなデザインにしたのだろうか。もつとマシな外見があつたと思うのだけれど……。

と、割りかしどうでもいいことに思考を割いていると、唐突にヘルメスさんが口を開いた。

「そうだ仁慈君、折角だし、後もう少しの間だけその格好で過ごさないかい？」

「何でですかね」

別に構わないけれども。これを着ていれば少なくとも、自分が上だと信じて疑わない冒険者（チンピラ）から絡まれにくくなりそうだ。その分、普通の人からの接触も激減しそうだけれども。

それに、ヘルメスさんは愉快犯の気がある。何かしらの理由があるわけではなく、面白そうちからでやらせることも十分に考えられる事であると睨んでいた。

「いや、別に俺が楽しみたいとか、そんな理由じゃない。ごめん、嘘言つた。7割くらいはそうだ」

「殆どじやないですか。いい加減、恩を盾に仁慈さんで遊ぶのは止め

て下さい」

「自分の主神にそこまで言うかなあ、普通。つと、そうじやなくて。君にはそのキグルミを餌としてちよつとばかしタチの悪いファミリアを発見して欲しいんだ」

飄々とした雰囲気を一転、眞面目な雰囲気を醸し出したヘルメスさんは言葉続ける。

「今日のアボロン達もそうだけどね。最近、あんな感じで行われる強引な勧誘や、冒険者でない人への被害が急増してきてね。ギルドでも手を焼くレベルなのさ。こういったことが繰り返されると、冒険者全員の信用にも関わってくる。かといって、こんな事態で動く冒険者達は……今はなくてね。戦争遊戯で知名度をあげた。キグルミに、この役目をやつて貰いたい」

なるほどね。やっぱり勘違いしている冒険者は多いのか。ま、今までとは比較にならないくらいの力を急にポンと手に入れたら大半の人間はそうなるだろう。だからと言つてやつていい事にはならないけれど。

本来ならこういつたことは部外者の俺がやるべきことではないのかもしれないが、俺自身もこの街の治安には思うことがある。こういつたことは早め早めに対応しておいたほうがいいだろう。後の火種とさせないためにも。

「別に構いませんよ」

「ありがとう」

こうしてキグルミ（俺）の街取り締まり的な何かが始まつたのであつた。

その後、オラリオではある噂が立つようになつた。

曰く、それは正義の味方。

曰く、それは地獄からの使者。

曰く、プラカードを携えた継ぎ接ぎだらけのマスコット。

呼び名は多々あれど、共通していることは、その者が悪質な冒険者

を始めとする悪人達を取り締まっているということだ。その噂の広がりようは尋常ではない速度で浸透していき、瞬く間にオラリオ中に知れ渡つた。

その強さはまさに無双。言葉の書かれた白いボードを振り回し、悪質なもの達を突き上げ、虐げられるものを助ける姿はまさに弱き者を助ける英雄だつた。

故に、何年か後、このキグルミが町中の誰もが知っている存在となつた時、子どもに聞かせる言葉としてこんなものが語り継がれるようになつた。

——悪い子にはキグルミがやつてきて成敗されてしまうのよ、と。

キグルミ。アラガミが闊歩する未来の地球においても一際謎の存在は、樫原仁慈という人間のせいで、異世界において、ナマハゲもどきのヒーローと成つてしまつたのであつた。

人類最新のキチガイが往くgrand order 特異点が往く特異点F

目の前には死が迫っている。

巨大な体躯を持ちながら、視界に収めることができないほどで動く黒いナニカ。

まるで斧のような物を振り下ろし、ここまで自分のことを守つてくれていたマシユを吹き飛ばした人ならざるもの。

もう、展開が早すぎて理解が追いつかない。

半ば拉致のようにしてやつてきたカルデア。奇跡も魔法もあるんだよ！と言われてなりゆきで戦ったシユミレーション。しりあいになつた女の子。全てを吹き飛ばす爆発。そして……今居る燃える街への転移。

全部が全部、生まれてから20も経っていない僕では処理できないようなものばかり。さらに言つてしまえば、燃える街で歩く動く骨とかも出てくる。

極め付けには目の前に迫つてゐる絶体絶命の状況ときた。途中で拾つた所長もブルブル震えているだけだしもうどうしようもない。

——けれど、

『立香君！今すぐ撤退してくれ！流石に無茶だ！』

僕が強制的に引き連れられてきたカルデアという組織の中でもまともに接してくれた男の人、Dr.ことロマニー・アーキマンがそう訴えてくれる。確かに、僕は生きてこのかた喧嘩だつて数えるくらいしかしたことがない。ましてやこんな化け物相手に戦えるほどの技量も度胸もない。

でも、今ここで僕が引いたらここまで僕のことを守つてくれたマシユはどうなる？ヒステリックでちよつとうるさいけど、それでも色々教えてくれた所長はどうなる？……想像なんてしなくともわか

る。

……そういう結末なら否定しなくちゃいけない。』“どんな時でも進み続けること”それが家の家訓であり、僕のお父さんの信条。僕の唯一無二の誇りなんだから。

この燃える街、冬木に来た時に拾った虹色に輝く石を4つ握りしめ、気絶してしまったマシユが落とした盾を地面に刺す。ロマニが言っていた。この盾が召喚サークルというものを作り出し、人類史に刻まれた偉人……英雄を呼び出すことができるって。

『ちよ！立香君、そこは特異点Fの中でも一段と空間が安定している所だよ？そんなところで英靈の召喚なんて……ほぼ不可能だ！』

可能性があるなら大丈夫。

どうせこのままいけばあの化け物に殺されるんだ。なら、可能性に向かつて進むしかない！

僕は祈るように、自分の中にある全てを込めるように4つの石を投げる。すると盾を起点とした魔法陣じみたものから強烈な光が溢れ出してきた。それはやがて3つの輪つかを作り素人の僕でもわかるほどのエネルギーを発生させる。

あの化け物もこちらに気づいたのか、恐ろしいほどの勢いを伴つて僕の方へと疾駆する。よし、マシユの方に行かないならやつた甲斐があつた。ある程度片付けたらマスターである僕に対して襲い掛かってくると思っていたんだ。

そうしている間にも召喚サークルは起動し続け、やがて金色のカードが姿を現した。何かが描かれているのかは分かつたけれど詳しい内容まではわからない。ただ、そのカードに向かつて今まで無造作に放出されるだけだったエネルギーが集まっていく。

エネルギーはやがて形を作つた。それはよく見慣れた形、けれどこの特異点Fと呼ばれる街では一向に見なかつた形。

『■■■■——！』

化け物が斧のような武器を今度は僕に振り下ろす。僕自身にそれを防ぐすべはない。このままいけばあつさりとあの攻撃を喰らい、自身の中身をぶちまけるに違いない。でも、そとはならなかつた。化け

物の振り下ろしたもの。その軌道を遮るように、横から一閃が刻まれたのだから。

「折角休めると思ったのに、気がついて見れば何処もかしこも燃え上がる世紀末世界。アラガミの姿は見せずとも、黒い靄のような人型が一体。休みをもらつた直後に毛色の違う化け物の相手をさせるとか世界つて鬼畜う……」

声が聞こえる。

死が溢れるこの場に全く相応しくない緊張感に欠けた声。けれど、何処か安心する不思議な聲音。僕はその声の主に視線を向ける。

——彼はマシューの盾を起点として作り上げた召喚サークルに立っていた。

その第一印象は、若い。年齢は僕と変わらないくらいだろうか、10代前半のように思える。そのある程度整つた顔立ちからも大人になりきれていない幼さが見て取れた。

服装は僕自身が想像していたものとは大きくかけ離れたものだつた。人類史に刻まれた英雄。そのワードから昔の人が出てくるのかと思っていた。しかし、目の前の彼は鎧というようなものはつけていない。服装は白い上着に動きやすい素材でできているであろうズボン。現代に混ざっていても違和感のない服装だつた。特徴的ということで強いて挙げるなら、上着の背中にある狼の紋章だけ。ぱつと見た感じ街で見かける若者にしか見えない。けれど、彼が持つている武器が一般人ではないかという懸念を否定している。

「いや、今はそれどころじゃないか。……後ろの君がオレのことを呼び出した、ってことでいいのかな？」

「えつ、あ、はい」

唐突に話しかけられたことで驚いきつつ答える。すると、僕が呼び出した英雄と思いし彼は一度こちらに笑顔を見せるとそのまま化け

物に向き直った。

「よし。サーヴァント、バーサーカー。真名は……まあ、今はいいか。取り敢えず、マスターは気絶している彼女と震えているだけの彼女を連れて少し離れといて。ここはこっちが受け持つから」

まるで氣負いしていない風に彼——バーサーカーは言った。

僕は一目散にマシユに駆け寄り、彼女を背負いこむ。意識のない人が重いつているのは聞いたことあるけどこれは予想以上だ。なんて思ひながら僕は所長のところへと向かっていく。

「あつ……えつ、えつ……？」

「所長、ここから離れましよう！」

放心気味だからか所長は素直に動いた。

正直ここでヒステリックになられても困つたのでとても助かつたと思つた。

?????????

「すゞい……本当に英靈を呼び出した……」

一方、犯人が誰だかわからないテロに晒されたカルデアの管制室で一人、立香やマシユ、オルガマリーの存在証明を行つている医療チームの代表であるロマニ・アーキマンは立香を通して現在彼らが置かれている状況を確認していた。

映像に映るのは立香が呼び出した英靈。だが、ロマニにとつてあれが本当に英靈なのかと言うことが判断できなかつた。

それは彼の外見が原因だ。しかし、それは若い見た目が原因ではない。英靈をことサーヴァントは生前の全盛期の形で現界するため、若い見た目で出てくるのは当然だ。だが、彼の持つてゐる武器。あれが彼の頭を悩ませてゐる原因である。見た目は人の身長ほどありそうな刀なのだが、持ち手のところには円形のシールドと思わしき物体が付いていた。

それだけに留まらず、銃身のようなものまで顔を出していくとすればいよいよ持つてお手上げである。人類史に刻まれた英雄の中に、刀

身、シールド、銃身を全て兼ね備えたマルチ武装を使った存在なんていないので。そもそも、あんな現代的な武器を使うような英雄、ロマニは数多くの人が知らない。

「唯一の救いは立香君に協力的なことだけど……」

そのような事を考えながら、ロマニは立香が召喚したサーヴァントのステータスを確認する。強さの基準となるそれを確認しておかなくてはいざという時の為になると知っているからだ。

「つて……ええ!? ゼ、全ステータス平均Dだつて……!?

ロマニは立香が呼び出したサーヴァントのステータスに絶句する。平均値Dというステータスは決して高い方ではない。いやむしろ下の方から数えた方が早いレベルの値だ。

「これは大変だぞ……！」

はつきりとロマニは分かつた。

ステータスから考えれば、デミ・サーヴァントになつてしまつたマシュよりも低いかもしだれない。どれほどの技量を持ち、偉業を成したのかはわからないが、希望的観測よりも絶望の方が大きかつた。

「ああ、くそっ」

しかし、そこまで考えたとしても今の彼にできることは何もない。実際にレイシフトしたわけではない彼にはここで見守ることしかできなのだ。ロマニはその悔しさから思わずいらだちを口に出してしまつた。

????

『——■■■■!!』

「おお!? 早い！ 重い！ ついでにこの身体動き難い！ 一体何がどうなつているんデイスカ!?」

召喚された現代風の英靈、バーサーカーによつて後方へと下がつた立香とオルガマリー。自分達の命運を先程知り合つたばかりの人物にかけなければならぬということから真剣に事の成り行きを見守つていた彼らだったが、少しだけ、本当に彼に任せていいのだろう

かという懸念を抱き始めていた。

『■■■■■■!!』

「うぐっ!?」

空を裂きながら振るわれた斧にも似た大剣にバーサーカーは吹き飛ばされる。人智を超えた力を受けた彼はその身体を宙に躍らせ、そのまま廃ビルの壁の中へと突つ込んでいった。

「ちよつとお！やられているじゃないのよ!!」

「所長、落ち着いてください……！」

頼みの綱であるバーサーカーがあつさりと吹き飛ばされた為に元々肝の据わっていないオルガマリーは錯乱し、召喚者である立香に文句をぶちまける。立香も立香で自身が全力で呼んだサーヴァントがあつさりと吹き飛ばされて内心焦っていた。

しかし、黒い靄を纏つた巨大な何かは一向に立香達を襲おうとはしてこなかつた。只バーサーカーが吹き飛んでいつた廃ビルに対しても身体を向けるだけ。

様子がおかしいこと気づいた二人だったが、その疑問は直に解けることになる。

廃ビルの残骸が弾けると同時にそこから超高速で人型の何かが飛んでいく。そして、そのまま自身の身長程ある大剣を振り下ろした。

『■■■■■!!』

「——フツ……！」

黒い靄の化け物は軽くバーサーカーの斬撃を受け止める。体格から見て分かる通り、筋力差には天と地ほどの差が存在しているのだろう。

「——フツ……！」

筋力差が分かつてもなお、バーサーカーは武器を引かせることはなかつた。むしろそのまま自身の刃を突き立てんとどんどん力を入れて、黒い靄の化け物を切り裂こうとする。

『■■……■■■■!!』

変化は直に訪れた。

先程まで余裕で対応しているように見えた黒い靄が、苦しそうに声

を上げたのである。立香とオルガマリーがよく見てみれば、バーサーカーが構えている武器から黒いナニカが相手の身体に絡みつき、その肉体を貪っている光景が目に映つた。オルガマリーは速攻で目を逸らす。

「あんた、『神様』の系列……もしくはかなりの信仰を受けていたと思う。それは凄いことなんだろうけど……残念、それが敗因だ」

鎧迫り合いをしているバーサーカーの武器。その刀身がだんだんとその姿を変えていく。刀身たる大剣の部分が消えて、それを覆い尽くすように黒い口が出現する。見る者全ての恐怖心を刺激しそうな口は、徐々に大きく開いていき――

『■■■■……』

——黒い化け物を一口に飲み込んだ。

????

「改めて、バーサーカー。ステータスは……うん、色々残念なことになつてるので誠心誠意頑張させていただきます」

「態度が180度変わったわね……」

所長がバーサーカーの態度に対してもツッコミを入れているけど、確かにそうかもしれない。さつきまでは普通にため口で話してくれていたのに急に敬語使いだした。……一体何があつたのだろうか。

「ん? ああ。先程は色々と切羽詰まつていたので素が出ましたけど、基本的にはこんな感じですよ」

「えーっと……別に無理して敬語を使わなくてもいいですよ?」

「そう? ならそうしようかな。マスターとサーヴァント? つていうやつの関係は信頼第一つて貰つた知識に在るし」

「あ、あの……初めて。この度はマスターを救つていただき本当にありがとうございました!」

「サーヴァントなんだからマスターの為に戦うのは当たり前でしょ

(聖杯の知識では)だから気にしなくても無問題

まだ疑問は多々ある上に所長がしつかりと真名を聞いておいてと言っているけれども、今僕達がするべきことはこの特異点Fの搜索である。ということを話すと所長も渋々だけど納得してくれた。尤もバーサーカーが怖いのか僕とマシユを挟んで歩いているけど。

黒い靄の化け物と戦つたという経験のお陰が、マシユはこの後出来た黒い靄を纏つたサーヴァント達とも危なげなく戦つていた。一応、僕もマスターらしく礼装やら何やらで戦いをサポートする。

一方バーサーカーは英靈として呼び出されるだけあり、戦いは慣れているらしい。“キリエライトさんの方についていてあげて”とこちらを気遣つてくれた。

その後元々この特異点Fで聖杯戦争をしていたというキヤスターに遭遇し、この特異点Fからの帰還方法と思わしきことを聞いた。それはここで行われている聖杯戦争を終わらせること。キヤスター曰く、今残っているのはセイバーと目の前にいるキャスターのみ。彼らはセイバーに倒されて今まで戦つてきた黒い人型みたいになつてしまつたという。

このように向こうは聖杯を手に入れるためにキヤスターを狙つてくることは間違いないらしい。彼はこの聖杯戦争を終わらせたい。僕達もこの空間に在る異常を無くしてカルデアに還りたい。利益は一致している為に一時的に契約を交わすことになった。

「んで、今までそつちで会つたサーヴァントはなんだ?」「多分だけど、ランサー、アサシン、ライダー……そしてバーサーカーよ」

「はあ?あのセイバーですら手こずり、ついでに引き込んだとしても放置するしかなかつた野郎をあんたらがやつたっていうのか?」「僕らがやつたというか……バーサーカーが一人でやつたという方が正しい、かな?」

キヤスターは僕の言葉を聞いて視線をバーサーカーに向けた。彼はキヤスターというけれども、どちらかと言えば僕は戦士のように見える。なんというか、カルデアに居る魔術師みたいに『いかにも』という雰囲気を感じないのだ。どちらかと言えば、戦場に出て戦いと思つてそうだ。

「へえ……あのバーサーカーをね。いやあ、惜しい。もしランサーの姿で現界していたら是非とも一戦交えてみたいもんだ」

「勘弁してくださいよ……あの戦いだつて結構ギリギリだつたんですねから。たまたま相性が良かつただけです。じゃんけんみたいなもんですよ」

????

キヤスターに連れられて天然の洞窟のような所を歩く。

途中、セイバーに倒されて今までの英靈と同じく黒化していたアーチャーに遭遇したのだが、キヤスターが自分の力をみせるデモンストレーションとして戦い、接戦を制して勝つていた。

「あの野郎……露骨に手を抜きやがつたな……。チツ、まあいい。もうそろそろ大聖杯、この冬木市で行われている聖杯戦争の元と今回の親玉セイバーが待つてる。途中でやつぱやめたってのは当然なしだ。……覚悟はいいか？」

「…………うん。問題ないよ。何時でもどうぞ」

「私も、大丈夫です」

「その反応の速さはいいね。新米マスターにしては上出来だ……そのヒステリック入っている姉ちゃんは大丈夫か」

「大丈夫なわけないじやない……。でも、行かなきやいけないのよ……。それに、立香が行くのに私だけ引けるわけないじやない。責任的な意味で」

オルガマリーの反応に立香とマシューは苦笑を溢した。キヤスターは不敵に笑い、バーサーカーも小さく肩を震わせている。戦いの前に弛緩した空気が漂うもののそれを咎めることはしない。

キヤスターも地元でなければ戦場に慣れないモノ達を気遣うこともあるし、バーサーカーもそれは同じだ。英靈に押し上げられるほど の者達なのだから。

「これが聖杯……？これ、超抜級の魔術炉心じやない。何でこんなものが極東の島国になるのよ？」

『こと、物作り……特に改良で言えば極東は超弩級の変態国家ですよ。尤も作つたのは魔術教会に属さないアインツベルンという鍊金術の一族のようですけど』

「悪いがおしゃべりはここまでだ。奴さんこつちに気づきやがった」

キヤスターが忠告を促したことで全員が警戒態勢に入り、ロマニがモニターからサーヴァントの反応を探し出す。

『いますね。大聖杯の前に。靈核は……変質していますが確かにアーサー王のものです』

「油断すんなよ。相手は魔力放出でカツ飛ぶ化け物だ。お前らが遭遇したバーサーカー。あれと対峙するつもりで行け」

全員が自分の武器を構え、アーサー王ことセイバーに警戒する中、只当の本人は面白いものを見つけたとばかりに少しだけ口角を緩める。

「——面白いサーヴァントがいるな」

続けてセイバーは語る。

マシユが持つその宝具は面白いと。己の剣で試すだけの価値があると。

「構えよ名も知らぬ小娘。その守りが真実かどうか、私の剣で確かめてやろう」

「——マスター！」

「ああ、負けるものか！」

セイバーが自身の代名詞。約束された勝利の剣を構え、自分の魔力を巡回させる。それに合わせるかのようにマシユも後ろに存在する

自分の仲間を、マスターを護るために魔力を回した。

「卑王鉄槌。極光は反転する。光を呑め――――

「宝具――展開します……！」

人智を越えたサーヴァント達が繰り出す己の全て。

アーサー王のそれはまさに大災害そのものだつた。線上にあるものは例外なく薙ぎ払い、衝撃波だけでも肌が焼けるような熱量を立香は感じた。普通の人間がいていい場所ではない。それは魔術にかかわりがなくたつて、常日頃から戦場に身を置いていなくても理解できることだ。正直、恐ろしいと思つてはいる。

〔約束された勝利の剣!!〕

〔――つ、ああああああああああああああ！〕

けれど自分よりもそれを感じてはいる子がいる。

今も尚、震える体に力を入れて全てを薙ぎ払う魔力の塊に立ち向かっている子がいる。立香は理解していた。だからこそ、恐ろしくても態度には出さず、彼女に尤も近い所でその魔力の塊と対峙する。

〔――つう……!〕

が、一朝一夕で技術が身につかないように。たつた数時間前にサーヴァントとなつたばかりのマシユにアーサー王の宝具を受け止めることは困難だ。

〔令呪を以て命ずる〕

マシユだけでは難しい。それはあの場に居た誰もが言つていたこと。ならばどうするか？単純な話だ。一人でやらなければいい。彼女一人で難しいのであれば自分も力を貸せばいい。都合のいいことに立香の右手にはそれを可能にするものが在るのだから。

〔――シールダ――全力で防いで!!〕

〔――はああああああああああああああ!!〕

立香の右腕から三画ある令呪が全て消え、彼の身体からごつそりと力が抜ける。初めて感じる喪失感に膝を付きそうになるが、寸でのところで足腰に入れるおして歯を食いしばる。

未だなおマシユが宝具を受け止めているのだから自分が先に潰れるわけにはいかない。

永遠にも思える時間が過ぎ、何とか彼らはアーサー王が放った宝具を凌ぎ切った。しかし二人はもう既に限界。マシユは盾を使って自分の身体を支え、立香は立つているのがやつとの状況だつた。

「凌ぎ切つたか。だが、一度で満足されでは困るぞ。小娘」

対してアーサー王は未だ健在。

防ぎ切られたことに対する驚きをみせることはなく、淡々と第二陣を用意していた。黒く染まつた聖剣に再び魔力が集まつていく。

そして魔力がたまつていくにつれてマシユと立香の顔に絶望の色が濃くなつていつた。

「お替りだ。卑王鉄槌。極光は——」

「無粹な」

しかし、英靈と呼ばれる者達はそのくらい慣れている。二段構えなどは当たり前、追い打ちなど対策をしていない方が悪いのだ。

マシユが防ぎ切つたと同時に地面を蹴り、今の自分にできる全力で疾駆していたバーサーカーの凶刃がセイバーへと襲い掛かる。セイバーはバーサーカーの斬撃を見切り軽く剣で弾いた後に、そのまま魔力放出で加速させた斬撃をバーサーカーの腹に叩き込もうとした。

「アンサズ！」

「小癪」

「ちつ、平気な顔して切り裂きやがつて」

キヤスターが作り出した僅かな隙を利用してバーサーカーは距離を取る——など、することはなく逆にそのまま懷に潜り込んだ。彼が扱っている武器は自身の身長もある大きなもの。その分小回りなどは聞かず、間合いも自然と開けてしまうものだ。

「自ら優位な距離を捨てるか」

「——スウ……！」

戦いに身を置く物であれば下策と罵るだろう。嘲笑うだろう。そ

れもそのはず、どちらかと言えば彼は化け物退治で名を上げた英雄であり、対人戦は専門外。処理として人を殺したことはあれど、戦いの中で殺しをしたなんてことはないのだ。ないのだが……彼はあることで有名だった。

「——ツ!?何……!?

腹に感じる衝撃を受けてアーサー王は初めて動搖を表に出した。素早く自身の身体を確認してみれば、少々へこんでいる鎧と、自分の腹と接触している銃身が目に入った。聖杯の知識から銃という武器は知っている。銃に刃物を取り付けた銃剣という武器も知っている。だが、完全に銃と剣を分別し、尚且つ変形可能な武器などそんなものはなかつた。

「貴様……一体何だ」

バーサーカーは質問に答えることはない。彼が返すことは言葉ではなく攻撃。銃に変化させた武器を再び剣に変形させて下から振り上げる。セイバーは聖剣で斬撃を逸らしてそのままバーサーカーの腹に蹴りを放つた。

華奢な身体からは想像もできない威力を受けたバーサーカーだったが、一番初めに対峙した冬木のバーサーカーとの戦いから、己の武器を地面に突き立てて後ろに抜けていく衝撃を無理矢理受け止めた。「おいおい、戦い方がなつてないぞアンタ」

「対人戦はまるで経験がなくて……」

「えええ……」

キヤスターも呆れ顔だが、一方でセイバーはバーサーカーのことを警戒し始めた。彼女にはもはや未来予知といつてもいいほどの直感がある。靈基が反転しスキルが降格したとしても高いランクを保持している。その精度は本来の靈基と謙遜ない。

「（……謎のサーヴァントと人類最後のマスター、そしてあの盾を持つ小娘……か。面白い）」

セイバーは彼らのことを考えて、もしかしたらと思い始めていた。

彼らであれば、完璧とも言える偉業を成し遂げたモノと対応できる

かもしれない。どの歴史にも存在しない英靈と、不完全な英靈。そして一般人のマスター。継ぎ接ぎだらけの張りぼてもいいところだが、だからこそ完全な一と対立できるかもしれない、そんな夢物語を思い描いてしまった。

彼女が見据える先には、体勢を立て直した素人丸出しの主従と、戦い方を教えるキャスターに教わるバーサーカー。正直何が何だかわからない光景だ。でも、だからこそ……。

「……フツ」

「あん？ どうしたんだお前」

「なに、戦場で漫才を始めた貴様らが滑稽で仕方なかつただけだ」

言つて鼻を鳴らす。

その間に立香とマシユが合流する。未だ息が上がつているがそれでも戦えるようになつたようだ。

「漫才の礼として休息は取らせた。これ以上無様な戦いを披露してくれるな」

「ハン。のんびりしてくれる時間をくれるなんてお優しくなつたじゃねえか。どうした、長らくボッチで居たから友達でも欲しくなつたのか？」

「これは余裕というものだ。……改めて聞こう。諦める気は？」

『ありません』

「……そうか。ならばもう一度全力で挑むがいい。抗えなければ死ぬだけだぞ」

????

「……」

レイシフト、という転移を終えてカルデアという場所へと帰つて来たマスターとキリエライトさん。そしてオルガマリーさん。彼らは

特異点Fのことを踏まえてこれからのことを考えていいくらしい。

それはいい。こつちだつて考える時間が必要だ。

サーヴァントとして割り当てられた部屋のベットに寝ころびながら自分の状況を整理する。

まずこの世界にはアラガミは存在していない。まあ、それは年号を考えれば自然なことなんだけど、それ以外にもこの組織みたいに魔術という奇跡も魔法もありそうな概念や聖杯と言った万能の願望機もあつたりするらしい。うん、どう考へても別世界だ。そんなものがあれば極東支部があそこまで修羅の国になるわけがないし。

「これからどうなるだろうか」

きっと彼らはこれから焼却された人類史を救うために戦うことを選ぶだろう。俺だつて呼ばれたからにはそれ相応の仕事はするさ。社畜なめんなつて話だ。けど気になることがいくつかある。

俺の持つている武器がロングブレードのこと。
動きが少々悪いこと。

俺の眼が金色に戻つてゐる事。
この辺のこともこれから分かつてくるのかね。

「まあ、何とかなるだろう」

……一先ず対人戦の訓練したほうがいいかもしねない。
初めてのことながら妙に焦らない気持ちを不思議に思いつつ、今後の立ち回りについての考えを巡らせるのだつた。

特異点F（後）

「オレの真名？ああ、そういうえば言つてなかつたつけ……」

「うん。何だかんだでの時は聞いている余裕がなかつたから」

唐突に藤丸立香こと人類最後のにしてオレのマスターである彼が部屋に突撃し、そのようなことを言つてきた。あの状況はかなり余裕がなかつたから身命とか後にしたんだつけと言われて気付く。

ま、別に隠すようなものでもないし普通に言つてもいいか。尤も、ここはオレの居た世界の過去……どころか別世界の可能性もあるから知つてるのは思えないけどね。

「なら改めて、サーヴァント・バーサーカー。真名は■■■■■。英靈というより社畜よりのピーキー性能だけど、マスターのことは全力で守るから」

「…………えつ」

「ん？」

こちらの言葉に首を傾げたマスター。もしかして俺は胡散臭いのだろうか。えつ？というような反応をされるくらいに信用がないのだとしたら流石に凹むわ。

「ごめん。僕は普通の高校生だったからアメリカ語はちょっと……」「落ち着けマスター。日本語だから。むしろアメリカ語つて何？」

「日本語？……取り合えずもう一回言つてくれない？」

「■■■■■」

「……聞き取れない」

反応を見るにオレをからかっているわけではないようだ。本気で困惑している様子が見て取れる。一瞬だけ世界が違うから通じないのでと思つたが、今現在会話が成立していることからその可能性はないと言つていいだろう。

「……まさか、自分の名前が放送禁止用語になつているとは思わなんだ……」

この扱いには流石のオレも切れそうだ。何が悲しくて自身の名前

を放送禁止用語にされなくちゃいけなんだ。名前を呼んではいけない人の人つてか。アレと同じ扱いとか起訴案件なんだけど？

「き、気持は分かるけど元気出して……」

「うん。ありがとう」

マスターの優しさが五臓六腑に染み渡る。

もしこの場にキチガイバナナや気狂いスク水が居たら、指を向けられながら思いつきり笑われることになるだろうから。あいつらオレの仕事を増やすばかりか、ストレスまで与えてくるからな。仕返しだけどさ。

「真名、言えないの？」

「言えない……というよりは発音できない。むしろ聞き取れないって表現する方が近いかも。別にオレの真名なんて隠すレベルのものでもないし」

「聞いておいてなんだけど真名つてそんな軽い感じで教えようとしていいの？自分の弱点とかばれる可能性あるつて聞いたけど」

「むしろオレの名前を聞いて弱点分かるくらいの人があいたら知り合いに成りたいレベル。知る人ぞ知るつて領域も超越したどマイナー英靈だから大丈夫大丈夫。それよりも呼び名がないと不便……だよねえ」

「うん。流石にずっとバーサーカーと言うわけにはいかないからね。多分これから先、同じクラスの人を呼び出すかもしれないし。そもそも一人だけクラス呼びは……」

傍から見たらいじめっぽいもんな意地でも名前で呼ばないなんて。オレは気にしないけど、人畜無害。善良市民を地で行くマスターの精神的にろしくないとだろう。

「ならいつそ仮名でも付けようか。マスター、何かいい名前ない？」
「犬猫ならともかく英靈に名前を付けるなんて色々間違っている気がする……所長あたりが聞いたら卒倒しそう」

マスターが提案を受け入れることはなかつた。英靈に呼び名を付けるなんて恐れ多いとのこと。別にそこまで大した英靈じゃないんだから気軽にしてもほしいんだけどね。とにかくここは自分で考える

ことにしよう。

ということで、自分の頭と聖杯からの知識でいい感じの名前を考えてみる。すると聖杯からの知識がこれがいいよと一つの名前をピックアップしてくれた。お前、そんな機能あるんか。とりあえず聖杯の知識がとてもなく押してくるこの名前にしようじゃないか。

「名前、決まりました」

「今更だけどこの会話取つてもおかしいよね」

人類史に刻まれた名前を自ら改変していくスタイル。こんなことしてるからきっとキチガイなんて言われたんだな（）

「何はともあれ。三度改めて……仮名はメアリー。メアリー・スー。スーって短い呼び方が個人的にはお勧め」

「……………ペット感凄いなあ」

おっと、それは言つてはいけないお約束だぞ。マスター。

「ど、いうことでこれからバーサーカーはスーさんと呼ぶことになりました」

「いきなりとんでもないこと言つて来たわよコイツ！？レフ！私を助けて！」

「所長。彼は自分から裏切り者つてことを白状した後にバーサーカーによつてカルデアスへと旅立ちましたよ」

「分かつてるわよ！」

所変わつてここはカルデアの管制室。

カルデアの存在意義である人類の決定的な滅亡以下略を実行するにあたつて尤も重要な役割を担うものが数多く存在する心臓部。

現在、裏切り者の教授レフ・ライノールが行つた爆破で壊れてしまつた機械類の修理と、これから行うことになるレイシフトに支障が出ないよう慎重なチェックが行われている。

そこにやつて来たのは藤丸立香。彼は元々オルガマリーとロマニから召喚したバーサーカーが余りにも不透明すぎて色々聞いてくれ

と言われてたため、先程の名前の件を含めて報告しに来たのだ。

「まあ、騒いでいる彼女は置いておくとしてだ。どうだつた立香君。君が呼び出した初めてのサーヴァントは」

言い合いをしているオルガマリーとロマニを無視して、カルデアに置いて三人目のサーヴァントとして呼び出されたレオナルド・ダ・ヴィンチだ。彼女だけはサーヴァントとして呼び出されたにも関わらず、歴史に一切その名前が載っていない彼に不安ではなく興味を抱いていた。

「話していた感じ、何というかとても僕達に近い感だつたよ。価値觀がずれた感じもしなかつたので、ダ・ヴィンチちゃんが言う通り現代のサーヴァントの可能性は高いと思う」

「だろうねえ。彼の言語には聖杯の知識だけではカバーできないズレを全く感じなかつたからね」

「それだけでよく分かつたわね……」

「天才っていうのは1を知ると10発展させるものさ。この程度のこと朝飯前だとも」

ドヤ顔で言う自他共に認める天才。ロマニはこの時、何時かこいつもこのうざさを思い知ればいいのにと考えていた。

「しかしわからないことがある。彼のあの武器だ。どうやらただの武器ではないらしいよ。傍から見ただけだが、機械というよりも生体兵器っぽかつたね。実に興味深い！……まあ、触らしてくれなかつたんだけど」

「読み取れるのはパラメーターだけなのよね」

「はい。彼のことについてはステータスが辛うじて分かるくらいです」

立香の言葉でダ・ヴィンチへ注目が集まる。彼の武器の本質を一瞬で見抜いた天才の観察眼に誰もが期待していた。しかし、彼女の口から出てきた言葉は彼らが望んでいるものではなかつた。

「残念ながら、流石の私もある短期間で彼の全てを察することはできない。できないが……唯一言えることがある。彼はこちらが不信感を持つていてることに気づいている。その上での対応をとっている」恐らく本人も分かっているのだと彼女は語った。自身の性能は自分がよくわかっている。それはダ・ヴィンチ本人にも言えることだ。自分がどう思われているのか、実際に自分がどこまでできるのか。それすらも把握できないようでは英霊に慣れれない。

「……そうですか」

「間違いないよ。だからね立香君。君だけは彼を信じて居なくてはいけない。召喚した者として、マスターとして……自身が召喚した英霊は信じて居なくてはいけないよ。そうしなければ人類が今まで積み上げて来たものに押しつぶされてしまうからね」

「——はい」

立香はダ・ヴィンチの言葉を深く胸に刻み込んだ。その心構えはこれから自分を支えてくれると思わせるものが合つたからである。ちなみにその話をすぐ隣で聞いていたオルガマリーとロマニは気まずそうに目線を逸らしていた。

ちなみに、疑いの目で見られていることに気づいているバーサーカー改め、メアリー・スーは……自分が最初に所属した場所でもこんな扱いだつたなあと懐かしみを感じていた。